
普通を求めた最強異常者

こどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通を求めた最強異常者

【Nコード】

N1994P

【作者名】

いづら

【あらすじ】

俺は異常だった。異常ゆえに親に捨てられ、一人で生きてきた。最後は子供を助けてあっけなく死んだ。しかし筋肉達磨（神様）に生き返させられたが……、頼むから普通の世界にしてくれ

ブローグ

いきなりだが俺は死んだ
そして目の前には

土下座する筋肉達磨のおっさんが・・・、なんだこれ

「すまない！、ホントにすまない！」

土下座していた達磨がいきなり近寄ってきた。てかおい

『近寄んな達磨——！！』

「あべしつ！！！！！！！！」

俺の振り抜いた拳がクリーンヒットして達磨は飛んで星になった

「ちょっと話聞いて、おじさんの一生のお願いだから」

星にしたはずが走ってきて必死に頼むもんだから話くらい聞いてやるか

『うち、わかったよ。ところで達、あんた誰だ？』

「ちょっと、達ってなんだ達って」

『気にすんな達磨のことだ』

「達磨ってわしか！ まあいい私は神だ」

『もう一回飛ぶか？』

「すいません、でも事実なんです」

俺が拳を構えると土下座した。威厳もクソも無いな

『はあ、で、神様がなんのようだ、さっさと天国か地獄に行きたいんだけど』

「それなんだが・・・、お前自分の死因分かるか」

『ああ、ガキ助けてしんだんだろ』

ベタだが道路でひかれそうだった子供を助けて死んだガラじゃねえ事したな

「そつだ。だが本当はまだお前は死ぬはずじゃ無かったのだ」

死ぬはずじゃねえ、どうゆうことだ

「お前の異常なまでの力があれば両方生きたはずなんだが」

『死んだと』

「そうだ。だからお前には違う世界で生き返ってもらおうと思ってな」

別に生き返えらなくてもいいよ。何処に行っても俺は・・・

「安心せい、お前の世界の漫画で めだかボックス という世界じや」

めだかボックス？確か俺みたいな異常なやつが出てくる漫画だった気がしたな

「そこならお前も自分の力を気にしないで生きられるだろ」

いやいや次こそ普通に生きたいって

『俺は普通に生きたいんだ。もっと普通の世界にしてくれや』

「他は・・・、ほれ」

ドラゴンボール

FF

俺に死ねと

『やっぱ、生き返らなくていいや』

「めだかボックスの世界に行ってらっしゃい」

『話聞けや——!!』

いきなりの浮遊感と共に下に空いた穴に落ちていった最後に見えたのは、ムカつく笑顔だった

設定（前書き）

設定を子供と大人に分けます

大人の設定は後から書きます

設定

破神恭闇

はしんきょうや

まあ子供のころの主人公ですね。前の世界では異常のせいで親に捨てられ、友達も居なかったので異常を表に出したくない。しかし友達が困ったりしていたら異常を使いたくないと言いつつ見捨てられない。元々頭はいいのに転生者ということで精神年齢もさらに高くなっています

異常性

究極「アルティマ」

物事を究極に行う事が出 来る異常性。前に生きて いた時からあった力。

ま、最強ですな

過負荷

???

まだ判明してないものです。これは成長してから発生しますので、お楽しみに（これについては前の設定を見た人は分かると思います）

設定（後書き）

これからもよろしくお願いいたします

1話 ここからか!?(前書き)

少し直しました

1話 ここからか!?

ある家で我ら主人公は目覚を覚ました

『（ん、俺は、何で寝てたんだ？）』

まだまだ覚醒してない頭で思っていると、知らない声が聞こえた

「おお、目を開けたぞ。おい、目を開けたぞ！」

「ほんと！かわいいわ」

見たことのない男が目の前に現れた。しかもその男の呼ぶ声で見たことのない女まで来た

『あぶあぶあ・・・、ぶ？「誰だこいつら・・・、ん？」』

何かおかしいぞ

ふとまだ余り動かない頭で横を見ると鏡が、その中には

『あぶばー！ー！！「何じゃこりゃー！ー！！」』

見事なまでの赤ん坊がいた

どうやらこの2人がこの世界の俺の親のようだ。それにしても

『（何で赤ん坊からスタートなんだよ）』

頭が一瞬で覚醒して、自分の今の状態が解ると一気に不機嫌になった。てかあの筋肉達磨、次会えば殺す

残念ながら会うことはないわい。ホッホッホ

何かイライラする声が聞こえた気がしたぞ

まあ多分気のせいじゃないだろうな。それにしても目覚めてからは酷い目にあつた。

あれは思い出したくもない

食事時

早速だが腹が減った。まじでやばいつて

おそらく一人で何か出来るだろうが（もうすでにチート）普通の子

供だと思われないからな、しかし

『（ヤバイなーおい。腹へりがピークを迎えてるぞ。そっだ、念じる俺！念じれば気付くはずだ。うおおおおおおお！」』

するとそれに答えたのか神が救いの手を差し伸べた

「恭闇ご飯の時間ですよ」

何と都合よく母親が来たのだ

『（来たー！ー！ー！ー！ー！まじで来たぞ！念じてみるもんだな。神様ありがとうございます。あ、でもあの筋肉達磨以外な）』

ピンチから抜けれたと喜んでいたのも束の間、一気に地獄に落とされた

「はい」

『（はい？）』

これは呆然となっても仕方ないだろう。だっていきなり乳を出したんだぞ

『（しまったー！。この年だとまだ離乳食じゃねえじゃねえかー！ー！ー！）』

彼は重大な事を忘れていたのだ

『（ちょ、タンマ、まじでストップ。これだけは勘弁してください、

バンジージャンプでも何でもやるから・・・、やっぱバンジー無理)

□

ホッホッホ

何か聞こえたぞ！！！！やつかまさかまた筋肉達磨のせいか！！！！次会ったらマジで殺す！！！！　って、待って近づけないで！！

「どうしたのかしら？飲まないわ」

必死に逃げていたが、ふと動きが止まった

□（待て、このまま逃げても始まらないじゃないか、しかし・・・・、ええい覚悟を決める！さらば、俺の何か）□

暫くお待ちください

やばかった。精神に9999のダメージを受けたのようだでもこれはまだいい方だった

トイレ時

1つの危機が去ったがまた新しい危機が現れた

『「やばい、腹が一杯になったらトイレに行きたくなってきたな。まあ行くかな、ん」』

何か忘れてるような気がするな・・・、あ

『あぶぶばーーぶば！！！！「行けねえーじゃねえか！！！！」』

俺はバカか！！どうやってトイレに行くつもりだったんだ。今さら気付いた真実だった

『（やばいな、てか何で親が居ないんだよ普通あり得ないだろ）』

そうだ、なぜか今は親が居ないのだ。

っは、まさかまた筋肉達磨の仕業か！

まあそうやってる間にもだんだん限界が近付いてくる

『（まじやばいってこれ、赤ん坊が漏らすのは普通だけど無理だから、俺無理だから、何か大切な何かを失いそうな気がする・・・・・・、やべって限界だ！、またさらば、俺の何か！」』

暫くお待ちください

まあこんな感じの赤ん坊生活だ。早く抜け出したい

1話 ここからか！？（後書き）

これからも見てください

2話 厄日か（前書き）

ほんの少し修正

2話 厄日か

うつす、破神恭闇だ、今は2歳になっている。いやゝ時が経つのは早いな。今どこに居るかというとなんとと病院にいるのだ

別に病気になったとかではない、どうやら異常性を調べる為の病院のようだ。なぜここにいるかという俺の成長速度が早すぎるからだ
なぜか体がどんどん大きくなっていく、それに合わせて精神的にも成長させねばと考え、普通の人より早く歩きだし、早く言葉を喋りだして肉体と合わせようとしたのが逆に失敗したらしい。異常すぎる成長速度に親が疑問を持ちここに連れてきたのだ。一番最悪のパートナーだ

しかも

『「人間は無価値に生まれて」』

『「無価値に生きて」』

『「無価値に死ぬに決まってるのにさ」』

「・・・・・・・・」

なにコイツ、なんかボロボロの人形持ってるしヤバすぎる感じがする、何よりあの目だ。何の感情もないような黒い目

それより俺を挟んで話すなこいつら。無関係の俺が居づらい

座ってる位置

めだか

恭闇

球磨川

な、気まずいだろ

『「君はどう思う？」』

『「え」と』

『「黒神めだかちゃんに破神恭闇くん」』

ん、今アイツ俺の名前を呼んだか？おいおい勘弁してくれよ。まあ、話掛けられた以上返さないとな

『俺は人は無価値なんじゃないと思うがな。人は何かしらの意味を持って生まれてくると俺は思う』

そう俺は意味はあると考える

俺は自分の考えを言うと球磨川は笑みを深くした

『「まだそんな事言えるんだ」』

『「それほどの異常性を持っているのに」』

っ！？コイツ俺の異常性を

『「君もいずれ分かるよ」』

俺が何か言おうとすると球磨川が呼ばれた

『「残念」』

『「まだ君らと」』

『「話したかったのにね」』

そう言うのと立ち上がり歩き出した

『「きょうやくん」』

『「君は間違ってるよ」』 『「だって世界には目標なんてなくて」』

『「人生には目的なんてないんだから」』

そう言うのとそいつは部屋の中に消えていった

随分歪んでるな、前の世界ではずっと生きていたら俺もあぁなっていたかも知ない

すると俺を呼ぶ声が聞こえ俺は歩き出した、その場に考えこむ一人の少女を残して

それから俺は異常は無かったようだが通院を続けている。異常は無いとしてもこの病院に通えと言う話だ

今日も検査検査で疲れて歩いてた俺は託児室というものを見つけたのでそこで休むことにした

『しゃーす』

中に入って見ると子供が1人だけいた

「え？、誰？」

会っていきなり誰とはな

『俺の名前は破神恭闇だ。よろしくな』

「うん。ぼくのなまえは人吉善吉だよよろしくね！」

いやいや人吉善吉ってどんな名前だよ。その名前に疑問を感じたのは仕方ないはずだ

すると善吉は笑顔で話しかけてきた

「ねえ！一緒に遊ぼう！」

『えー、寝みーからやだ』

ここに居るといふ事は何かしら異常性があるヤツかもしれないので余り関わりたく無い

「やだやだー、遊ぼうー」

俺の考えてとは裏腹に引っ付いて遊ぼうとせがんできた。子供は元気だな、今は俺も子供か

『引つ付くな引つ付くな、ちょっとその知恵の輪かせ』

少し遊んだら満足するだろうと思い善吉から借りた知恵の輪を一瞬で解いた。まあ眠くて早く寝たいというのも会ったし、どうせ善吉は以外誰も居ないだろうと思ったからだ

「すごいすごい！てんさいだね！」

『そうだろそうだろ。ではお休み』

そう言うのと横になろうとしたが今度はパズルを善吉は取り出した

「次はこれね」

ブチッ

『上等だ。ここにあるやつ全部制覇してやるよ』

眠い時は以外と沸点が低い恭闇君

遊ぶもんが無くなったら流石に寝させてくれるだろ

回りにあるパズルや謎解きは解かれて、絵を書く紙にも何これつま、的な絵が書かれている。これじゃ暴走状態だよ

もうヤケになっていると何やらおかっぱの少女が入ってきた

めだか目線

私は球摩川というヤツの言った事を考えていた。そしてその考えに同意した

『「世界には目標なんてなくて人生には目的なんてない」』

それ以上に正しい答えがあるとは考えられなかったからだ。そう考
えるととても楽になれた

だから毎日のように続く検査に嫌気が指して待合室から逃げ出したが

「おい！13番 黒神めだかはどこに行った！？探せ！！まだそん
なに遠くには行ってないはずだ！」

「は、はい！」

思ったより大ごとになってしまった。外に逃げるのは無理そうだ。
周りを見ると託児室があつたのでひとまずそこに逃げ込んだ、そこ
には

『無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！！』

「うわゝ、すごいすごい」

手を叩いて喜んでいる子供と、何やら凄い勢いで巨大なパズルを解いている子供がいた

む、むう・・・、どうやら逃げ込む場所を間違ったようだ。取りあえず喜んでいる方の先客に挨拶することにした

「おい、そんな単純なパズルに何をてこずっておる？貸せ、私がやってやる」

それはその子供のおもちゃを奪っただけだった。私にとって挨拶とは自らの異常性を見せること以外にはなかったのだ

「ほら、解けたぞ」

「うわあ、すごいねきみ、ありがとう！すごくうれしいよ！」

「別に凄くなんかない、それに凄くたって何にもならない。私が生きていることに私が生まれた事に何の意味もないのだから」

『そうか？この世に意味の無いことなんて無いと思うがな』

無駄無駄言っていた子供が話し掛けてきた。どうやらパズルが完成したようだ

ん、こいつは

「貴様はあの時の・・・、だったら教えるがよい。私は一体何のために生まれてきた？」

そう言う少し考える素振りを見せた後話してきた

『そうだな。善吉、パズル解いてもらって凄く嬉しい気持ちになったんだろ』

「うん！」

『だったらお前は皆を幸せにするために生まれてきたってことでいいんじゃないか』

その言葉で心の中のもやが晴れたような気がした

主人公目線

しまったな。黙って寝てしまえばよかったのに、聞き捨てならない言葉が聞こえたからつい会話に入ってしまった。って、何で泣く！何で泣くんだよ！

「あゝ！泣かせた！」

いやまで善吉！、俺が悪いみたいになってるじゃねえか

取り合えず抱き着いて頭を撫でた。そうやっているとなんだん鳴き声が小さくなっていった

ひと安心だな、やべ！もうこんな時間だ。早く帰らなければ

『俺そろそろ帰るわ』

「っ！待て、名前を」

『今度会ったらな』

そう言うのと駆け出した。もう会うことも無いだろう。

恭闇は気付かなかった。まるで監視するような目で今の事を見ていた者を

俺はそれから通院をしなくてもよくなりあれから2人には会っていない
まあ、あれでよかったんだ

それから何年か経った時のこと、俺は保育園にいた

『破神恭闇だ。よろしく』

「ではみんな、仲良くね」

「くくくはくくくいいくくく」

俺は親の都合で別の保育園に通う事になった。今さら友達出来るかな？っていう不安は無いがな

「あゝ！恭闇くんだゝ！」

ビク！！

何か聞こえたぞ

そっちを見ると黄色の髪をした子とおかつぱの子がいた。おかつぱの子がゆらりと立ち上がった。シュン！！

何、消えた！てか瞬歩か！

ドン！！

『ぐふ！！』

次には腹に物凄い衝撃が走り俺は壁に叩き付けられた

子供の体なら死ぬわ

「今までどこに居たのだバカ者」

黒神めだかが目に涙を溜めながら人間ロケットとかし抱き着いてきた。こんな感じの再開だった

今日は厄日だ

2話 厄日か（後書き）

次々といきたい

3話 拉致って犯罪じゃない（前書き）

誤字脱字を修正

3話 拉致って犯罪じゃない

あ、あの時は散々な目にあった。腹に頭突きくらうわ、骨がバキバキいくまで抱き締めるわ、全力で遊んで振り回されるわで散々だった、しかし今日は休みの日だ。休み、何ていい響きなんだ

大体今は朝の9時位か、このまま再び夢の世界へ「恭闇、お友達よ」行けなかった

一体誰だこんな素晴らしい日に来るのは。前の保育園のヤツは・・・、町が違ってから来れないか。今の保育園のヤツには家の場所を覚えてないはずだが（ちなみに起きて玄関に直行したのでパジャマです）

ガチャ

「うむ、やっと来たか」
ガチャ

開けた玄関を即行閉めた

いやいや何で居るんだコイツ、ああ、朝早く起きたから（休みは昼まで寝てることもあります）寝ぼけて幻覚が見えてるのか

顔を2、3回叩いた

『うし、目が覚めたな。さあ、目を見開いていこつ』

ガチャ

「うむ、やっと来たか」

ツス

ガシ

「なぜ閉めようとするのだ」

閉めようとした扉を掴まれ阻止された。てか力強！本気で閉めようとしてんのに微動だにしねえよ

『な・ん・で・い・る・ん・だ』

腕に力を込めドアを閉めようとしながら聞いた

「何だ忘れたのか。前に言っただであろつ」

『言っただって何をっ』

その時あることを思い出した

回想

「恭闇くん」

『ん、どうした善吉？』

「今度の休み一緒に遊ぼうよ」

『いや無理』

善吉の言った言葉を即答で断った。休みは寝て過ごす予定だからな。駄目人間丸出しである

「うむ、いい考えだ。では私の家で遊ぼう」

『いや、話聞いてたか？』

「でも恭闇くんはめだかちゃんの家の場所知らないんじゃないの？」

『その通り。行けな「問題はない。私が恭闇の家に迎えに行こう」
い』

「いい考えだね！」

何で行く方向で話が進んでんだよ

「恭闇の家は何処だ？」

『今の話の流れで教えられるか！』

こいつらバカか。今の話の流れで教えるわけないだろう

「ええー、遊ぼうよ」

ええい、引っ付くな引っ付くな善吉

「なら自力で探してみるんだな」

こう言えば諦めるだろう。所詮小学生だ、自力で探すのは不可能だろう

「ほう、では自力で探して行けば一緒に遊ぶのだな」

『その時は何処にでも行つてやるし、願いでも何でも聞いてやるよ』

子供の自力では無理だと決めつけたから出た言葉だったが、この慢心により俺は見逃した。めだかがニヤリと笑ったのを

そして時は戻る

『あ』

「うむ、思い出したようだな」やーべー。思い出した。マジで、マジで自力でここまで来たのか

「では行くか」

ちよ、何か知らないうちに両脇黒い服にサングラスの方々に囲まれてるし

『ちよっと待って！まだパジャマだから！せめて着替えさせて、あ』

そのまま高級そうな車にぶちこまれ、車は走り出したり。不幸だ

『・・・・・・・・』

「む、どうしたのだ？」

いや、どうしたも何も広！何か門がとてつもなく大きかったし、今走ってる敷地内の中も地平線の彼方まで見えてるぞ

「とっても広いよね」

てか善吉居たのか？気が付かなかったわ。分かった分かった、謝るから泣きべそかくな

こんなことをやってるといつの間にか家に着いた

なにこれ、家？いや城？取り合えずとてつもなくなくでかい屋敷があった。今更だがこいつかなりの金持ちだな

車が屋敷の前に止まると

「……お帰りなさいませ、お嬢様」……

沢山のメイドが居た。リアルなメイドなんて初めて見たわ

「うむ」

めだかは敷かれたレッドカーペットを歩いて行く。物凄いいめだがが輝いて見えるわ。強者の雰囲気というかオーラというか何とか言うか。とりあえず俺は居心地が悪そうについて行った

「私の部屋で遊ぼうか」

そう言い中に入ったが中もやはり豪華だった。どれもこれも高そうな、いや高過ぎる物ばかりだ。

「いつ来てもすごいね」

どうやら善吉は何回も来たことがあるようだが、それでも慣れるものではないみたいだ

「着いたぞ、ここだ」

屋敷の中を見ながら進んでるといつの間にか部屋に着いた。もう部屋のドアから普通じゃ無いんだけど

『やっと眠れそうだな。中に入ろうぜ』

「あ、待て」

めだか止めるより早くにドアを開けた。すると

「めだかちゃんお帰り！」

背が俺と同じ位の知らない男が抱き着いてきた。何こいつ気持ち悪いな

『ああ、誰だこ「メラメラメラメラ」・・・い・・・っ』

この男に何か言おうとしたら横から何かすさまじい殺気を感じてそっちを見るとめだかが無表情になっただけ赤いオーラを出していた。横にいる善吉に至っては泣きそう。今の状況

恭闇 抱き着かれてる

めだか 無表情で殺気

善吉 泣きべそ

??? 抱き着いている

なんだこの空間。てか早く離れろ、めだかの殺気がだんだん増加してんだよ。

ああ空間が歪んで来た

「おや、めだかちゃんじゃないじゃないか」

この男、やっと抱き着いている相手がめだかじゃないと気付いたようだ

「ど、どうしたんだいめだかちゃん！？何でそんなに怒っているんだい？ああそうか。僕が間違ったとはいえ違う人に抱き着いたのに怒ってるんだね。ああなんてかわいいんだ、さあ胸に飛び込んでおいで」

男はそう言つと両手を広げた。それを見ためだかは男に走って行きその腕の中に

「はああああ！！」

ドン！！

「つぶふ！！」

入る訳がなく男の顔面に飛び膝蹴りを食らわせた

男は壁に叩き付けられ動かなくなった。めだかはそれを掴み　ポイツと外に投げた。ここ3階だぞ

「さあ遊ぶぞ」

『いやいいのか、アイツ』

めだかの飛び膝蹴りを顔面に食らってさらに、3階から投げられたので流石に心配した。すると善吉が肩を叩いてきて

「いつも事だから」

と言ってきた。取りあえず納得しておいた

暫く遊んでいたら俺はトイレに行きたくなり部屋から出てきた。遊びはトランプやオセロ、人生ゲームといったものだった。なぜか将棋やチェスといった物もあったがな。にしてもやっぱりめだかは強いな。なにやっても負けてばかりだ、ま、途中でめだかが本気を出せと言ってきて、俺も負けてばかりで少しイライラしてきたから本気でやったらパーフェクトで勝ったがな

『で、ここは何処だ？』

トイレを済ませ部屋に戻ろうと思い歩いていたら全然知らない場所にいた

『取りあえずこの中に居る人に聞くか』

ドアを開け中に入るとそこは図書室のようだった。『広！それに本多！　これ街の図書館より圧倒的に多いぞ』

余りの本の多さに圧倒されながらも人を探してみると、話声が聞こえた

「くじらちゃん！めだかちゃんが、めだかちゃんが」

「うるせー、勉強の邪魔だ」

ドン！

バリン！

何かめだかの部屋の前で抱き着いてきた男の声が聞こえたと思った
ら殴る音と、窓を突き破る音がきこえたぞ

そこに行くのと割れた窓と何事もないかのように勉強する女の子がいた

しかし普通の女の子ではなかった首を鎖で繋がれ、沢山の紙と本の中
にいて、速すぎる速度で鉛筆を動かしていた

やっべー、入る部屋間違えたな

来てしまったもんは仕方ないのでこの子に聞く事にした

『少しいいか』

すると動かしていた鉛筆を止めこつちを向いた

「あん、誰だてめーは。ここは立ち入り禁止のはずだぜ？」

『ああ、俺はめだかの友達だ。ここに入ったのは道を教えて欲しくてな』

「け、他のヤツに聞きな」

コイツ口悪いな。にしても

『お前何でこんな過酷な状況なんだ？』

「いちいちうるせーヤツだな。てめーに関係ねえだろ」

『そつだが少し気になってな』

「いいぜ教えてやるよ。恵まれた生まれ！恵まれた容姿！恵まれた才能！恵まれた環境！どれもこれもクソ食らえだ！！」くじらは大声になり話し始めた

「素晴らしいものは地獄からしら生まれない！歴史上天才は多く不遇な人生を送っていて偉大な発見は大抵、劣等感から生まれている！こんな恵まれた人生じゃ私は駄目になるんだよ！」

『それで自分をわざと過度な生活へ追い込んでるのか』

「そうさ、幸せになる位なら死んだ方がマシさ、大方てめーも私を説得か何かするつもりなんだろうが無駄だぜ」

『いや別に』

「はあ？」

予想外の言葉が出たようでびっくりしたようだ

『確かに歴史上の天才の多くは劣等感から生まれてるし、お前がどんな生活を送ろうが気にしねえよ』

これは否定しようのない事実だ。しかし訂正したい

『でも天才ってやつは劣等感だけで生まれたか、それだけか？何の幸福や幸せも無しにその才能を開花させたと思うか？』

劣等感、不幸だけでは何も生まれない

『世界にはな不幸なヤツなんか腐るほどいるし劣等感を抱えてるヤツも腐るほどいる。てめーの考えでいったら世界には天才が溢れ返ってるな』

それはお前の考えは間違ってると言っていた

『ただ死んでもいいと思うな。この世には行きたくても生きられないヤツラがいる。いいか、死んでもいいなんて言っつな』

そう言いくじらが書いていた紙を数枚取り書き始めた

「……、何で私に構う？ほっときやいいだろ」

『別に気まぐれだ』

数分すると書いていた鉛筆が止まり立ち上がり歩き出した

『こいつはお節介だ。じゃあな』

「待てよ、てめーは何者だ？」

すると立ち止まり振り返って微笑み言った

『ふ、ただ普通の子供だ』

「っ／／／／！？」

そう言つとドアを出た。

くじら目線

あ、あいつとんでもねえ置物していきやがった／／／

私は幸福は最悪の物だと思っていた。幸福は才能を潰し、私を駄目にする物だと考えてた

だから俺は自分から拷問のような日々を過ごした

しかしあいつに言われて少し疑問に思ってしまった

「たく、何なんだあいつは」そう言い椅子に座り机に向かうとあいつの書いた紙が散らばっていた

「何書いたんだあいつは・・・!!」

そこには複雑な公式がところ狭しと書かれていた。どの紙も一緒だそれは今世界の天才と呼ばれる科学者や研究者が必死になって解こうとしている問題の証明だった

「っは、何が普通の子供だよ。まるっきり異常じゃねえか」

その顔には笑みが浮かんでいた

3話 拉致って犯罪じゃない（後書き）

いろいろな意見ありがとうございます。

4話 強制のお出かけ（前書き）

またちよつとの修正

このちよつとの修正がきつい

4話 強制のお出かけ

よお、皆が主人公の破神恭闇だ。今日の俺はお出かけ中なのにデションはダウンしている。何故なら

「どうした恭闇、浮かない顔をしておるぞ」

「け、何か腐った物でも食ったか」

「お出かけ♪お出かけ♪」

「妹と弟とお出かけ・・・、さ、最高」

上から

めだか

くじら

善吉

まぐろ（変態）

オーケイ。1から順に説明しようか、あれば朝のこと

朝の眩しい日差しで俺は目を覚ました

ああ、眩しいな。もう太陽なんて消えてしまえ。物騒なことを思っている、何やら複数の声が聞こえてきた

え、声？ここ俺の部屋のはずだよな

「だから私が起こすと言ってるではありませんか」

「はあ、お前みたいなお子様より、俺みたいな年上のお姉様に起こされた方が気分爽快に決まってんじゃねえか」

はい。大体誰だか分かりました。てか何でこいつら居るんだ？、家には鍵をしてるはずだが

あん？誰かがベッドに入ってきたぞ。これは変態まぐろだな

「さあ、めだかちゃん、くじらちゃん、僕が寝るから存分に起こしてくれ。ああ、妹に起こされる兄、最高だ」

「「お兄様てめーはどいてください（どけ）」」

あの変態また気持ち悪い事言っやがる。案の定ベッドから引きずり下ろされてじかれてるがなよしそろそろ今の状況について突っ込もうか

『何でてめーらが居るんだよ！』

俺が声を掛けると2人は残念そうな顔をした

「お兄様が騒ぐから恭闇が起きてしまったではありませんか」

「おい、てめーがクソみたいに騒ぐから起きちまったじゃねえか」

「ま、待ってくれめだかちゃん、くじらちゃん。それはあまりにも、ぐふ！」

2人は理不尽な理由でさらにまぐろをしばいていた

『おい、しばくのはいいが何でここに居るんだ？』

めだかがまぐろをしばいてた手を止めてこちらを見た。くじらは手を止めていないが

「それはだな、動物園に行くぞ」

『いきなり過ぎて訳がわからん』

めだかが発った言葉は寝起きでは到底理解出来ない言葉だった

回りがうるさい↓起きる↓

まぐろがしばかれてる↓動物園にGO？

訳がわからん

『悪いな。今は睡眠をとると決めてるんでな』

そう言うと布団に入った

しかし相手の方が上手だった

「そう言だろうと思って既に車に乗せておいたぞ」

『はあ？、何言って・・・んだ』

そう言い回りを見ると、

俺の部屋じゃねえじゃねえか！！！

何これ、何なの。起きたら車の中って普通ねえだろう。しかも布団ごと

『何で俺はここに居るんだよ！？』

「それはだな、私が部屋から連れて来たからだ。ああ、入った時に誰も居なかったから出るときは鍵は閉めたから安心するがいい」

『何1つ安心できねえよ！てか家に鍵が掛かってたよな、何で入れるんだよ』

「ふ、あの程度の鍵など開けるのは造作もない」

清々しいほどの笑顔で言うコイツに俺は今後の生活を心配したのは言うまでもない

しかも

「け、だるいな」

何でコイツ（くじら）がいるんだ

あの時の状況から考えてコイツがここに居るのはあり得ないはずだ。俺が会ったのはあの時の1回だけだし、あいつの言動からして家族との関わりも出来るだけ避けてきたはずだ。なのに

「おいおい、いくら俺が可憐な美少女だからってそんなに見るんじやねえよ」

コイツはいきなり何言い出してんだ。めだが、そんな捨てられた子犬みたいな目で見えるな。ほら、まぐろが鼻血出して悶絶してるし（善吉は俺のベッドで寝ています）

『いや何でお前が居るのかなと？』

「何だ？ 俺がいたら不都合でもあんのかよ」

話してると、悶絶していたまぐろが復活して話に入ってきた

「最初は行く気がなかったみたいなんだけど、恭闇も行くと聞いたら行く気になったみたいだね」

「な、何言つてやがる！！ てめー／／／」

どうやらまぐろが失言したようで、またしばかれている。そしてくじらが顔を赤くしてチラチラ見てくる

それを見ながらイライラしているめだが。大丈夫かこんなんでは

そして動物園に到着

『いろいろあつたが着いたな』

本当何で目的地に着くまでにこんなに疲れるかな

「さあ、ついにこの時が来たぞ。妹2人と一緒に動物園に……
、考えただけでも鼻血が」

まぐる……、変態を通り越して尊敬の念すら出てくるよ

キラキラキラ

『うお！眩しっ！』

隣からいきなりの光を感じて見てみると

キラキラキラ

「……………」

めだかが凄いキラキラした目をしていた

『はぁ？、何コレ？』

「は、早く行くぞ!!、今すぐ行くぞ!!」

もう待ちきれないとばかりに俺らの手を掴んで行こうとする。嫌な予感がするから取り合えず戦術的撤退する

『取り合えずトイレに行かせろ』

そう言いトイレに向かって行った。後ろから「早く、早くだぞ!」と聞こえる。

トイレくらいゆっくりさせてくれ

トイレから数分して戻ると妙に静かだ。周りを見ると

『あれ、動物がいない』

動物が1匹も出ていなかった。おかしいな、と思いつつもめだか達を探していると・・・いた

でもめだかが変なオーラをだして肩を震わせている。くじらは興味深そうに、善吉とまぐるは慰めようとしている。あ、抱き締めようとしたまぐるが殴られた

『何このカオス』

取り合えずくじらに聞いてみた

「やっと来やがったか。あれは動物がめだかの強者のオーラっていうか、自分より絶対的に強いものに怯えて出で来ねえんだよ。我が妹とながらマジで化け物だな。興味深くてたまらねえ」

おいおい、そのマッドサイエンティストみたいな目で自分の妹を見るなよ。まあ取り合えず行くか

そう言うときめだかの方へ歩いて行った

『おーいめだか』

俺が呼ぶと肩をビクツと震わせこっちを向いた。その顔は泣きそう、いや半泣きだった

「き、きょうやあ〜。ど、どうぶつがあ〜」

半泣きでとことこと歩いてくる。ここで拒めば人間としてダメなので、抱きしめた

『あゝ、大丈夫だって、きっと日が悪かったんだよ』

めだかは俺に抱き着いて震えている。いくら大人びていても子供は子供だ。動物に嫌われるのはショックのようだ

それをまぐろとくじらが、人を殺せそうな目で見てくる。何でくじらまで？

あ、まぐろがくじらを抱き締めようとして殴られた。全く懲りてないな

そういえば俺は前の世界では動物に好かれてたな。これも異常に分類されるからやりたくないが友達が泣いてるのになにもしなかったら自分を許せなくなる

『めだか、ちょっと離れてくれるか？』

そう言うときめだかは離れてくれた。その頭を撫でると檻に近付いたすると動物が顔を出した

『大丈夫だからおいで』

すると1匹、2匹、3匹とどんどん動物達が出てきて恭闇の前に集まり出した。

その集まりにめだかは近付き手を出したが、動物が怯えて避けてしまふ

『そんなに怯えなくても大丈夫だから、な』

そう声を掛けると動物達は恐る恐る近付き、ぺろっと手を舐めた

それにビックリしたのはめだかの異常性を知っているまぐろやくじらは勿論、

めだか自身1番ビックリしていたが、次第に笑顔になっていった

『なんとかなったな』

取り合えず俺は一息ついていた。俺が居る内は大丈夫だと思ったよ
うで動物達もだんだんめだかに慣れて来たようだ

「やあ、お疲れのようだね」

『なんだ、お前か』

休んでいると、まぐろが話し掛けてきた

どうやらまぐろは話したいようだ

話す

断る

しばく

さよなら

恭間は さよなら のコマンドを選んだ

「ちょ、ちよつとまってくれ！話くらい聞いてくれ」

仕方ない。くだらない話なら消す

「君には感謝していてね」

『はあ、感謝？お前が？俺に？』

感謝されるような事はしてないはずだ。コイツとの記憶は……、しばかれて、しばかれて、しばかれて、しばかれてる記憶しかないな

「くじらちゃんめだかちゃんの事さ」

くじらとめだか？

心当たりがねえな

「君なんだろ、くじらちゃんを部屋から出したのは。部屋から出て歩くようになったし、食事と一緒に取るようになったからね、とっても嬉しいんだよ。こんなふうに一緒に出掛ける事も出来たし」

くじらを見ると楽しそうに動物を見ている。いや、楽しいのか？

動物見て怪しい笑みを浮かべてるし、実験動物がどうだのぶつぶつ言ってるし、連れてきて正解だったのか

「めだかちゃんもについても、動物がめだかちゃんを苦手っていうのは知っているんだけどどうしようもなくてね。それを解決してくれた君にはホントに感謝してるよ」

そう言うと笑顔になった。あの異常なまでの妹LOVEがなければ

カッコいいのにな

話が終わるとめだかと善吉が近付いてきた

「恭闇」

『ん、どうしためだか？』

「恭闇が私の家に来たときにした約束覚えておるか」

約束？ ああ、何でも言うこと聞くなって約束か。あれは俺の完敗だからしかたないか

「覚えているようだな。では」

スッ

ガシッ

「何をする」

それはこっちの台詞だ

『何しようとしてるんだコラ』

俺は顔に（主に唇に）近付いてきためだかの顔を掴んだ

「何って、キスに決まってるではないか」

さも当然そうに言つめだか

『いやいや、キスって』

「何でも言う事を聞くと云ったであろう」

駄目だろ、と言おうとしたがめだかに遮られた。それを言われると

「では・・・」「おい、ちょっと待て」

めだかが再びキスしようとする、それをくじらが止めた

「約束したかもしれねえが、本人の許可なしにキスするってのは鬼畜すぎねえか」

「お姉様、少しコチラに」

くじらが俺の弁護をするためだかがくじらを連れていった。何かただならぬ空気になってきたな。その間もまぐるは殺意を持った目で睨んでくる

うお！、目線がビームみたいに伸びてくる

まぐるの目線がだんだん凄くなってきた所でめだかとくじらが帰ってきた。くじらの事だ、姉として妹を説得したに違いない

ガシッ

ん、めだか何で顔を押さえてるんだ。うお、近い近い顔が近い！

「さっさとしやがれよめだか。次は俺だからな」

oooooooooooooooooooo

『おい、くじら！説得したんじゃないのか』

「ケケケケ、研究者つてのは利益がある方につくもんなんだよ」

くじらが不気味な笑いで言ってくる。やられた、コイツは根っからの研究者だ。いや、近い近い！

「め、めだかちゃん！くじらちゃん！、キスなら僕がむしる僕に、つぐふ！！」

まぐろが何か言っていたがめだかが後ろ蹴り、くじらが腰を入れたフックを入れて沈黙した

コイツは使えん。仕方ない

恭闇は一瞬体に力を入れ、力が緩んだときに抜け出した。抜け出したのが誰にも見えない位の早さだった

十分異常である

『流石に俺のファーストキスは渡せないな』

そう言う俺はダッシュで逃げ出した。後ろで「ファーストキス……、私が」とか「めだかの拘束を……、解剖を」とか聞こえてくる。だか次には2人共ダッシュで追いかけてくる

「待て（待ちやがれ）」

本気で捕まる訳にはいかないな。俺は笑いながら逃げていた

だがこんな日々は続かなかった

そして恭闇も気付かなかったまたまた監視されてるのを

4話 強制のお出かけ（後書き）

修正しても駄文ですね

5話 すべてきえる（前書き）

久しぶりです。さっそく原作設定無視しましたそこは気にしないでください。

しかし相変わらずの駄文です。今まで書いた中では一番長いと思います

アンケートの結果は後書きに書きました

ではどうぞ

5話 すべてきえる

俺は決して忘れない

今日この日、この時間を

普通の日々が続くと信じて

いたのが一瞬で砕かれたの

を

その日は何だか嫌な感じがした。自分にまわりつくような、とても嫌な感じがした

めだか達と動物園に行った日から2週間位たった日
俺は保育園から家に帰ってきた

『ただいま』

玄関を開けてただいま と言っても返事はなかった

おかしいな、いつもなら返事があるはずなのに。俺は疑問に思いつつ居間に進んだ

そこにはソファーに座っている両親がいた。俺は疑問に思いつつ声を掛けた

『居るなら返事くらいしてよ』

「あ、ああ。悪いな」

何とも齒切れの悪い返事だな。それにしても両親の目がおかしい、何かに怖れているような、安心していうような

バン！！

俺が入ってきた後のドアがいきなり開いて黒服の男達が入ってきた。気の緩んでいた俺はいきなりの事で反応出来ずに数人の男に押さえ付けられた

『ぐあ！、なんだテメーらは、はなせ！』

俺がいくら力を入れようとビクともしない。当然だ、いくら異常といてもしょせん子供の力じゃ大人の力には勝てない

俺が拘束を解こうともがいていると、1人の男が前に出てきて両親に話しかけた

「では、この子はこちらで預かります」

「ええ、早く連れていってください」

え、どういう・・・ことだ

俺は今の両親の言葉で頭が真っ白になった

『母さん、父さん。どういう事』

真っ白な頭で言葉を絞り出したが、まるで睨み付けるような目と共に無情な言葉が帰ってきた

「昔に病院に連れていった事があるでしょ、そこにあんたを渡すことにしたのよ」

俺は訳が分からなかった。病院では異常無しと診察が出たのではないのか

「病院ではあんたが異常かどうか分からないと言うから様子をみていたのよ」

「するとあなたの異常性が次々浮き彫りとなってきたのです」

母親が言った後に男が続いて言った。思い起こせば日常で視線を感じた事が数多くある

それからは俺は抵抗することもなく淡々と進んでいった。車に乗せられて運ばれている間も俺はぼーと考えていた。俺はまた捨てられたのかと

車がしばらく走っているとどこかの病院が研究所に着いた。ぼーと

していた俺は待合室みたいなところに連れられた

そこには暇そうにしている女の子とゲームに集中している男の子がいた。だが今の状態の俺は気にすることも出来ずにそこにあつた椅子に座つた。すると座つていた女の子が話し掛けてきた

「へー、新しいヤツが来たか」

『・・・・・・・・』

話しかけてくるが無視した

「てめえ、なんとか言つたらどうなんだ。ちつ、つまらねえヤツだな。まあいいや、いちよう名前を言つてやるよ。私は志布志飛沫」

この女の子は自己紹介したが、男の子の方はゲームに集中して話してこなかった

「こついつ時ぐらいゲームを止めたらどうなんだ。こいつの名前は蝶ヶ崎蛾々丸だ」

飛沫が名前を言つとチラツとこちらを見たがすぐゲームに視線を戻した。だが今の俺にとってはどうでもいい

「ちつ、つまらねえヤツだな・・・、にい」

飛沫はつまらないという顔をしていたが次には何か考え付いたように顔を歪めた。次の瞬間、恭闇の手から血が出てきた。無関心だった恭闇もこれには意識を向けた

「はっははは。どう、驚いた」

飛沫が笑っているところを見るとコイツが何かやったようだな。しかも昔に怪我をした場所から血が出ているところをみるともう治っている傷を開くようだ

「私を恨むなら恨んでもいいぜ。なんせ私は他人を不幸にするために生まれてきたんだからな」

ぼそ

恭闇は飛沫を無表情で見て何か言った。その時数人の男が現れて恭闇を病室に連れていった

飛沫目線

「何だっ たんだアイツ」

その女の子の名前は志布志飛沫。彼女はかさぶたを剥がすのが好きな子供だった。傷口を見るのが、血を見るのが好きだった

しかしある時不可解な出来事が起こった。彼女の周りの人の怪我が

多いのだ。人間だから怪我するのは仕方ないがそれでも多いのだ。しかし自分には被害はなくあくまで開かれるのは他人の傷だけなのだ。それを見て彼女は思った。そうかあたしが生きてるとまわりに迷惑がかかってみんなが不幸になるのか。だったらあたしは精一杯努力して他人の不幸を喜べる人間にならなきゃな。

その時から彼女の歪みはさらなるものになっていった。

にしてもあたしが言うのもなんだが変なヤツだ。いくら話し掛けても反応しねえし、あたしの能力をくらっても表情1つ変えなかったからな、そんなヤツ始めてだ。

「ん？」

恭闇が連れて行かれた方を見ていると何やら手にヌルツとした温かな感触があつたふと見てみると

「な、なんだこりゃ」

手を見るとそこは血で染まっておりよく見ると手だけではなく膝や

顔からも血が出ている

「し、飛沫さんどうしたのですか」

これにはゲームに集中していた蛾々丸もビックリして飛沫の方を見た
飛沫はいきなりできた傷を見ているとある事に気付いた。この傷は
全部昔にできた傷が再び開いたものなのだ

こりやあり得ねえだろ。古傷が開くってそのまんまあたしと同じ能力じゃねえか

その時恭闇がぼそつと言った言葉を思い出した

コロスゾ

一切感情の込められてない顔、何も映らない瞳、自分だけに向けられた殺意

飛沫の体は震えだし自分で押さえようとしても押さえられなかった。
恭闇のそれは異常とはいえず子供を恐怖に陥れるには十分だった

「あいつ、何者だよ」

恭闇が連れて行かれた部屋を見ると

ドオオオオン！！！！

黒い何かが吹き出しいきなり部屋が爆発した

主人公目線

部屋に連れていかれるとそこは診察室のような場所で1人の女性（女の子？）が座っていた。その人前に座ると笑顔で話しかけてきた
「こんにちは。先生の名前は人吉瞳って言うの。よろしくね」

人・・・吉？

人吉でピクリと反応するが相変わらず無機質な目、何の感情の無い顔は変わらなかった

その後、瞳はいろいろ質問したが恭闇はそれを無視、いやまるで耳に入っていないようだった。そこに恭闇の親が入ってきた。すると恭闇の目に光が戻って来た

『父さん、母さん』

もしかしたらやっぱり考え直したのか

「お金を受け取りに来たんですけど」

それは救済では無い、それは恭闇をさらに地獄に追い込むものだった

「ど、どう言う事ですか！診察の為に連れてきたんじゃないんですか！」

「診察、いや観察するなら近くにいたほうがいいでしょう。それにこの方達も居なくなつて欲しかったようですから、この子を買ってくださいと言つたらすぐに頷きましたよ」

ピキピキ

「自分の子供を売るなんて何考えているんですか！」

「あなたに何が分かるんですか！？。この子の近くにいるだけで気持ち悪いわ」

「そうだ。それに捨てるなら金になつた方がいいに決まつてる」

ピキピキピキピキ

自分の心にヒビが入る音が聞こえた

止めてくれ。もうこれ以上言わないでくれ

「だからって「これは家の問題だ。貴女が口出しすることじゃない」くっ！！」

「こんな子なら生まなきゃよかったわ」

パリン！

コワシテヤル

ウアアアアアアアアア

瞳目線

私は後悔していた。前に病院で球磨川と言う子に脅迫されたとはいえ取引を受けてしまったのを

私はこの事が後悔として心に残っていて、医者の世界を去ろうと考えたが周りが引き留めるので今日だけ仕事をし、これで辞めようと思っっている

そうこう考えていると次の子が入ってきたが、この子を見たときは疑問しか感じなかった

まるで表情の無い人形のような顔、何も映らない目、異常とは言え子供がこんなになっているのは不自然だ

「こんにちは。先生の名前は人吉瞳って言うの、よろしくね」

私の言葉に少し反応したようだが顔に変わりがない、一体何があったのだろう

自己紹介の後いろいろ質問したりして話したが反応が無いのは残念だ。するとこの子の両親だろうか2人の男女が入ってきた。すると何の反応も無かったこの子の目に光が灯った

『父さん、母さん』

やっぱりこの子の両親か。挨拶しようと立ち上がると

「お金を受け取りに来たんですけど」

思いがけない言葉が飛び出した。その言葉の意味を一瞬で考えると次には口から怒声が出できた

「ど、どういう事ですか！診察の為に連れてきたんじゃないんですか！」

「診察、いや観察するなら近くにいたほうがいいでしょう。それにこの方達も居なくなつて欲しかったようですから、売ってくださいと言ったらすぐに頷きましたよ」

この研究員の話聞いて親に直接話した

「自分の子供を売るなんて何考えているんですか！」

私は子供を捨てるなんて最低だと思ってる。それが自分の子供なら

尚更だ

「あなたに何が分かるんですか!？。この子が近くにいるだけで気持ち悪いわ」

「そうだ。それに捨てるなら金になった方がいいに決まってる」

確かに異常性が高い子供を捨てたり売ったりと言うのは結構あることだ。だからと言ってこれを肯定するわけにはいかない

「だからって「これは家の問題だ。あなたが口出しする事じゃない」
くっ!!」

その通りだ。いくら言おうと所詮他人、この家の事情に首を突っ込んでいい訳じゃない。私は何をやってるんだろ。異常性のある子を世間に馴染ませ、こんな子無くすために今まで頑張ってきたのではないのか

「こんな子なら、生まなきゃよかったわ」

っ!!!。それは言い過ぎだ。いくら他人だろうが関係なしに言おうとした時だった

ドオオオオン!!

恭闇君を中心に爆発が起こって目の前が真っ黒になり私は壁に背中から壁に叩きつけられた、いや私だけではない他の人もだ。

私は痛む背中を無視し爆発が起こったところを見ると周りに黒いオーラを出し、仮面を被った恭闇君が居た。唯一見えている目は禍々

しくどす黒い黒に染まり

その目は怒り、悲しみ、絶望等の感情が詰まって居るようだ

ギアアアアアアアア

なんて禍々しく恐ろしく、そして悲しい叫びだろうか

恭闇君は爆発によって壁に叩きつけられた自分の両親のところに向かっている

いけない！ 今の状態は何なのか分からないけど間違いなく危ないわ

私は痛む体にムチを打って立ち上がり恭闇君の前に立った

「待つて恭闇君！ 落ち着いて！」

『ジャマダ。コワスコワスコワス、スベテコワス』

駄目！ 全然話を聞いてくれないし、このままじゃ何が起こるか分からない。話を聞かないならやりたくないけど力で止めるしかない

「痛いけど我慢してね。」

ハアアア」

パシッ！！

う、嘘

私はこれでも蹴りには自信があった。しかも蹴りを受けるのではない

く掴んだ

スッ

ドン！

「カハッ！」

掴まれた足を離された瞬間にお腹に衝撃が走り次には壁に叩きつけられた。そして痛みが襲ってきた

痛みが遅く襲ってくるほどの速さでお腹を撃ち抜かれたのだ

痛みでお腹を押さえていると1人の警備員が飛び込んできた。これには瞳は安心した。この警備員は異常な子供が暴れたら押さえるために警備員も異常な人ばかりなのだ

「この仮面の子供がやったのか」

そう言うത്恭闇の背中に回り込み押さえ付けようするが

「ぐあああ！！！」

警備員は腕を押さえて声を上げた。その腕はねじ曲げられ折れていた

「子供だと思って油断したぞ。だが残念だな」

警備員は折れた腕を元の位置に戻すと手を開いたり握ったりして状態を確かめた。そう腕は治っていた

「俺の異常性は「瞬間回復」だ。傷ができたところから治ってしま

うものだ」

この警備員の異常性は傷をおったところから治っていくのだ。ただし即死の傷や腕や足を切り落とされたりするのは治らない

『イジヨウ、イジヨウハスベテコワス』

恭闇はそう呟くと一瞬で警備員の背後に回り腕を掴みねじ折った

「ぐおおお！ 速いな、しかしいくらやろうと無駄だ・・・、何！ 何故だ、何故治らない！」

いくら待っても折られた腕は治らない。そして警備員は腹を貫抜かれて倒れ動かなくなった

今しかない

動かなくなった警備員を見ていた恭闇だったが視線を外し両親の方に向かおうとすると一瞬で床に縫い止められた

『！！！！』

「これで終わりね」

私は隙を突いて恭闇君を床に縫い止めた。これで一安心ね

『■■■■■■■■』

恭闇は叫び声を上げ自分を縫い止めていた糸を引きちぎり立ち上がった

「そんな！ あの糸を引きちぎるなんて」

その言葉を言った直後私は突然の衝撃で壁を何枚も貫き外に飛ばされ意識を失った

主人公目線

『っは！！』

俺は何をしてた。苦しみの渦の中にいたような感覚だ

『な・・・んだよ、これ』

ふと回りを見ると死体死体ばかりで自分は血塗れで血の海に立っていた。その死体の中には自分の両親の死体もあった。しかし思ったり取り乱さなかった

『そうか。俺は親とこの病院の人を』

すると次々と記憶が甦ってきた。押さえ付けようとかかってくる警備員、必死に逃げようとする職員、そして恐怖に染まった顔をした

親の顔

『そうだ、最初から俺には居場所なんてなかったんだ』

これだけの事を起こしたんだ。もう此処には居られない

そう言うとき恭子は病院を出ていった。残ったのは廃墟とかした病院と物言わぬ死体と化した大量の人だった

それから時が経ち物語は箱庭学園へ

5話 すべてきえる（後書き）

さまざまな意見をありがとうございます。

アンケートではTS化の意見が多かったのですが、そのままの意見も多数ありました。他にも男装や友情ものと言った意見もありました
皆さんの意見を実行したいので

男装で主人公と友情もの最終的に好きになるといった物を書きたい
と思います

沢山の意見ありがとうございました

設定 2

双神 恭闇

そうしん きょうや

身長 185cm

体重 70キロ

性格

過去の出来事で球磨川のようになりかけるが様々な所を旅して元の性格にもどった。しかし心の奥底には球磨川以上の闇を抱えている。出来るだけ普通であろうしめんどくさがりだが何かとトラブルに巻き込まれる。異常は使いたくないが友達や大切な人の為なら迷わず使用する。あまりにも強力な異常に多用すると体が持たない。けっこう我慢ができなくキレるところ構わず異常を使用する事も。ちょっとっかかり障があるのでバレちゃうかも

目に包帯を巻いているが見えている（キングダムハーツ2のリクミたいな感じ）ただめだか達に姿を隠す為だったがバレてしまい取ろうかと考えている。本人は気にいつている

顔はかなりの美形だが目の包帯で駄目になっている

アブノーマル

究極「アルテマ」物事を究極にこなす事ができる。ま、最強ですな

マイナス

虚化「ウツロナルモノ」

自分の身体能力や力が何十倍にもなる。仮面が顔ついて目が白いところが黒くなり、黒いところが白くなるまあブリーチの虚化です。

仮面は着脱可能で、デザインは一護の仮面です

虚化は元々マイナスの力はあったが昔この世界の親に売られた時により完全覚醒した。性格が凶暴になるが二重人格ではない

異常殺し「アブノーマルブレイカー」

触れている相手の異常を消す。離れば能力は戻る。自分の異常は消せない。

異常殺しを究極に言えば近づくだけで消せる

1話 秘密と言うのは長くは続かない（前書き）

やっと本編に入りました

でも原作を参考にしてますが相変わらずの駄文です

しかしがんばるのでぜひ見てください

1話 秘密と言うのは長くは続かない

「世界は平凡か？」

「未来は退屈か？」

「現実 is 適当か？」

「安心しろそれでも生きることが劇的だ！」

いや俺が言ってる訳じゃないからな

久しぶりの破神恭闇だ・・・、いや間違えた双神恭闇だ。あの事件からいくらか経ってから 戸籍作るか 見たいな感じで新しく作った。まあ新しい戸籍を作るなんて裏では金があればなんとかなるさ、実際なんとかなったしな

俺はあれから数「悩みごとがあれば迷わず目安箱に投稿するがよい」

年の時が経「24時間365日私は誰からの相談でも受ける!!」

テメーが俺の言葉を遮ることについて相談したいよ

だいたい朝会なんて出たくなかったんだよ。新しい会長の噂が引くほどの美人で、やることなすこと滅茶苦茶の型破り、スポーツ万能、かなり頭が良いってもうこの時点で嫌な予感がしたが……..
……..
見事に当たったようだ。やつぱり行く高校をくじ引きで決めたのは良くなかったな

まああいつは13組、俺は1組で接点なんて出来る訳がない

『と、思ってた時期が俺にもありました』

思わず明日の方向を向きたいよ。何でここに善吉が居るんだよ、確かにめだかが居る時点で予想はしてたがよりになんでよって1組なんだ。しかも隣！

「俺は絶対！ 生徒会には入らない！！」

善吉が指を差して宣言した

おおお、随分カッコいいな。ただし後ろに真似しているやつが居なければだな

「まあ、そうつれないことを言うものではないぞ善吉よ」

「（。D。）！？」

残念過ぎるな善吉よ。ん、なんでこっちガン見てんだ生徒会長さん？

「貴様、名前はなんというのだ」

ストップ、落ち着け俺。あれから何年経ったと思ってる。いくらいつでも分らない筈だ。さあ冷静に

『ドナルド・マクドナルドです』

全然冷静になれねえええええーっ！！！

「ほう、ドナルド・マクドナルドと言うのか」

「いや嘘に決まってんだろめだかちゃん！！」

あ、コイツさらにほどよくバカに成長してる

「恭闇君の名前は双神恭闇だよな」

「っ！？ 恭闇だと！！」

名前を出すな不知火！、ほらなんかシリアスな空気になってるじゃねえか。だからこいつらの前で名前を出すのは嫌なんだよ。おい善吉なんでお前も驚いてんだお前居ただろ
(クラスの自己紹介のとき善吉は寝てました)

「双神同級生、昔に私や善吉と会ったことはないか」

でたよ、やっぱりその話かよ。だが無駄だ

『ありませんけど』

「では、破神恭闇と言う名前を知ってるか」

しつこいなコイツ

『いや、知りませんよ』

「そうか、なら少し目の包帯をとってくれないか」

「うち、相変わらず勘がいいやつだ

「何やってんだよめだかちゃん！　だいたいあいつはもう生きていないだろが」

「だが！！」

人吉とめだかが言い争っている。そうだ俺はあの時死んだと言っているのだから

ピンポン、パンポン

「1年1組の双神恭闇君。今すぐ校長室に来なさい」

ちょうど良いことに放送がなり恭闇が呼ばれた。これ幸いということとで校長室に向かおうとして、途中で足を止め振り返った

『あなた達とは初対面ですし、私の名前は双神恭闇です。では』

そう言つとまた歩き出した。そうだ俺はあいつらと会う資格など無いのだ

そして今校長室の前に居るんだが、よく考えるとヤバくないかこれ。高校に入ってそんなに経ってないのに校長室に呼ばれるなんて、俺なにもしてないよ。たぶん

いを決して校長室に入るといかにも校長みないな人が高そうな椅子に座っていた校長と言ったらやっぱり白髭だな

「よく来たね。まあ座りなさい」

そう言われたので椅子に座ると校長も今の椅子から立ち上がり向かいの椅子に座った

「少し君にやって貰いたいものがあるのだよ」

そう言うと8個のサイコロを出した

『なんすかこれ？』

「見たままサイコロだよ」

んなもん分かるわ

『これで何やるか聞いたんですけど』

「手間を取らせるけどこれを振ってくれないか」

そんな事を言いながら目がギラギラと光っている。その光は何を意味するか分からないが俺にとっては気持ち悪い光だ

「嫌ならいいですが」

え、いいの。逆にマジでいいの

『いいなら授業がありますから行きますよ』

そう言うのと立ち上がりドアに向かい開けようとする

「恭闇君」

『なんで「しゅっ」っ!?!?』

呼ばれて振り替えると校長が投げた8個のサイコロが目の前にあり反射で払った

『何するんですか』

少し怒りを込めて言った。いきなり物を投げてきたらだれでも怒るだろう。振り返りざまに、しかも8個も。でもなんで投げてきたんだ?

「もう十分ですよ。行ってください」

『……、失礼します』

疑問と若干の怒りを残し校長室を出ていった

校長目線

「おもしろいですね」

彼は非常に興味深い。朝会に出席して彼を見たときは思わず椅子から立ち上がってしまったよ。資料を見て確信し彼を呼んで試してみただですが、彼は異常を完璧にコントロールしているようですからわざとバラバラにサイコロを投げるかもしれない、だからあんな手荒い事をしたのですが

「非常におもしろい結果になりましたよ」

立ち上がりドアの方向に向かうとそこには床に落ちたサイコロがあった

それは8個とも角で立っており8個とも同じ数、同じ方向を向いていた

「彼はすばらしい異常だ。必ず私の計画の為になる」

こんなことなら13組を呼べばよかったですね

校長の机には恭闇の入学の資料と数年前、病院で起こった異常者による虐殺事件の資料があった

主人公目線

あのくそじじい（校長） あ、言った言葉と思ってる言葉が逆だったわ

まあいいや取りあえず授業に「おい待てよ」行けなかった

後ろを見ると不良を表したらこうなるなという人達がいた。俺が何をした

「今は授業中だろ。こんなところにいちや駄目だろ」

「そうだぜ僕〜?」

お前らが言うな。しかしこんな学校にも不良は居るもんだな

「でさ、相談なんだけどさ、今金欠な訳よ」

「だからさ、お金貸してくれないかな」

やべー笑いそうなんだけど、ん、もしかして俺かつあげされてる?

『いや金無いんですけど』

すると態度が激変して怒鳴ってきた

「ああ〜ん! 断んのかよテメー」

『いやいや断るもなにも金が「ちよつと来いや!」ストップ、授業が〜〜〜!』

不良達に拉致され運ばれていく、取りあえず今日の授業は無理だろう

拉致されて連れてこられたのは寺？いや剣道場か
なんて金を掛けてやる

中に入るとごみが散乱していて、しかも窓を開けてないから煙たく
煙草の匂いでとても臭い

入ってきた扉を閉めると回りを囲まれた

「今のうちに払った方が身のためだぜ」

『んな事言われてもな』

俺がそう言っていると囲んでいた1人のリーダーみたいなやつが前に出て
きて木刀を突き付け言ってきた

「これで最後だ。黙って金だしな」

『断る』

「カッコつけてんじゃねえよ」

ガンッ！！

降り下ろした木刀を避けずに頭に当たって血が出てきた。痛てえ

その時善吉と何故か防具を着けたためだかが入ってきた

「っ！？ 貴様ら何をしている？」

入ると俺が居てしかも頭から血が出るのに少しビクリし、若干怒りを込めていった。その若干で不良が大分怯えているがな

『すこし話していただけっすよ。じゃ自分は保健室行くんで』

「待て」

保健室に行くために横を通りすぎるとめだかが声を掛けてきた

「朝は不快な思いをさせてすまないと思っている」

『別に気にしていませんから』

「それでもだ。すまない」

全く、律儀なもんだな

一応謝罪を受けて出てきたが剣道から悲鳴と怒声と何かを叩くような音がすごい聴こえるんだけど。まあ自業自得と言っことで気にはしないけど

翌日

昨日はいきなりあいつらと接触するし、頭が木刀の一撃で血が出る

わで一回本気で退学届け書いて校長に出したら目の前で破られたわ

ため息ついて歩いてると

何故かボロボロな善吉が現れた。朝から笑える姿だな

『朝からウケ狙ってんですか？』

「ボケだとしてもここまで体張らねえよ」

善吉が脱力しながら言う、相変わらず・・・いや、前以上にめだかに振り回されてるな

「恭、闇だよな。昨日はめだかちゃんが迷惑かけたて悪かった」

尻拭いもコイツの仕事になっているのか

『もう気にしてないですから』

「ほんとに悪い。ただあれには訳があるんだ」

あれ、いきなり語り始めたぞ。語り始めた為行く事もできずにただ聞くしかできなくなった

「俺やめだかちゃんの幼馴染みで行方不明になった奴がいるんだ。もちろん俺やめだかちゃんは自分の出来る限り探したが手掛かりすら見付からなかったんだ」

そりゃそうだろうな。話によるとあの事件はかなりの隠蔽があつて搜索する事や関わることを禁止されたようだからな

「いくら探しても見付からなくてもな、もう死んだと言う話しも出てきてたんだ。でもめだかちゃん信じなかった、だからめだかちゃんは今でもあいつを探している。で、その名前が破神恭闇って言うんだ」

なるほどな、でもまだあいつ俺を探してるのか

その場で沈黙が訪れた。だがそれを破ったのは善吉だった

「何か悪いな、お前にこんな話をして」

善吉は苦笑しながら謝った。どうやら善吉にも思ふ事があるようだ

『いや、気にしてませんから。でも見付かるといいですね』

「まあ何だかんだ言って俺も少しは心配してるからな。もし会ったら一発殴ってやる」

そう言い拳を握る善吉。取りあえずはバレないようにコイツを避けよう

『その時は程ほどにしたほうがいいですよ。それじゃあまた』

そう言つと善吉と別れた

その背後には木刀を持った男が居るのに気付かずに

めだか目線

これから役員募集会に出席しなければならないのだが余り乗り気にはならんな

「あれれ、お嬢様アどこ行くんですかあ？」

めだかは廊下を歩いてると不知火と会った。エンカウント率高っ！！

「ああ不知火か。役員募集会で演説を打たなければならないのだ。私としてはそんな方法で人員を増やす気ははいのだがな」

ほんとに乗り気では無さそうに言う。まあ仕方ないと言えば仕方ないが

「あひゃひゃ」 けど、善吉の奴は生徒会に入る気なんて更々なさそうですけど？」

不知火がそう言うとは少し考える素振りをした

不知火が私の心配をするわけが無いと思うが

「なんだ不知火、私の事を心配しておるのか」

「まさか！ 完全超人の黒神めだか心配する無礼者なんてこの世に

いるわけじゃないですか」

すこし芝居掛かった演技をしながら言う

「だろうな。だからこそ私には善吉が必要なのだ」

そう、私には善吉とアイツが必要なのだ

「ふん。あ、そういえば昨日は恭闇って名前に敏感に反応したけど、知り合いなんですか？」

恭闇か

不知火の言葉に子供の時の友達の恭闇、この学校で会った恭闇が頭に浮かんだ

「そうだな、恭闇とは昔の私の幼馴染みだ」

「へえ、善吉だけじゃなかったんだ」

「うむ、しかしアイツは

10年位前に行方不明になってな、双神同級生を見たときにもしかしたらと思っただけ」

しかし違うはずだ、もし恭闇ならすぐに声をかけてくるはずだ。何より私に敬語を使うはずがない

変なところに自信をもって言うめだか

「10以上前って、もうとっくにくだばってんじゃないんですか」

不知火があひやひやと笑いながら言う、アイツが私達に何の連絡も無しに死ぬはずがない

「いやアイツは必ず生きている。私は信じているからな」

そう、私は誰が恭闇が生きているのを否定しようが何と言おうが恭闇を信じ続ける

「あひやひや」 案外彼女と逃亡して行方不明になったんだりしてね」

「何を言っておる、そんな事なるはずが……」

いや待て、恭闇はやたらモテていたような気がする。保育園のときもいつも女子に囲まれて……、ふふふふ、恭闇が帰ってきたら話し合う必要があるな

プルルル、プルルル

「爺か、恭闇を探す隊に100万人増員しろ……、そうだ、見つけ次第拉致してこちらに送れ……、抵抗するなら武器の使用も許可する分かったな」

いきなり電話しだして物騒な事言つめだかに不知火は顔を引きつっている

（恭聞つて言う人ご愁傷さまです）
「でさでさ、目安箱つて私からの投票でも受けてくれるの」

主人公目線

うおっ！！！ 物凄げえ寒気が襲ってきたぞ。てな訳で今は剣道場に向かっている。残念な事に昨日バックを置き忘れたのだ。まあ善吉と別れた後すぐに行ければよかったのだが途中で 「俺王だから」 的な人に絡まれて時間が掛かった。
なんか「褒めて使わす」とか言われたけどお前に言われても嬉しくないっての

剣道場に着いてすこしイライラしながら剣道場のドアを開けるとそこにはぼろぼろな不良達と前よりぼろぼろな善吉がいた。その姿は鼻や頭に包帯を巻きその包帯は血で滲んでいる

『ん、なんかあつたんですか？』

取りあえずは普通に尋ねる

「恭聞か、少し事件があつてな。お前は何でここに居るんだ」

『昨日バックを忘れてましてね』

そう言うのとバックのある今で歩いていきバックを拾い戻りだした

『そつだ善吉。参考に聞くけど誰にやられたんですか？』

出ていく時に振り替えて善吉に聞いた

「ああ、同じクラスに日向って居ただろ。アイツにやられたが気にすんなよ」

『ふん、じゃお大事に』

そう言う手を手を挙げて出ていった。その顔が笑っているのを誰にも気づかせずに

さうて日向はどこかな。お、いたいた

「くそ、人吉善吉・・・、滅茶苦茶できるじゃねえかよ」

かなりボロボロで壁つたい歩いていた。随分キツイお灸を添えられたようだな

「だが絶対にこのままじゃ済まさねえねえ！　いつかギツタンギツタンにしてやるぜ！..」

『まあそんなにいきり立ちなよ』

俺が声をかけるとビクツ！として振り返ったが俺だと分かるとあからさまにホツとした

「おやゝ、双神恭闇君じゃないですか。どうしたんですか」

『なゝに、野暮用でね』

そう言つと日向が隠していた木刀を手に取りこつちに歩いてきた

「俺さ今機嫌が悪いんだ。だからさここを歩いていた自分を恨めええええ！」

ガシッ

いきなり殴り掛かって来た日向の木刀を片手で掴んだ

「なあっ！！ てめえ、見えてねえんじゃねえのかよ」

『見えてるぜ、よくくな』

ニヤリと笑つと目の包帯を取った。そこには昔と変わらず黒い目が存在していた

『俺もさ、何にも関わらず目立たずに普通に高校生活を過ごしたいのだが、ダチに何かあつて何もしないほど薄情でもねえんだよ！』

そう言い日向の顔面を殴ぐるとまたしても鼻血を撒き散らし跳んでいった。いくら脇役とはいえ哀れ日向

『さてと、解決したし帰りま・・・す・・・か』

落ちた包帯とカバンを拾って前を見るとそこには目を見開いてるめだかが居た

「きよ、きよ、恭・・・闇？」

やばっ！！ なんとかごまかし

シュンッ！！

消えた！！ てか瞬歩か

あれ前にもこのくんだりやってなかったかつぐほ！！

「恭闇~~~~~！！」

デジャブを感じつつ恭闇は腹にタックルをくらい吹き飛んだ。日向に負けず劣らず哀れ

こうして努力むなしくすぐバレてしまった恭闇だった

1話 秘密と言うのは長くは続かない（後書き）

力が力（文章力）が欲しい

次は出来るだけ早く書きたい

2話 動物になつかれないと悲しくなる（前書き）

長々と待たせてしまつてすいません

相変わらずですが見てください

設定の変更点があるので後書きを見てください

2話 動物になつかれないと悲しくなる

いきなりだが鬱だ。まさかあんなに早くバレるとはな流石の俺も思わなかったわ

しかもアイツは成長しても手加減と言うものを覚え無いか？ 保育園のときと同じで背骨どころか体全体の骨がバッキバキになったし、馬乗りになってタコ殴りにされるし散々な目にあった

『だがしかし、今日は何事もなく終わったぞ。後は帰って寝るだけ』

「とはならないぞ恭闇」

俺がガッツポーズを取って言うとは何故かめだかが同じポーズで後ろに居た。大体は予想がつく

『で、生徒会長さんはなんでここにいますか』

俺が敬語で話すと、一気にめだかの顔が不機嫌になった

「いつまでその気持ち悪い敬語で話しておるのだ。いい加減やめろ」
き、気持ち悪いだど！！ 俺が敬語を使うのに何年かかったと思
つてんだ！

恭闇は基本敬語を使わないのではなく本能的に使えないので使えるようになるまで年単位で時間が掛かった

『分かった、分かった。でなんの用だ？』

恭闇が普通に話すとめだかは嬉しそうな顔になり抱きついた。

『何に對しての抱き着きだてめえ』

はつきり言つてめだかは美人だ。サラサラとして艶ある髪、かなり整った顔に、綺麗な瞳。10人に聞けば10人全員美人だと言うだろう。

そんなめだかに笑顔で抱き締められたのにも関わらず無表情でいるコイツは何者だ!! まさかホ。

『作者! 黙つてろ!!』はい

「夢ではなくホントに恭闇がここに居ると確かめたくてな」

ホントに嬉しそうに言うめだか

俺は何してたんだろうな。コイツらに会わない方がコイツの為だと決めつけて変装までして(恭闇は目の包帯だけで変装が成り立つと思つています)結局悲しませただけか

『で、お前は俺に抱き着いたままどこに連れていくつもりだ』

俺が思考している間にコイツはじりじりと俺を何処かに運ぼうとしていた。それよりさっきまで教室に居たよな、なんでもう廊下に出てるんだ

「生徒会室に決まっておるだろう」

ええコイツ何を言ってるの見たいな顔してるけどお前が何言ってるんだよ

『嫌だめんどくさい。だいたい俺は生徒会に入らないから部外者だし』

「何！ 入らないのか！！」

何ビツクリしてるのコイツ、逆に俺がビツクリだわ！

もっと簡単な部に入るわ、特にあのモン。ターハン。ー研究部には是非入りたいものだ

「嫌だ、絶対に嫌だ。恭闇が居なければ私、泣いちゃうぞ」

めだか目に涙を溜めてウルウルしながら言う。そうこれが黒神めだかの真骨頂？「ツンデレ」だ

それを受けた恭闇は

『いや、泣けば』

真顔で返した。さながら2。キロのストレートをバックスクリーンまで運んだような清々しさだ

これを聞いたためだかは目に溜まった涙がさらにこぼれそうなくらい増えた

『分かった分かった、理由ぐれえ聞いてやるから』

「では入るのだな」

『人の話を聞こう！、まずは人の話を聞こうか！
あれ、しかもここは生徒会室の前じゃねえか』

「恭闇にはいい役職を与えるぞ」

そう言いながら生徒会室にぶちこまれた。中には普通の制服とは違い、黒を主体にオレンジの線が入っている制服を着た善吉が鏡を見ていた。アイツはいつからナルシストになったんだ

「くっそーやつぱ様になんねーなー、大体俺には黒い制服似合わねえーよ。だから制服白いこの学校に来たってのに」

「いやそんなことはない、善吉には黒が良く似合う」

善吉が鏡を見てため息を着いてると恭闇の隣に居たはずのめだかがいつの間にか善吉の後ろにいて善吉と同じポーズをしていた

「どうわっ！」

だからお前はなんでいつもいきなり後ろにいるんだよー！」

「見てくれが気になるなら内側にジャージでも着てみたらどうだ」

めだかが フン と鼻を鳴らしながら善吉に言った

『おいおいめだか、流石にバカにし過ぎじゃねえか。そんなもんでカッコいいと思う奴なんて「うわなんだコレ！？ デ、デビルかっけえー！！」 居たよここに』

「反骨精神のカタマリみてーだ」

知らない間に善吉の美的センスは斜め上に進んだようだ

『善吉、流石に無いわ』

恭闇が否定すると善吉はかなりショックな顔をして恭闇の方を見た

「なっ！？、恭闇にはわかんねえのかこのセンスが」

『ああ一生掛かってもな』

恭闇が両手を上げて言うと言葉を返してきた

「んだと！！」

大体恭闇の目に包帯巻いてるセンスの方がわからねえよ」

善吉が返した言葉に今度は恭闇が激怒した

『テメーにはわからねーのかこの美的センスの素晴らしさが』

「うむ、確かにそれは私も反対だな」

目安箱をいじっていたためだが話に入ってきて善吉に賛成する

『ば、ばかな。このセンスがわからないと言うのか』

「ああ、第一ダサイと思うぜ」

『うがああああ！！』

見返してやるーーー！！』

自分がダサイと思っていた善吉にダサイと言われた恭闇は叫びながら生徒会室を出ていった。哀れ

生徒会室を出ていった恭闇は何故か剣道場に来ていた

バンツ！！

「うお！！　なんだ」

中には入ると日向や改心した不良達が練習していた

『ひゅううううがあああああ！！』

「きよ、恭闇！　待てよ、ちょっと待って！　俺なにもつぶは！！」

恭闇は落ちていた竹刀を拾い日向に殴り掛かった。というより殴った。せつかく出番が回ってきたのにコレとは哀れである

「日向！！　大丈夫かよ」

不良の1人が日向に駆け寄った。この間にも恭闇の感情メーターは振りきっている

『今の俺の心を癒せるのはここだけだ！！』

全員掛かって来いやーーーー!!」

「「「「理不尽だーーーー!!」」」」

これで剣道場が半壊したのはまた別の話であり、これが「剣道場の悪夢」と言われたのはさらに別の話である

『ふう、清々しい限りだ』

恭闇が剣道場で大暴れして来ていい笑顔で歩いてると善吉がグラウンドに居た。しかも善吉が見ている方向には何故かボロボロなスパイクを両手にはめて追いかっこしているめだかが居た

『おい善吉。俺が出ていつてからどういう経緯があって走ってんだ。しかも両手にスパイクをはめて』

「ん、恭闇か。目安箱の相談でな、いろいろあって走ってるんだ。あと両手のスパイクは知らん」

なるほど、生徒会室から出ていく時にボロボロのスパイクと紙を持った女子生徒がこっちに来てたから大体の予想はつくが。
ん、相手を飛び越した。何か言ってる

「よし、行くか」

『行つてらっしゃっぶ!』

善吉が向かうようなので恭闇が帰ろうと後ろを向くと後ろを襟を捕まれ引きずられていく。見事に頸動脈に決まっている

「な、なんなのあのコ、わけわかんない。人を疑うってことを知らないの?」

「違いますよ諫早先輩」

恭闇が意識が落ちるまいと必死に我慢しているといつの間にか着いたらようだ

「めだかちゃん人は人を疑うことを知らないんじゃない、人を信じることを知ってるんだ!」

「きみは・・・、どうして制服の下にジャージを着てるの?」

「カッコイイと言え!」

諫早は「変よ」と言う。やはり善吉のジャージイン制服は相手が誰にも理解されないようだ

『善吉・・・、諦める』

恭闇が善吉の肩に手を置いて言う

「いいや、諦めない！いつか理解される日まで諦めないからな！
ていうかこんなくだりやるために来たんじゃないやねえよ」

善吉は1回せきしてから続いて言った

「ま、今回だけは会長の流儀にならつときますよ。あんたはもう二度とあんなことしねえって信じといてやる」

そう言つと善吉はめだかの後を追つて歩いて行つた

『まああんたもその場の怒りでやってしまったんだろけどな。ただな、他人を陥れる行為だけは絶対やめたほうがいいぜ。あんたの走りを見たがフォームや手の振りが綺麗だからもっとスピードでると思つしな』

「きみ・・・、なんで目に包帯巻いてるの、はっきり言つてダサイよ」

『うがあああああ！』

せつかく良いこと言つて決まった恭闇だったが、この一言により叫びながら何処かに走り去ってしまった。全然しまらない終わりである

翌日

恭闇と善吉は鏡の前で唸っていた

「くっそー、このカッコよさがどうして伝わんねーかな」

『何がいけないのだ。やはり外すべきなのか』

すると昨日相談に来たらしい人が来た

「あの人吉くん、カッコイイよそれも、個性的で」

『うそだろ、俺は！』

善吉の格好が誉められた事で余裕が無くなった恭闇は詰めよって聞いた

「そ、その包帯はちよつと」

『んだよもおー、とってやるよこんなもん！』

恭闇は自暴自棄になり包帯をとって生徒会室を出ていった。なんか主人公が出ていくの多いな

『で、なんでここに俺は連れて来られた、善吉』

そう確かに恭闇は生徒会室を出ていった。しばらく適当に歩いていると何故か網を持った善吉に捕獲されて連れて来られた

「今回の仕事は動物関連だから恭闇を連れていけつてめだかちゃん
が」

『いやそもそも生徒会じゃないからな、俺』

いつの間にか入ってる設定になってんのか俺。いつか俺ようの制服とか作りそうだな

「早く早く」ちよつと前から学園内に住み着いている犬がいるらしいんだよ」

『それでお前はなんで俺に乗ってんだ不知火？』

そう不知火は何故か恭闇に乗っているのである。しかも肩車で

「あひゃひゃ」だって歩くの疲れるんだもん。恭闇に乗ってれば歩くの早いし、疲れないし、高いし楽チンなんだよねえ」あ、それよりはあの犬だよ」

不知火が指差した方向を見ると確かに犬がいた。ただし傷だらけで、かなりの大型犬で、狼に似ていると言っ点があるが

「いやいやあれは犬じゃないよ。もっと大都会にいる金持ちが手放した、なにかの条約で保護されている何かだよ」

『残念だったな、あれはボルゾイと言う立派な犬だ。別名はロシア
ンウルフバウンド』

「いや名前にウルフって入ってんじゃない！」

これは立派な犬です

「嘘だろ？ほんとにあいつ捕まえるのか？くっそ、信じられねえ。不知火手伝ってくれんだよな」

「え！？、あたしが！？、なんで！？、やだよ！？、あたしは親友のあんたが酷い目にあうのを恭闇の上で眺めていただけの人間なんだから」

「いや、人間じゃねえよ」

善吉が申し出た願いを一瞬で断った不知火

これで大体のお前の性格がわかって来たよ。というよりお前はいつまで乗るつもりだ

恭闇達が話していると、うるさかったようで寝ていた犬が吠えてきた。空気が凄いいりりりっている。これにより善吉は恭闇の後ろに隠れ、不知火は恭闇の頭にしがみついていた

『ほう、なかなか勇ましい犬だな』

「いや、勇ましいどころの話じゃねえよ、まじで殺されそうだぜ。恭闇お前に任せた」

『いや、これはめだかがお前に任せた仕事だ。それなのにお前は俺に任せるのか』

恭闇の言葉により決めかねていた善吉も決心をつけたようだ

「ぐ・・・、分かったよ！」

行きゃーいいんだろ行きゃー！！」

「あつ、待って人吉！」

行くんだったらこれを持って行くんだ！」

不知火がテツテレテーーーーーっと言う音と共に取り出したのはソーセージだった

「なるほど！」

こいつを餌付けに使うわけだな！？」

不知火の意図を理解して言ったような善吉だったが、意図は全然違った

「んーんそうじゃなくてさ、これをお腹のトコに仕込んでね、「ぎやああ、内臓食われたー！！・・・と見せかけて実はソーセージでした」ってギャグやってほしいの」

『そのギャグさあ、たぶんやった2秒後にマジで喰われるぞ』

不知火が恭闇の上できゅばきゅばしながら言うが明らかにそんなノリで言う場面ではなかった

「クソッ好き勝手言いやがって。とりあえず貸せ」

善吉が気合の叫びで走って行くがこれに怒った犬は口を大きく開け

て飛び掛かった

「ぎゃああ！内臓食われたー！と見せかけて実はソーサー・・・ってマジで

ぎゃああああっ！！」

「ああステキ！ああステキ！人吉ってば超ステキ」

そのギャグをマジでやったお前は芸人の鏡だよ。不知火は俺の上で携帯でカメラ撮って助ける気なさそうだし、一通り終わるまで待つか

『というわけで、ターゲットを発見したが善吉のミスで取り逃がしたわ』

「そうか。まあ、とりあえず不知火がお前の肩に乗ってたのは不愉快だな」

結局善吉のボケもむなしく取り逃がしてしまい恭闇が報告している。ちなみに善吉はダウンして恭闇に背負われてる

「要するに行方知らずになっていた約半年間に子犬は成犬になってしまったというわけか」

『詳しい内容は知らないがこのままじゃ不味いだろ。近いうちに保健所が動きだすぞ』

「保健所？」

保健所という言葉にめだかが ピクン と動いた

『しかし保健所はかわいそうだから俺が捕まえてやる。俺がやるって言ったら何故か不知火も手伝うって言ってたし大丈夫だろ（本来はやる気がないが、犬と戯れたい）』

「不知火と？」

恭闇が真面目な事を言ってるが本音がだだもれである。そしてめだかは恭闇の言葉にさらに反応した

「ふむ、やはりその件は私が動こう」

「でも相手は動物だぜ」

ダウンしていたはずの善吉がいきなり会話に入ってきた。起きてんなら降りろ

「私の方の案件もあらかた片付いておるし」

そこでめだかは話を区切り鬼気迫る顔で振り返り言った

「何より！ 恭闇と不知火がこれ以上イチャイチャするのが我慢ならん！！」

こちらは本音がだだもれどころか本音しか言っていない

『もつとまともな理由で動けや!!』

恭闇の突っ込みもむなく事は淡々と進んでいった

その後復活した善吉とめだかと恭闇と不知火で探しに行く事となったが恭闇が少し用事があるって言うので少し遅れて向かった

『たくよ、大丈夫だって言うてんにわざわざ来る必要ないだろ』

愚痴りながらめだか達を探していると善吉、不知火と犬のぬいぐるみを来ためだか?がいた

『待ったか。あれ、めだかはどうした?』

『私ならここに居るだろ』

『まだ来てねえのか。遅せーヤツだな』

無視した恭闇にめだかが話しかけるがこれまたスルーした。
2度無視されためだかは恭闇に抱き着いた

『貴様、ここに居ると言っておるだろ』

『お前じゃなかったらどれだけ楽か……ってかい加減離れる暑苦しい』

離れると言われためだかは渋々離れたが、その顔は不満がいっぱいだった

「少しいいですか。何ですかその格好？」

不満げなめだかに不知火が聞いてきた

それは俺も聞きたいな。分かるけど分かりたくない答えが帰って来そうだな

「ターゲットに私を仲間だと思ってもらう作戦だ。動物と触れ合うには時はこちらから歩み寄ってやるのが大切だからな」

その答えに不知火は固まり、善吉と恭闇はやっぱりかため息をついた

「……ねえ人吉、このお嬢様ってひょっとしてさあ」

「あ、気付いた？」

「1週回って基本バカだよ」

『善吉、前より酷くなってるないか？』

『良い意味でも悪い意味でも』

「これについてはどうしようもないよ」

めだかの答えについて恭闇達がひそひそ話を始めた。言ってる事は何気に酷いがしかない

「しかし、あれが今回のターゲットか」

そう言いめだかが見た先には確かにのボケむかしく取り逃がした犬がいた

「いやあんま強がんなよ、止めとけて」

「そうですよ会長、あたしと恭闇でやっておきますから」

「あれ、俺は」

不知火の発言に善吉が突っ込みを入れていると、めだかが凄く嫌そうな顔で振り返った

「ふん！いいから貴様達はそこで見ておるがよい！
私がいつまでも過去に囚われるような女でないことを証明してくれる！」

そう意気込むめだかは真っ直ぐ犬の方向に歩いて行った

「・・・？、何ムキになってんだあいつ？」

「妬いてんじゃないのー？あたしと恭闇が仲良すぎるから」

『あいつはそんなタチじゃないだろ』

「（普段はそうだがお前に関連する事になると今みたいになるんだ

よ)」

不知火と恭闇の会話に心の中で突っ込みを入れる善吉もはやこういう小説で主人公が鈍いのはスキルです

そうこうしてるとめだかと対峙している犬がいきなり立ち上がり情けない鳴き声を上げて恭闇の後ろに隠れた

『やっぱりか』

「え・・・と、人吉くん。これどーゆーコト？」

恭闇が怯えている犬を優しく撫でているのを見ながら不知火は善吉に説明を求めた

「はあ、めだかちゃんは動物が苦手なんじゃなくて動物がめだかちゃんを苦手なんだよ」

『俺はまだコレの役目なのかよ』

恭闇が犬を撫でながらため息をついてこの件は終結した

「というわけで、ボルゾイ君は無事に飼い主のもとに帰りました。まあ取りあえずは一件落着かなと」

「・・・私は、あんな可愛いワンちゃんにもなついてももらえないなんて、

私はどうしようもなく駄目な人間だ」

『落ち込むのはいいが俺から離れてから落ち込め』

善吉が報告している間にもめだかは恭闇に抱き着いて落ち込んでいて報告をまるで聞いてなかった。

恭闇はめだかが抱き着く事については無視する事にしようだ

「でもたまに犬が居なくなる時があるようなんだか、なんだろうな」

『あ、それは犬が俺のところに来てるからだわ』

「お前かよ!!!」

2話 動物になつけないと悲しくなる（後書き）

善吉を男装にすると書いたのですがやっぱりそのまま男で書くことにしました

親友、突っ込みキャラとして書きたいと思うのでよろしくお願いします

3話 善吉交代の危機（前書き）

言ったとおり少しですが
修正しました

3話 善吉交代の危機

『昨日の犬捕獲の後は疲れたな。大体アイツを慰めるのに何時間かかったと思ってたよ』

「はあ、恭闇もう過ぎたからいいじゃねえか」

『てめーは俺に押し付けてすぐに居なくなつたからそんな事言えるもんな』

恭闇がそう言うと言善吉は目をそらした。昨日から1日たち今は恭闇と善吉と不知火と日向が昼ご飯を食べていた。すると話していた善吉が紙を取りだし何かを確認しだした

「えーと、ボクシング部に行ったから・・・、格闘技系はこれでコンプリートか。じゃあ次は趣向変えて格闘球技攻めてみつかない」

「なあ、お前どうしてそんなあちこちで暴れてんだ？そんなスポーツ好きだったけ？」

日向が善吉がいろいろな部活に体験入部に行つては入部しないで終わるのに疑問を持って聞いた

「別に、ただ俺の中のルールで1日に5リットルの汗をかくって決めてんだ」

ズズズズズズズ

「ぶはあああああ！」

あーわかるわかる。あたしも1日5リットルのラーメンを飲むつて決めてるしね」

『間違つてもラーメンは飲み物じゃないがな』

善吉の答えにラーメンを食べていた（飲んでいた）不知火が顔を上げて同意したがぜんぜん違うと思う。その不知火の横にはすでに食べ終わったラーメンの空が山積みになっていた。明らかに5リットルを越えている

「シーザーサラダって野菜ジュースだと思っただよねー」

「ま、それくらいしなないとあの黒神^{バケモン}には付き合えないのはわかるけど、もう止めといた方がいいかもな」

『そうだよな、俺みたいな非力な一般人には付き合えないよな』

「いや、お前も十分バケモン」なんか言っただか日向『何でもありません』

不知火の発言を無視して話を進めようとした日向だったが恭闇の発言には被害者として何か言おうとしたが恭闇の威圧感で言えなかった

「しかしもうやめた方がいいかもな。お前噂になつてるぜ、生徒会の「部活動荒らし」だよ」

日向がそう言つたと善吉は何かおかしな物を見るかのように日向を凝視した

「なにお前、俺のこと心配してくれんの？」

「バツ、お前の心配じゃねーよ!!」

『なら俺の心配か?』

「お前は心配する必要性を感じられない」

『さてと、今日も剣道場に行くかな』

「すみませんでした。だからそれだけは止めてください」

恭闇が言つと日向はその場で土下座して謝った。これだけは言おう、
恥ずかしくないのか

「恭闇、あんまいじめんなよ。それにこちらとら最初から名前を売るつもりでやってんだよ」

『いじめてるって失礼な、だいたい善吉も考えなしにそんな事やらねえだろ。』

あとお前なに仲間みたいな顔して一緒に食べてんだ。てめーはべー
ータか』

ベジ。タが分からない人はドラ。ン。ールを見てね

「カツ! しかし「部活荒らし」か、そのニックネームじゃ少し弱いな」

『あれ、善吉知らねえのか? 一部では「生徒会の番犬」って呼ばれてるんだぜ』

そう善吉は前にめだかに下剋上をしようとしていたグループを力でねじ伏せた時から一部で生徒会の番犬って呼ばれてるのだ

「え、マジでそんな2つ名があんの！

デ、デビルカッケエエ！」

「恭闇はそう言うけど恭闇にも2つ名あるよ」

『え、嘘だよ。俺目立った記憶ないよ』

善吉のセンスは相変わらず分からないがどうやら恭闇にも2つ名があるらしい

「たしか「めだか（魔物）使い」だったね」

『いらねえよそんなドラ。エの職業みたいな2つ名！！！！』

そんな訳で今日も生徒会は始まる

「恭闇、善吉。今日は柔道部に行くぞ」

放課後となり生徒会室に行く（連行される）と下着姿に胴着の上だ

けを羽織っためだが言ってきた。それを見た善吉は一瞬でドアを閉め、鍵を掛け、カーテンを閉め、電気を消した。もしこの動作がギネスにあるなら登録されていただろう

「鍵を掛ける！カーテンを閉める！人目をはばかれ！何遍言ったら分かるんだ」

「????」

さっぱりわからん」

『お前常識って言う字を辞書で調べてその意味を1000回紙に書いてこい』

善吉が常識として言っているがめだかにとっては常識ではないようだ
「それに練り上げたこの肉体を衆目にさらすことに一体何をためらう必要があるのだ？」

『お前から見たら普通かも知れないが俺達から見たら普通に変態発言だからね』

むしろ見せたいみたいな発言と共に胴着を左右に引っ張って見せてくるめだかだが恭闇は冷静に突っ込んだ

「もちろん恭闇が見たいと言っのならば裸になって私の全てを見せてもよいのだぞ」

『多分そのお願いをする事は一生ないから安心しろ。で、柔道部だっけ』

めだかがものすごい発言をしたが物の見事に恭闇はスルーした

「つれん奴だな、だがそこもまた良い！」

「いいから話進めろよ！」

めだかの発言から始まって中々進まないから善吉が叫んだ

「仕方ないヤツだ。

柔道部部長の鍋島3年生は知ってるな？

彼女から目安箱に投票があつたのだ」

「鍋島って特待生の鍋島猫美さんか？

あの有名な柔道界反則王と呼ばれたあの人？」

『??????』

恭闇の頭の上には？がいくつも並んでいる

「ふむ、部長とは言えもうすぐ引退だからな。

そこで私達に後継者選びを手伝ってほしいそうだ」

『いや後継者選びを手伝うって柔道部の中を全然知らない俺達じゃ無理じゃね』

なんか恭闇はこの依頼に疑問を感じているようだ

「まあ何にせよ行ってみようではないか。

柔道部といえは懐かしい顔にも合えるだろうしな」

めだかがそう言つと善吉はあからさまに嫌そうな顔をした。柔道部に何かあんのか？

「恭闇、早く行くぞ」

あ、俺は行くの決定なんだ

「やーやー、ようこそいらつしやいませ！

ウチが差出人！柔道部部長の鍋島猫美です。本日はどーぞよろしく！」

柔道に着き中に入ると結構な部員の数がいた。その中で部員に注意していた女の人はこちらに気付いて近づいてきて挨拶した

「生徒会長の黒神めだかだ。今日はできる限りのことをさせてもらう」

「うんうん。頼りにしとるで黒神ちゃん！」

そう言つと2人はがっしりと握手をした。その間恭闇はなぜめだかは上から目線なのか考えていたそうだ

すると善吉が小さい声で話しかけてきた

「反則王って呼ばれるくらいだからもつとアレなのを想像したが意外なキャラだな」

『ああ。もつとゴツくて、厳つくて、男だか女だか分からないヤツを想像したんだが』

「いや、それは酷すぎんだろ」

俺もそこまではと善吉と恭闇が話していると鍋島が一瞬こつちを睨んだような気がしたが気のせいだと思いたい

「あ、そーや。ジブンに挨拶したいゆー奴おんねん。阿久根！おい阿久根！」

その阿久根って言うヤツを呼ぶと奥からサラサラの髪を肩まで伸ばした爽やかなイケメンが現れてめだか前まで行くと跪いた

「ご無沙汰しておりますめだかさん。生徒会立ち上げの大事な時にお気をわずらわさせてはいけないと控えておりましたが、ずっとあなたに再会できる日を心待ちにしておりました」

何あの態度、めだかが洗脳かなんかしたのか？

ふと恭闇が横を見ると善吉が嫌そうな顔をして阿久根を見ていた

どうしたんだ善吉のヤツ？

「堅苦しい真似はよせ阿久根2年生。貴様ほどの男がそのように振

る舞っては示しがつくまい」

「いえ、誇りこそすれあなたにかしずく姿を恥とは思いません。今の俺があるのはあなたのおかげなのですから。

めだかさんにはいくら感謝してもし足りない・・・」

ガシッ！！

「私に感謝していると言うのなら頭を下げるな！
胸を張れ！！」

「は・・・はいっ！

めだかさんのっ御心のままにっ！！」

阿久根がへりくだってめだかに話しかけるがそれがめだかにとって
は気に食わなかったようで注意されると顔を赤くして答えた

阿久根っていうヤツ、俺のお前への第一印象は変態になりそうだよ

「おっとそれはそれとして生徒会を執行せねばな。
後継者、つまり新部長の選定だったか。

とりあえず貴様は特別枠だ阿久根2年生。善吉と談笑でもしておい
てくれ」

そう言われると阿久根は夢心地で顔を赤くして俺と善吉が居る方へ
来るが善吉を見ると一気に雰囲気が変わった

「久しぶりだね。えーっとキミの名前なんだっけ？」

「人吉善吉クンですよ。」

ところでアンタ一体誰ですか？」

「虫が！相変わらずめだかさんの足を引っ張る仕事に精を出しているらしいな。言っておくがめだかさんの支持率が100%に達しなかったのはキミのせいだぞ！！」

「カツ！あんま意地悪言わないでくださいよ。」

人格者で通ってる柔道界のプリンスが下級生いじめなんてファンの女の子が知ったら泣いちゃいますよ」

この2人すごい仲悪いな。言うならば＋と－みたいな感じだな

「ところでキミは誰なんだい？その制服だと生徒会の者ではないようだが」

善吉との会話は一通り終わったようで恭闇に話しかけてきた

『ああ、俺は双覇恭闇って言います』

「っ！ キミが「めだか使い」と言われている者か！」

誰が始めに言ったがわかんねえが殺す

「めだか使いと付いたのは恭闇が唯一めだかをコントロールできるとして付いた名なのだ」

「キミは一体何者なんだ？入学してこんなにすぐにめだかさんが気を許すとは考えにくい」

「コイツは俺とめだかちゃんの保育園からの友達ですよ。言うなら

ば幼馴染みですね」

阿久根の言葉に善吉が答えると何故か親の仇を見るような目になって見てきた

俺が何をした

「そうか、俺は2年生の阿久根高貴だ。よろしく」

そう言い握手をしようと手を伸ばしてきたので掴もうとするとその間に柔道部の1人が飛んできた。とっさに避けて飛んできた方を見るとボロボロで倒れている部員の中でめだかが立っていた

『めだかが相手じゃ話しにならなかったですね』

「さすがだなめだかさんは、中学生の頃より更に輝きを増している！」

恭闇が部員の有り様を見て阿久根に話かけるが阿久根はめだかに酔っていてぜんぜん話を聞いていなかった。きっと中学のめだかと今のめだかを比べて夢に浸ってるのだろう

あつちはあつちで善吉と鍋島が話しているが善吉の一言で阿久根が夢から帰ってきた

「そうか無理矢理だとほざくか。だったら俺が変わってやろうか？」

この言葉に善吉は「何言ってるのコイツ」みたいな顔をしたので阿久根は補足した

「思いつきで言ってるわけじゃない。めだかさんの同情心に免じてこれまで見逃してやってきたがさすがに潮時だろ。」

それに何もできない虫のような虫とは言えキミももう高校生だ。大きな岩の下にいたい虫の習性はわかるがそろそろ独り立ちするべきじゃないのかい？」

「……独り立ちできてねーのはどっちですか。何もできない？ 変な変態を近付けないくらいでしますよ」

真面目な事を言っていた阿久根だったが途中からもう悪口になっていてそれを聞いていた善吉は冷静にキレて悪口で返した

善吉、挑発に乗ってたらきりがねえだろ

「まーまーケンカはやめーや、ここは神聖な柔道場やでー？」

善吉と阿久根の言い合いに仲裁に入ったのは鍋島先輩だった。しかしその顔には何かを企むような笑みが浮かんでいた

「ここは柔道場だしどーや？ここは柔道で決着つけるゆーんは？阿久根くんが勝ったら生徒会に入り人吉くんが負けたら柔道部に入っ
てウチの柔道の後継者になる」

なるほど。投票があつた時から感じていた違和感はこれか。確信犯め！！

「鍋島先輩アンタひよつとして最初からそのつもりで投票したんですか？」

「うん！人吉くんみたいながんばり屋さんがウチはめっちゃ好きな

んよ」

善吉が気付いたようで鍋島に言ったが鍋島はむしろ開き直り善吉に告白した

よかったな善吉、春が来たぞ

そしていつの間にか善吉が胴着を着ていて阿久根と向かい合っている

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式な！

無制限十本勝負

対

無制限一本勝負！

阿久根クンに十本取られるまでに一本でも取れたらジブンの勝ちや人吉クン！」

「フン、尻尾を巻いて逃げなかったことだけは誉めてやろう。

ああ、でも虫には尻尾はなかったか」

「なんですか、逃げるってアリだったんですか？

先に言ってくださいよそういうことは」

「逃げる？

そんなものアリなわけがなかるうが」

はああ、

この勝負話しにならないに決まってるんだろ。少し柔道をかじったヤツが普通に柔道やってるヤツに勝てる訳がない。しかも阿久根って特待生らしいし

「誰からの相談でも誰からの挑戦でも受け付ける。

如何な内容でも如何な条件でも！如何な困難でも如何な理不尽でも享受する！

それが箱庭学園生徒会執行部だ！！

人吉善吉、私は貴様に負けるなどと言わん。しかし逃げることは許さんぞ」

善吉、大変だな生徒会に入っただばかりに

ん、俺？

入ってないよ

始まると善吉は先手必勝とばかりに阿久根に突撃するが綺麗に一本で投げられた

『うわー、痛そう』

「そっやね」

恭闇が顔をしかめて呟くといつの間にか隣にいた鍋島が話してきた

『鍋島先輩でしたっけ？俺は双覇恭闇っていいいます』

「よろしくね恭闇くん。それにしてもさすが阿久根くん、綺麗な一本やなー。後の先取らせたら右に出るモンはおらんわ。

ホンマ天才的で・・・・・・・・・・・・・・・・つまん柔道や」

恭闇の隣で観戦していた鍋島が上機嫌そうに言ったがいきなり雰囲気が変わった

『へえ、随分天才が嫌いなようですね鍋島先輩』

「うん嫌いやで、大嫌いや。黒神ちゃんも阿久根クンのこともな。才能を努力で踏みにじりたあてウチは柔道をやっとんのよ」

「なるほどさすが柔道界の反則王は言うことが違う」

鍋島先輩の言葉にめだかは感心したように言う。今の話の内容に感心できるのは一つもないがな

「ま、黒神ちゃん天才は天才同士、凡人は凡人同士でつもるやないか。ウチの柔道に阿久根クンはいらんジブンにやるわ。そんなかし人吉クンくれや。あ、後恭闇クンも」

「ふむ、ならば安心しろ

鍋島三年生、

天才などいない。

あと恭闇はやらん」

『いや俺どつちのものでもないからな』

こつちでばか話してる間にあつちでは善吉が九本投げられて後がなくなっていた

「善吉！」

お、めだかがカツを入れるのかと思うと

「いつ如何なる場合においても決して私は貴様に負けるなどとは言わん。」

だから勝つて!!」
きやるゝん

「貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ。困るぞ。泣いちゃうぞ!!」

予想とぜんぜん違う事をめだかがやると善吉が前に倒れそうになる
がその勢いを利用して阿久根の両足を持ち上げて倒した

すると阿久根は横を向き
渋々負けを認めた

「信じられへん。阿久根クンにホンマに勝つてしもた。いやそれより
諸手狩りならウチも諸手狩りはよう使うけど人吉クンはあんなにも
綺麗に……」

「綺麗も汚いもないし天才も凡才もない。
いるのはただの懸命な人間だけだ、私も貴様も何も変わらんよ」

その言葉を聞いてビックリしたような顔になるが次には何か納得し
たような顔になった

「まあ、今回はそう言う事にして恭闇クンだけで我慢しとくわ」

『いや何で俺の話が入るんだ』

「したかて恭闇クンの姿はウチの好みにドスライクなんやねん」

『いやいやドスライクやねんって言われても……』

そう言い何気なくめだかの方を見るとめだかが笑みを浮かべているがドス黒いオーラが出ていた。何故かわからないが生命の危機を感じる

「それに黒神ちゃんには善吉くんがいるんやから恭闇くんはええやん」

「ほう、それは私に対する挑戦と取っていいのだな。私は誰からの挑戦でも受け付けるぞ！」

「そうか。ほんならここで決めてもええんやで」

なんかめんどくさい事になってきたな。

あ、もちろん俺は誰にもバレないように帰りました

「ふーん、そんなことがあったんだー」

逃げた次の日恭闇と不知火と善吉が生徒会に向かっていた

「大変だったねー！ 遠慮せずにあたしを頼ってくれたらよかったのに」

『いや悪いけどなんの解決にもならないから』

不知火には悪いが確かに居てもその場をメチャクチャにして笑いながら帰りそうだ

「恭闇そんな事言ってるけど昨日大変だったんだぜ。鍋島先輩は笑ってすんだがめだかちゃんは笑っていたけど周りに怒気と殺気を無差別を振り撒くから」

そう言つと善吉は昨日を思い出したのかため息をついた

「で、柔道部の後継者問題は怎么样了わけ？」

「あーそれな。結局めだかちゃんの推薦で城南つて人が継ぐことになったようだぜ。鍋島先輩もこれで俺のことは諦めてくれるはずだし一件落着だな」

「そうだねえ。諦めくれるといいねえ」

善吉の言葉に意味深げにニツとニヤついて不知火が言う

『あの手の人はそう簡単に諦めないから頑張れ』

「あ、恭闇のことは諦めへんでーって言ってたぜ」

『（俺が異常者だつて言おうかな）』

恭闇がボソツと言った言葉はこの作品を根本的に覆す事なので聞き流してくれ

「じゃあプリンスは？阿久根先輩はどうなったの？」

「さてな、なんか居づらくなって柔道部やめたとか聞いたけど
ま、俺にはもう関係ねえ……」

そう言い生徒会室の中に入ると何故かパンツだけの姿の阿久根が鏡
の前に立っていた。これには善吉はコケて不知火はヨダレを出しな
がらキヤーキヤー言っている。

恭闇は善吉の見事なコケに笑いをこらえている

「なっ、なんでアンタがここにいるんだ！」

「ん？ ああ人吉クンか。」

キミを追い出すのは諦めたが俺はめだかさんを諦めたわけではない
のでな」

阿久根目線

あれは人吉クンと試合が終わった後の話だ。

「俺は『あゝ、回想シーンは長いからカットで』
ちよ、いい話なんだから回想くらい『はい次次』」

阿久根目線強制終了

「ほ、本日付で生徒会執行部書記職に任命された
2年11組 阿久根高貴だ。よろしくお願いします
先輩！」

阿久根が嫌味で挨拶を言っているが恭闇のせいではないんだ

「ふっふっふっ、

ふざけんなああっ!!」

そして生徒会に新たな仲間が加わった

3話 善吉交代の危機（後書き）

できるだけ早く書きたいと思います

4話 諭すってキャラじゃない(前書き)

いつもより掛かってしまいました。

次こそは

4話 論すつてキャラじゃない

阿久根が生徒会に入るというイベントも終わり今は善吉が部屋いっぱいにある花に水をやっていた

「ふむ、しっかしもういっぱいいい感じだな。そろそろ部屋の外に出してかねーと」

『そーえばなんでこんなに花があるんだ？そして俺は何故縛られているんだ？』

今日こそ逃げようとした恭闇だったが結局捕まり縛られて連れられてられたのだ

「ああ、これはめだかちゃんか案件をひとつ解決することに花を一輪飾るっていつてな」

『おい、重要な所無視してるから』

「それでいつか見渡す限り一面に花を咲かせるのが夢なんだとよ」

『もはやいいわ。』

こんな日々も今日で終わりだからな』

「ん？ どういう・・・」
ガラ

「やあ人吉くん、今日も雑用雑務に精がでるね。俺はキミのことを害虫だとばかり思っていたが花を育てているところを見ると益虫な

のかな？」

恭闇の言葉に善吉が聞き返そうとすると胸元を露出させた阿久根が嫌味を言いつつ入ってきた

『善吉に対する悪口は置いて「置いとくな!!」
なんですかその着こなし』

「おや？恭闇くんいたのかい、なぜぐるぐる巻きなのは聞かない
でこつ。」

俺は生徒会の一員として
会長のめだかさんを模範として見習う義務がある」

あ、なんかバカな発言をしようとしている気がする

「だから俺もめだかさんのように胸元を露出する!!」

そう言つと阿久根は胸元を掴み露出させるように広げた

「サ、サタンかっけえ！」

とりあえず2人してバカだな

「そんなことよりめだかさんはどうした？まだ来ていないのか？」

「私がどうかしたか阿久根書記？」

阿久根がめだかの居場所を聞くと丁度よくめだかが目安箱を持って
現れた

「今回は3票入ってるぞ」

「さすがめだかさんです」

「ふふ、そう褒めることでも無いぞ阿久根書記」

『さつさと開ける善吉。時間の無駄だ』

「そうだな」

バカ2人はほつとくといつまでもやってそうだから
善吉に開けさせた

「まずこれからだ」

そう言うところにある内の1枚を取ると広げた

「なにに「生徒会の人が拉致してきます。どうにかしてください
破神恭闇」・・・・・・・・・・・・・・・・」

善吉が依頼の内容を聞くと生徒会室の空気が止まった

ふははははは！、これが俺の作戦だ。めだかは目安箱の投票を必ず
実行するから拉致するのを止めるしかあるまい

「善吉、その紙をかせ」

めだかが善吉から紙を受けとると読み出した

『ふははははは、さあめだか、張り切って生徒会を執行するがいい』

ビリ

何を思ったかいきなりめだかは紙を破いた

『なああああ、なにやってんだめだか！
依頼放棄か！』

「この依頼ならすでに解決しているから問題あるまい」

そう言うときめだかはいつものように扇子を広げると口元に持っていた。

なんか腹立つ

「この依頼は恭闇が生徒会に入れば拉致することもなくなるし解決だ。まさか正面から入るのが恥ずかしいからとこんな風に入るとはな、かわいいヤツだ」

しまった！！！！

超ボジティブな思考回路のこいつはもの凄いバカみたいな解釈をするんだ

このめだかの言葉にさすがの善吉と阿久根も言葉がない。
こうして依頼は解決？した

認めねー！！！！よ！！！！

恭闇の依頼については恭闇が取り消したためなくなった（そのさいめだかはもの凄い残念そうにしていた）。仕方ないので次の依頼に移った

「それでは八代3年生、
詳細を聞こうか」

「つーか詳細ってほどのことーねーんだけどよ、あんたに手紙の代筆をお願いしてーんだよ。黒神さんて硬筆でも毛筆でもすげー綺麗な字イ書くじゃんよ」

『（善吉、めだかつてそんなに字が綺麗なのか？）』

「（ああ、小三の時に名のある書家に弟子入りして3ヶ月で師に引退を決意させたくらいだ）」

懐かしいなあ、俺も本にあった達筆を真似して書いたらそれが日本でかなり有名になった

ちなみに恭闇はそれが有名になり始めたら偽名をなのり行方を眩ましたので知らない

「あたしガキン頃から字が汚いのがコンプレックスでさ、だからあたしの代わりに手紙を書いてほしいんだ。お願い！」

八代は頭を机にぶつかる位に頭を下げた

「ふむ、なるほどな。まあ私が受け付けてもよいのだがな」

めだかはそう言うのとチラッと阿久根と恭闇を見た。
やべー嫌な予感がある

「そういうことならば私よりも適任がある、阿久根書記 貴様に初仕事をやろう。貴様に全権を委任する、生徒会書記職の実力を見せてやるがよい！」

「！？、お・・・お任せください！この阿久根高貴、必ずやめだかさんの期待に応えてみせます！！」

また阿久根はめだかに跪き宣言した。この行動に善吉や依頼人の八代も若干引いている。毎回思っけど本当に洗脳してないよな

そして阿久根は生徒会を執行するために八代と出ていった

「ふーん、確かにこの投票を見る限り綺麗な字とはいえなーやな。でも今はケータイとかあるんだしそんなに気にしなくてもいいのに」

『人のコンプレックスを衝くとは成長したな善吉』

「あれ？ 俺ほめられてんのか？」

まあ8：2で嫌味だな

「まああえて手紙で伝えたいのだろう。その気持ちはわからんでもない。」

もつとも私なら直接言葉で伝えるがな。どうだ恭闇」

「？なんで俺に言うんだ」

恭闇がそう言うためだかと善吉は揃って溜め息を吐いた。
失礼な奴らだ

「カツなんにせよ阿久根先輩に任せときゃ問題ねーよな」

「うむ、問題はない。だがそれが問題なのだ、
よし恭闇、少し行ってこい」

『誰が行くか！』

「まあ、待て。行ってくれるなら私ができる範囲で何か聞こう」『行
つてきまーす！』ふう、気の早いヤツだ」

阿久根目線

む、今回は邪魔するヤツは居ないな。では行くか俺は教『はい、

ストップ。終わりだ』ま、またか、あ

阿久根目線強制終了

「ラブレター？」

阿久根が不思議そうに聞き返した。さすがに失礼だ

「そーだよ！書いてほしいのはラブレターだよ！
何か文句あんのあよ！」

『そーだ謝れ。俺に』

「す、すみません。
ん？、なんでキミに謝らなきゃならないんだ！」

ナイスだ阿久根、キミはこの世界でもやって行けるぞ

「あたしもさ自分でわかってんだよ！あたしみたいなガサツな女が
愛だの恋だのちゃんちゃらおかしいっな！でも好きになっちゃなら
どうしようもねーじゃん」

「！！・・・そうですね、あなたのいう通りです。八代先輩」

阿久根は俯いてボソツと言葉を発した。腹でも下したか？

「わかりました！

黒神めだか率いる生徒会執行部書記として！

どんな男でも心を動かさずにはいられない最高の名文を仕上げて差し上げます！！」

「お、おう。まあ、よろしく頼むぜ」

と、まあ一件落着になるのかな。でもこれは聞きたいな

『なあ阿久根先輩、その方法でいいんですか？』

「ああ、俺が素晴らしい恋文を書き上げよう」

『八代先輩もそれでいいんですか？』

「ああ、あたしもそう思っただけで依頼をしたからな」

『そうですか、ならいいですけど』

そう言っただけで恭子は教室から出ていった

本人がいいって言うなら他人がどうこう言ってもどうしようもないしな

そして時が過ぎ阿久根先輩が書き終わって生徒会室に戻ってきた。
その間俺は抱き着いてきたりじゃれついて来るめだかをあしらうの
に時間を潰した

「書き終わりました、確認してくださいめだかさん」

めだかがかなり冷めた目で本文を読んでいる

「・・・・・・・・」

「いやー大変でした！なにせ女子の気持ちになって恋文を書くなど
初めての経験だったものですから。
しかしその甲斐あってかなりの名文が仕上がったと自負しております！」

「・・・・・・・・つまり、文面も貴様が考えたわけだ」

「ええ！どうでしょう！」

よければ早速八代先輩に届けてきますが「阿久根書記」

「八代3年生が意中の男に伝えたいのは言葉か気持ちかどっちだ」

「・・・・・・・・え？」

「貴様の字で、貴様の文章で、伝わるものとは一体なんだ」

そう言つとめだかは立ち上がりドアに向かって歩き出した

「え・・・あのしかし、代筆してくれというのが依頼なのですから
「思い上がるなよ人が人に代われるものか」」

「八代3年生は困ってるのではない願ってるだけだ。問題などないのに問題を作り出しているだけだ。貴様ならそんな彼女を諭してやれると思っていたがな。貴様には絶望した、もう何もしくなくていいぞ」

そう言うときめだかは部屋から出ていった。部屋には冷たい風が流れた

「はあーあ、めだかちゃんとは相変わらず身内には容赦ねーな」

するとその空気をぶち破るように寝てましたよアピールする善吉が言った

「ま、気にしちゃダメですよ。アンタは何も間違っちゃいない。例によってめだかちゃんが正し過ぎるだけ」黙れ、俺は虫に慰められるほど落ちぶれてはいない」

「そして一度や二度拒絶されたくらいで諦めるほどできた人間でもない」

そう言うとき書いた紙を破り歩き出した

『はあ、俺も行きますよつと』

「いらない、これは俺に任された仕事だ」

『俺もめだかに頼まれてるんでな』

2人はドアから出て行った

ドサ

「え・・・なつなにこれ!？」

教室にいた八代の前に阿久根は何十冊もの本を置いた

「見ての通りです。あなたの気持ちに相應しい字が書けるようこれから俺と練習しましょう」

「な、何言つてんだ？

あたしそんなこと頼んでないぜ!？」

自分の頼んだ依頼と違つのに戸惑っているようだ

「頼まれてもないことを執行してこそその生徒会です。八代先輩、自分の気持ちは自分の字で伝えてこそそのラブレターでしょう」

「・・・・・・・・・・」

大事な事に気付いた阿久根先輩なら諭せるだろう

「安心して下さい、出来るまで俺がとことん「うるせえええっ
！！」つぶふ！！」

あ、ありのままを話すぜ。諭そうとした阿久根先輩が八代先輩に殴られて廊下に消えた。予想外過ぎる

ギョ

「何が生徒会だよ！ お前もあたしの前から消えろ！」

お前って俺しか居ないよな、阿久根先輩が死んだ（生きてます）今、俺がやるしかないか

『いや、めだかに頼まれてますから』

「消えろよーっ！っ！」

恭間は殴りかかってきた八代の手を掴みそのまま八代の後ろに回して動けないようにした

「くっそー！ー！！離せよー！ー！！」

『話ぐらい聞いてくださいよ、だいたい字が汚いとしても自分で出すなら自分で書けばいいでしょ』

「うるせえ！ー！それができるなら最初からそうしてっ！ー！」

『できねえならできるように努力しろよ！ー！』

「っ！ー！！」

これを聞いた八代は抵抗を止めてビツクリしたような顔でこっちを見た

『確かに俺等が書けば綺麗な字で上手いことがかけるだろう。しかしそれはあんたが本当に伝えたい事か？いいや違う、それはあんたが本当に伝えたい事じゃない』

「・・・・・・・・」

『汚い字でもいい、それが嫌なら努力して綺麗な字を書けばいい。あんたが伝えたい事はあんたじゃなきゃ分からない』

「・・・・・・・・」

ポン

『不安があるなら俺や生徒会を頼ればいい、喜んで手を貸すぞ』

恭間 は頭を撫でながら諭した。あれ、上級生の頭を撫でるって失礼じゃねえ

『まあ、取り合えず阿久根先輩を起こすか』

「あ、ちょ、ちよつと待てよ」

恭間 は廊下でノビている阿久根を起こそうと教室から出ようとする
と八代に止められた

「あ、あのよ、その・・・あ、ありがとな／＼」

『ふ、別にいいって』

八代が顔を真っ赤にして恭闇にお礼を言った

まあ、そんな訳で阿久根先輩を起こしラブレター制作をおこなっていたがついに本人が満足する出来に完成して一応依頼は達成された

「ということで依頼は達成しました」

「うむ、終わって見れば

100満点の仕事ぶりだ。見事な手際だよ」

「一体何を評価されているのかわかりません。だいたい私はあまり何もしていません」

「まあそう言うな、成果をあげた時は謙虚するでない。私に貴様を誉めさせる」

そう言うとめだかは椅子から立ち上がり阿久根に近付いて手を伸ばした

「よくやったな阿久根書記、私が間違っていた。ありがとう!」

めだかが阿久根の頭を撫でながら至近距離で笑顔を見せると阿久根の頭はオーバーヒートした

そんな訳で生徒会に新たに一輪の花が加わった

おまけ

「そいえば、不知火に聞いたけど八代先輩って好きな人が変わったらしいぜ」

善吉が思い出したように言った。てか不知火、何でそんな事知ってるんだ。

（阿久根はずっとトリップしています）

「それで最近恭闇に話し掛けて何かを渡そうとしては顔を真っ赤にして逃げ出すのを多数目撃してるらしいけど、何か知ってるか？」

『なんでそんな事まで知ってたんだよ！まあ俺もよく分から・・・な・・・い？』

恭闇は見た。いや見てしまった。めだかが笑顔になり黒いオーラを

出すのを

「恭聞・・・、貴様は一体何をした。さっさと吐け!!」

『うお！ 何をしたって言われても・・・、少し諭して、頭を撫で
「頭を撫でただと」て・・・』

あれ、俺なんか地雷踏んだか？

「わ、私は10年以上撫でられていないというのに・・・」

なんかブツブツ言っていためだかだったがいきなり顔を上げて抱き
着いてきた

「ずるいぞ八代3年生ばかり、私も撫でろ!!」

『いや意味わかんねえから、痛でで、痛いって』

めだかが強い力で抱き着いて来るので体が悲鳴を上げている

「な～～で～～ろ～～」

『痛いから痛いから、

あー、今ボキっていった』

「ああ、めだかさん勿体なきお言葉です」

「・・・、今日も生徒会は平和だな」

5話 体型が良ければ良いってもんじゃない(前書き)

かなりの時間が空いてしまいました。少し、いやかなり忙しかったもので、

次からはちよくちよく更新していきたいと思っています

5話 体型が良ければ良いってもんじゃない

「絵のモデルになってほしいだろ？」

黒神めだか

生徒会長

「はい！ 図々しいお願いとは思いますが、是非！黒神さんに引き受けていただきたく！」

「1年12組　夕原クンか、キミは美術部員なんだってね」

阿久根高貴　書記

「いえ！　僕は美術部員ではありません！

アーティスト
美術家です」

「（また面白い奴が現れたぞ）」

人吉善吉　庶務

『どうでもいいけど俺を逃がしてから話せ』

双神恭闇　捕虜？

あ、また捕まっている恭闇です。なんか慣れてきたな

今は場所が変わって「さあ、思う存分描くがよい」美術室でめだかの絵を描いている

『お前「エックセレント!!」被んな』

「素晴らしいめだかさん！あなたは女神だ！」

「おいおい阿久根書記、女神は言い過ぎであろう。せめて妖精と言ったところではないか？」

『自分で言うことではないな』

あらためて見ると賢いバカが2人になった

「つたく、なんで女神がボディアビルのボーシングするんだよ」

「いや人吉くん 阿久根さんの言う通りだよ。
たぜなら今回の僕のテーマは「女神の浜辺」！
つまり女神でなければ意味がない！」

『間違っても女神はボディアビルのボーシングはしないと思うがな』

「恭闇、そこはめだかちゃんだから仕方ない」

『そうだな』

この依頼の説明をすると

この夕原は美術の特待生でコンクールに出展するために絵画を仕上げなければならぬらしい。

しかし夕原も芸術家（と言う名の変人）、「これだ！というモチー
フに出会わねば筆が動かないらしい。

そんな訳でスランプに陥ってしまった。そこで白羽の矢が立ったのがめだかである。まあ本人も乗り気だしすぐ終わるだろと思ったが

「駄目だア！

描けない！僕にはめだかさんが描けない！！」

何枚目になるか分からないが夕原が絵を叩きつけて叫んだ

「ああ？何言ってんだいい絵じゃん」

『めんどくさいし、これでいいんじゃない？』

「いや人吉クン恭闇クン、俺には夕原クンの言っていることがよくわかる」

阿久根がここまで言うと言を見開き叫んだ

「この絵はめだかさんの

「美」を表現し切れていない！モチーフ以上のものを描かなければ
絵画とは言えんだ！」

阿久根が言い切ると満足したように微笑んだ

阿久根先輩の目にはめだかはどう写ってんだ？俺等がみるめだかよ
り3倍くらい綺麗に見えてそうだ

「その通りです。モチーフの通り描きたいのなら写真でも撮ればい
いんだ。僕たち芸術家は常を現実の上を行かなければならない。

つまり完成した「美」であるめだかさんには
芸術性がない！！」

「！！、フツ」

「めだかちゃんが落ち込んだーっ！！」

いつの間にか倒れた夕原がヨロヨロと立ち上がると普通に失礼な発
言をした。

そしてこれによりめだかは使用不可能になった

『おい勝手過ぎねえか夕原。自分なら頼んどいて芸術性がないって
なんだよ！！だが面白いから許す』

「許すなーーーー！！」

『しっかしどーすんすか阿久根先輩？』

「どーするも何もめだかさんがあんな感じじゃ俺達が代わりのモデルを探してくるしかないだろう」

『あ、俺パスで。

少し用があるんで』

後ろでギヤアギヤア言ってるが無視して出ていった

暫くして入ると壁に向かって落ち込んでるのが女が3人になった。しかもなぜか善吉と阿久根が裸（パンツは穿いています）になっていた

『おいおい、いつからここは変態の溜まり場になったんだ？』

「俺も知りたい」

『いや、お前も入ってるからな善吉』

恭闇の言葉に善吉が同意したが恭闇から見れば善吉も変態の中に入っている

「よし、ならば次は恭闇を描いてみるのだ」

いつの間にか復活していためだかがバカな発言をした

『いやいやいやいやいや、この絵のテーマは女神だから「そうですね、描いてみますか」てめーも何了承してんだ夕原!!』

「安心しろ恭闇。

これで夕原同級生は試しに絵を書くことができ、駄目でも私がその絵を貰う。・・・いいこと尽くしではないか」

『俺にとつては悪いことしかねえよ!!』

まて脱がすな――!!』

ガラ!!

「きょうやくーん!

一緒にご飯食べるんでしょー、早く行こうーよー!!」

恭闇の危機に入ってきたのは不知火だった

「こっこっこっこっこっ、

これだ――――――っ!!」

「?」

不知火を見た瞬間夕原が叫び一瞬でスクール水着に着替えさせた

「そのあどけなき横顔！

寸胴のようなボディ！

未成熟な四肢！

これまでのモデルとは比べるべくもない！

これこそが芸術だ！！」

グサグサグサツ！！

この夕原の言葉が凶器となり3人の女を刺した

『……なるほど。

夕原が描きたかった女神は「可能性」と言うわけだ』

「めだかさんや先輩方じゃ」

「無理なわけだ」

恭闇に続いて阿久根と善吉が言った。確かにあの3人は高校生らしい体をしているので不可能だ

『とりあえず依頼は完了したようだからこの死体めだかを持って生徒会室に戻るから後の死体（鍋島、諫早）を頼んだ』

そう言つとめだかを肩に抱えて生徒会室に向かった

「というわけで不知火はその後食券500円分と引き替えにモデルをつとめあげて夕原は無事にコンクールに出品できました……
つて、

ねえ、めだかちゃん聞こえてる？」

「……ふん、

今回は完全に不知火にもっていかれたな。生徒会執行部として不甲斐ないばかりだ」

机に完全に突つ伏しているめだかに善吉が報告していた

『いやいや夕原はそう思っていないようだぜ。見るよこれがお礼だつてよ』

そう言つと恭闇、めだか、善吉、阿久根、不知火、鍋島、有明が描いてある絵を出した。それはそれぞれがよく出している絵だった

「あれ、恭闇も受け取ったのか？」

そう言つと善吉は2つの絵を取り出した。1つは

『善吉……』

「何か捨てるのは勿体なくてな、書き上げてもらったんだ」

善吉が満足そうに見たそれは善吉と阿久根の裸を描いた絵だ。
パンツあり

いらねえ。きしよい

「もう1つは恭闇にだってよ」

『あん？……つぶ!!』

新たに善吉が出したのは恭闇の絵だった。しかも裸

『ふざけんな！

処分だ!!』

ひよい

恭闇は絵に手を伸ばすと椅子に突っ伏しているはずのめだかがいつの間にか近付き絵を取った

『何してんだてめえ』

「これは素晴らしい絵なので私が預かるっ」

『いやマジで渡せ!』

「……」

ドロン！！

恭闇の言葉には答えずにめだかは煙と共に消えた

『待ちやがれー！ー！！』

恭闇はめだかを追って部屋から出ていった。その後恭闇が絵を取り返せたかは誰も知らない

「部活動対抗水中運動会？」

『まためんどくさいの考えたな』

教室で不知火とお菓子を食べていると善吉が入ってきて話してきた

「おう、こないだ完成したバカでけえ屋内プールがあっただろ。

次の日曜にそこでイベント開催して優勝した部が増額予算総取りって段取りだ」

『どうせ予算に関する意見が多いからこれで一気に仕事を減らそうと言う魂胆だろ』

「うぐ・・・、相変わらず鋭いな」

そんなに忙しいなら誰か入れりゃーいいのにな。俺以外

「ま、陸上部の優位は消えるけど、でもプールじゃ今度は水系の部活が有利なんじゃない？」

「カツ！、その辺はちゃんと考えてあるよ。水中パン食い競争とか水中棒倒しとか、泳ぎとあんま関係ねー競技しかやらねーつもりだし」

『異議あり！水中だとパンがふやけて美味しくないであります』

「意見するなら競争について意見しろよ！」

『なら普通に早食いで』

「もうプール関係なくなっちゃったじゃねえか！」善吉は連続のツッコミで息も途絶え途絶えだ

「にしてもプールでね~~~~~~~~~？」

「はあはあ。なんだよ、なんか言いたい事でもあるのかよ不知火先生よお」

「言いたいことお？
ないよーないない
一個もなーい」

「あつそ」

不知火は明らかに何か言いたい事があるようだが勿体ぶっている。
善吉も不知火の性格を知っているので深く追求はしない

「たつだー！場所が水中じゃあ公平なんてありえないじゃないかしら？って言いたいだけだよーん」

『まあな。めだかが居るじてんで公平なんて言葉は無いようなものだからな』

「恭聞言うな」

善吉は少しどころかかなり思うところがあるようだ

「でもどうかな〜〜？」

何せ箱庭学園の競泳部には金にうるさい三匹のトビウオがいるからさ」

「競泳部？トビウオ？」

なんだそりゃ？どういうことだよ教えるよ！」

バシッ！

「教えてください・・・・・・だろ？」

「教えてください！」

「よかるうー！」

（（（（あの2人の仲の良さが気持ち悪い））））

善吉が肩を掴むとそれを強く払い何か分からないオーラを出しながら言った。

未だこの原理は分からん

「あ、恭闇には無償で教えてあげるよ」

「いやなんで恭闇だけ扱いが違うんだよ!!」

『やっぱ人望に差があるからじゃねえ』

「腹立つ！確かにその通りだと思うから腹立つ！」

やっぱ主人公ですから

「3人とも特待生でその実力は折り紙つきだけどにかく金の亡者！賞金つきのレースにしか出場しないとか？お金で雇われて他校の選手として泳いだりとか！八百長なんて当たり前で独自に賭けレースを運営してるなんて話もあったねえ

まあ用心しとけば？

あのお嬢様は無敵であつても決して無敗じゃあないんだからさ」

「まあ大丈夫だろ。めだかちゃんに恭闇もいるんだからな」

『は？いや俺生徒会じゃないしでねえよ』

「でもめだかちゃんが生徒会として出すって言ってだぜ？」

『何が楽しくて日曜日に学校に来なきゃいけないんだ。めだかに言
つとけ、死んでも行くかって』

どうやら恭闇は参加しない気まんまんのようだ。だがこの作品では
そうはいかないぜ

6話 水中運動会（前書き）

かなり遅くなったうえに途中で自分が何を書きたいか分からなくなってくるほどの駄文です

なんかあってもなくても変わらない気がする

6話 水中運動会

善吉目線

日曜日に当日、休みだと言うのに新しく出来たプールは人が溢れ返り騒がしかった。その中でさまざまな部活が並んでいた

「（これ以上なくシュールな画だ・・・）」

俺がこう思ってしまったのは仕方ないだろう

「陳情していた15の部活が全て参加か。

急なイベントだった割にはよく集まったものだ」

少し引き気味に思っていると阿久根先輩が話し掛けてきた。

確かによくこれだけ集まったと俺も思う。やっぱりこの部活も台所事情が厳しいようだな

「そうつすね、

陸上部に柔道部、美術部に剣道部までいるぞ。・・・・・・
・・・・・・ん？」

おっかしいな。何か剣道部の最後部に水着で目に包帯したヤツが見えるな。気のせいだな、いや気のせいだと思いたい『よう善吉』

気のせいではなかった

恭闇目線

『よう善吉』

ダルい、ダルすぎる。こんなところ来るんじゃないかな。そう思いつつ並んでいると善吉が見えたので一応挨拶した

「恭闇なんているんだ。しかも剣道部のところに？」

なにやら善吉が疲れたように言ってきた。何でこんなに疲れてんだ

『少し厄介な「おお、やはり来たか恭闇」出たよ』

恭闇が話そうとするのを遮ってめだかが現れた。しかも恭闇の背中に抱きついて

「お前なら来ると信じていたぞ」

めだかが笑みを浮かべながら言う。その顔は恭闇が自分のチームだと疑わない顔だ

『来たけどお前達のチームじゃねえよ』

恭闇がそう言うためだかは笑みを浮かべた顔で固まった

「・・・どう言うことが教えて欲しいものだな」

『言うから離れろ、首が絞まってる』

めだかは恭闇の首に回した腕に力を込めた。めだかの力で首を閉め
ても少し苦しい位で済むのは恭闇くらいだろう

『前に剣道場を半壊させてな、それを直したせいで剣道部の部費が
0になっちまったんだよ。めんどくせえが俺のせいだから参加して
んだ』

「めんどくせえって明らかに自業自得じゃないか」

恭闇の言った事に阿久根がツッコんだ

「訳は分かった。しかし恭闇と一緒にチームじゃなければ嫌だ」

恭闇の言いたい事は分かったようだがそれでめだかが納得するかは
別物だった

『嫌だって言うてもどうしようもないだろ』

「なら私が剣道部に私財を投じるから生徒会として参加しろ」

「なんと言っ自分勝手!？」

この発言には善吉もツッコまずにはいらなかった

「ちよっとめだかちゃん」

「む、なんだ善吉？」

「恭闇と同じチームじゃないほうがいいかもよ」

「なぜだ？」

私は生徒会執行と共に恭闇と一緒にのチームで頑張る、そのまま生徒会に入れるのを楽しみにしてたんだぞ」

「でも久しぶりに恭闇と戦えるんじゃないか」

「む、確かに」

善吉がめだかを呼んで密談をしている（ちなみに阿久根は虫が！！と大激怒中）と思っただけだめだかがさつきとは違う笑みできた

「今回は違うチームで戦おう、全力でな」

めだかの言ってる事で大体善吉が何を言ったか分かった気がした。しかし！、俺は乗らんぞ

『やだよめんどくさいし参加すれば剣道部の奴等も納得するだろ』
おっと、邪魔なんだよ目に包帯何か巻きやがって「・・・」

恭闇にぶつかってきた一人の生徒が恭闇に暴言を吐いて去っていった

「（やべー）」

『めだか・・・さつき言っただけの取り消すわ。全員ブツ殺す！！！！』

善吉のヤバそうな感じは的中した。善吉はあの生徒の無事を祈り、めだかはわくわくして、阿久根は恭闇の変わりようにビククリしていた

大会の説明

- ・代表者3人名の参加
- ・男子にはヘルパー装着
- ・点数が生徒会を上回ると予算が3倍

『いいかてめえら！優勝以外はクソだ眼中にねえ！
邪魔するヤツはぶつつぶす。そしてアイツはぜってえ殺す！！』

「「「「お、おおー」「」「」
（（（アイツって誰だ！？）））

第1種目の準備に恭闇が剣道部のところに戻って来ると怒声をあげ

た。剣道部にとっては何でキレてるか分からず怯えていた

『日向！第1種目は俺も出るからな！そしてアイツを消す！！』

「分かった・・・、ほどほどにな」

もう日向は恭闇を止める事は諦め出来るだけ回りに被害が出ないように祈ることしか出来なかった

プールの中に入ると丁度善吉と阿久根が居るいた

『よう善吉に阿久根先輩』

「おお恭・・・闇・・・だよな」

『ああ？俺以外に誰が居るんだよ』

「いやあまりの変わりように・・・」

そう恭闇は目の包帯を外しているのである。その顔はかなりの美形であり、包帯からは考えられなかった

『ただ包帯取っただけだろうが。』

でも何か回りから視線を感じるんだよなバレてるのか』

「いや、バレてはないだろう」

恭闇回りの女子は皆恭闇の顔を見ると顔を紅くして悶えている

『まあ今回は少し本気でいくからよ。もし大会中に怪我人が出ても（出すから）気にしないで進行してくれや』

「大会企画した人達の前で堂々と言っなよ！しかも心の声も聞こえたし！」

「生徒会として故意にやるのは認められないよ」

『俺だとバレなきゃ問題ないだろう？』

「それなら仕方ないな」

「いやそう言う問題じゃないから！阿久根先輩も仕方ないから！」

だんだんキャラ位置が決まってきた気がする。そんなやり取りをし
てると柔道部が現れた

「ククク！こんな塩素拾いみたいなゲームで邪魔っけな浮き具でけ
とつたらどーもならんやろ。」

まずもって沈むことがでけへん……」

鍋島は話の途中で止まってある一点を凝視している。その一点とは
恭闇の特に顔だ

『あん？なんすか？』

「恭闇クンやんね？」

『普通にそうですけど』

「うわー包帯もええけどそっちの方がめっちゃカッコええやん！！」

そう言いこっちに走ってくるが水の中なので速度が出ないので恭闇に額に手をやられ容易く止められた

「コントかなんかですか猫美さん、それにしても代表を女子で固めてくるのはアンタくらいのもんです」

「て言うか引退したんじゃないんですか」

「ウチは部長職こそ引退したけども反則王の称号まで捨てたわけやないんでな。・・・もうつれへんな、こんな美女が抱き着こうしとるんやから受けるや」

『普通自分で言うか』

「構わん、反則も卑怯も

それが貴様の志なら貫くがよい」

鍋島がいまだに抱き着こうと頑張っていると後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた

「無論私は私の志を貫くぞ。いい戦争をしよう鍋島3年生！」

めだかが登場しカッコいい事を言いながら手を出してるがそこは恭闇の背中の上だった

「あ、ずるいであたしかってそこ狙ってたのに」

「あえて言うなら早い者勝ちと言う事だ」

『降りてから話せ』

背中に乗っていると言うことは胸が当たっているが恭闇は全然気にした様子はない

「それにしても胸を当ててるんだから少しぐらい意識しても良いのではないか？私も胸には自信があるのだぞ」

『意識する？何が』

「めだかちゃん恭闇に期待するだけ無駄だと思うぜ」

「確かに、ならば今度からはアピールを強めよう」

『話はいいが始まるぞ』

「そのようだ。では恭闇いい戦いをしよう」

そう言うそれぞれの場所に歩き出した

第1種目 水中玉入れ

「では皆さん準備はよろしいでしょうか。位置についてよおおおい！
どん！！」

『日向！少し殺ることがあるから任せた』

「・・・ああ、早く終わらせてこい」

開始そうそう恭闇は一言言々と潜ってどっかに行ってしまった。その数秒後プールの一部で水しぶきと助けると言う声が聞こえたが会場の熱気にかき消された

『うーん、気分爽快』

「終わったかよ」

水中から恭闇が一仕事終わったかのような笑顔で出てきた。ヘルパーは？ってツツコミは無しにしていたきたい

『ああ、
で、どんな感じだ？』

「どんな感じも何もやりにくいつたらありやしない」

そりゃそのはずだ。お手玉は水を吸って重くなってるし、足が下につかない事で下半身が安定して投げられなければ、ヘルパーのせいで容易に潜る事も出来ない。男子には取ったら死のゲームだ

『でも攻略方が「生徒会執行部！一気に20ポイント獲得だーっ！ーっ！ーっ！」』

恭闇が攻略方と言うよりテクを教えようとするためだかがお手玉20個をまとめて投げて入れてしまった

「な、なんて滅茶苦茶な」

『いやあっちの方が入れやすいんだよ』

すると解説をしている不知火がめだかのやった事の有効性を説明すると回りの部が真似だした

『てな訳で俺達もさっさとやるぞ』

「おお！！ってどこからそんな持ってきた！！」

恭闇のいるプールぎわを見るとお手玉が積まされていた。その数およそ100個

回りでお手玉がねえーて叫んでるが知ったことが

『ああ、これはアイツをやってきた帰りの時についでに取ってきた。こんだけしかないが大丈夫だろう』

「十分だから！むしろ十分過ぎるから！」

『念のためだ。』

で、お前らは何個入れたんだ？』

「まだ4個だけど」

『なら後は任せろ』

そう言つとお手玉を16個持つと潜ってしまった次の瞬間

ザバーンっ！！

バンっ！！

「け、剣道部一気に16ポイントっ！！」

恭闇は潜った状態から飛び上がり2、3メートルある籠へダンプを決めた

周りどころか剣道部も固まっている。と、そこで

「終ー了ー！

それまででーすー！！」

終わりの笛が鳴った

「見事にバラバラになったな」

「うーん、俺は横並びになるか心配したんだがね」

「あゝ、確かに。不知火のせいであるか心配したがそうならなかったですしね」

『まあ俺のおかげだな』

善吉と阿久根が掲示板を見ていると恭闇が話しに入ってきた。どこから現れたんだ

「まあ否定はしないな。

でもよかったのか？目立ちたくないんだろ」

『どうせ分からないだろ』

確かに分からないだろな

「確かにな、しかも怪我人も出すし」

そうである。玉入れが終わった後気絶して浮いている男子が発見されて保健室に連れて行かれた

「まあ、何事もなかったかのように再開したがね」

阿久根の言う通りそんな事故（事件）？があつたが何事もないうちに再開した

「でも主催者がトップとは少し不味いかな」

「いや、不味い事はないぞ」

善吉が顎に手を当てて考えるように言う。と後ろでめだかが同じポーズで現れた

「どの道私達はトップではなかったのだ。あやつらを見よ

密やかに

しかし軽やかに

誰に気づかれることなく

しかし誰より速く

私達より先に

20ポイント獲得した者達だ」

そう言われてめだかの見た方向を見ると例のトビウオ三人衆がいた

『（ほく、三人ががりとは言えめだかより速いとはな）』

めだかが三人のところに歩き出した

「私の潜りはただの肺活量だが貴様達の潜りはそうではないな？
通常潜水前には肺一杯に空気を吸い込むところをあえて逆に肺から
全ての空気を吐き出したな。」

絶息による強制潜水！一歩間違えれば溺死確実の危険な行為だ。
貴様達は命がいらないのか」

そう言うときめだかは三人を睨んだ

「命？そんなどーでもいーもんいらねーよ。

俺達は命よりも金が欲しい！若き生徒会長様にゃーわかんねーだろ
ーけど俺達は一円に笑って一円に死ぬのさ！」

一円に笑って一円に死ぬか

くだらねえ

「さあ第2回戦！水中二人三脚です！！

この競技は各チーム代表者2名が足を紐で結んで50mプールでか
けっしていただきます。一位で15ポイント、以下14、13ポイ
ントと続いて最下位は0ポイントになります」

次の競技の放送が鳴っている中恭間がボンヤリと立っていた

『第1種目の時は少し張り切り過ぎたかな』

「いや、とてもカツコ良ったぞ恭闇」

恭闇がボソツと呟くといつの間にか隣にいためだかが言った

『何で隣に・・・いや、やっぱりツツコまんわ』

「なーんや二回戦は見学かいな」

恭闇がツツコむと言う意識をカットしてると何処からか猫美が現れた

「私ばかりが出張っては団体戦の意味があるまい。

貴様も同じ考えではないのか？鍋島3年生」

「ククク！まあ後輩にも出番やらんとね！。

でも恭闇は何で出てないんや？」

『めんど・・・、俺だけが出ても仕方ないでしょ。それに他のヤツが拒否したんだ』

「（今めんどくさって言おうとしたな）拒否って何でやねん」

『1位は取れるがペアのヤツはどうなっても知らんぞって言ったら全員全力で拒否したんだ。勝つためには尊い犠牲だと思えば安いもんだろうに』

「（そりゃあ全力で拒否するわな）」

二人三脚で水中とはいえ全力で走る恭闇とペアになったらどうなるか剣道部員は容易く想像できたので全力で拒否したのだ

「さすがは私の恭闇だ。

ところで鍋島３年生、貴様は天才は嫌いなのではないのか？

この大会で恭闇が私の同類だと分かったのに普通に話し掛けておるし」

「天才でも好き嫌いはあるでえ。勿論恭闇クンは好きな方や！」

そう言うともた恭闇に抱き着こうとしたがまたしても恭闇に止められた（どさくさにまぎれて抱き着こうとしたためだった）がこれも止めた）

「しっかしとんでもない連中が参加したもんやなー」

「・・・・・・何の話だ？」

「とぼけんなさんな、競泳部のトビウオ３人衆やん。まあ実際厄介やでーあちいつら、ゼニのためならホンマなんでもしよるからな」

『なんか知ってるような口振りですね』

「なんや嫉妬したんか？いやーモテる女は辛いで」

『あつちも何にも思っでないと思いますよ』

「そんなにハッキリ言わんでもええやん！」

不毛な争いだ

「ウチはリーダーの屋久島部長とは同じクラスやし？まあ屋久島クンは阿久根クンや黒神ちゃんや恭闇クンとは違っあっさり天才ゆう

男やな。

背泳ぎバタフライ平泳ぎ、短距離中距離メドレーからなんでもござれのオールラウンダーや。

その実力は尊敬するけど何を考えとるか分からんし何を考えとるかもわからへんねー」

猫美がそう言うした後で誰かが来る気配がした

「別にわかってもらおうと思っちゃいないよあたし達は」

振り替えるとトビウオ3人衆の1人、喜界島もがながいた

「でも何したいかは教えてあげるよ、あたし達はね
札幌のプールを作りたいんだ。

そこで1日中泳ぐのがあたし達3人の夢なのさ！」

その目は感情を移さないただ黒い目をしていた

『なあお前』

「何………」

喜界島は話し掛けた恭闇の方を見ると固まった

『?どうした』

「な、何でもないわよ」

そう言う喜界島の頬は少し紅み掛かっていた

『そうか。質問だ、金が何より大事か？』

「当たり前でしょ」

『んじゃ金と命どっちが大事だ』

「お金の方が大事に決まってるでしょ」

するとめだかが何か言おうとするが手で制した

『ふゝん、質問はそんだけだ』

「さあ位置についてよおおおおい・・・、
どんっ！！」

競技の始まりと同時に善吉と阿久根の生徒会ペアが一気にトップに
躍り出たがとても醜い絵だった

『（お互いにいがみ合って醜！！）』

ちなみに実況室にいる不知火は大爆笑している。
しかしお互いが身体能力が高くてとても速い

しかし競泳部が残り25mに差し掛かった時、屋久島と種子島の2人が足が結ばれてるにもかかわらず泳ぎだしそのまま全チームをこぼす抜きにしてゴールした

「悪い、7位しかとれなかったぜ」

『安心しろ。次で挽回するから』

第3回戦、ウナギつかみどり

1匹1ポイント

猫美は9ポイントだが競泳部の1年生エース喜界島はそれを上回る13匹も捕まえた。そして我らが恭闇君は

『いやちよっ！ウナギが
ウナギがー！ー！』

何故か恭闇のまわりはウナギで溢れかえっていた。しかも黙って捕まるので剣道部は52ポイントと言う高記録を叩き出した

生徒会はめだかが出場して結果は・・・・・・・・・・・・・・・・

言うまでもないだろう

「…………剣道部がぶっちぎったね」

「……………そうですね」

掲示板を見ると阿久根と善吉が言つとおり剣道部がぶっちぎっていた。剣道部はこれを見てお祭り騒ぎである

『すげーな剣道部』

「いや自分のところだろ！」

『ここまでならもう歴史に残していいんじゃないね。』

まあそれより3倍忘れんなよ』

そう言い残し恭間歩いていった。その後で競泳部と生徒会（実際はめだか）で一悶着あったようだが知らん

「部活対抗水中大会！最終種目は水中騎馬戦です！
ではルール説明を不知火さんお願いします」

「はいはい

まあそんな身構えなくても普通の騎馬戦だよ。

たっだし、今のままじゃ下位チームに救いがないので救済ルール！

集めたハチマキの数ではなく質でポイントを決定！上位チームのハチマキほどポイントを高く設定します」

「げえマジかよ。厳しくねえか」

「そうだな、

どうする恭闇？」

『知れたこと、

立ち塞がる敵は打ち砕くのみ！！』

どうやら恭闇はテンションが上がってるようだ。ただし言うておくが騎馬だから

そのころの競泳部

「どーします屋久島先輩？」

「そうだな・・・、現在俺達は48ポイント、生徒会が33ポイントつまり生徒会は俺達のハチマキを奪えば俺達は何も出来ないしトップになれなくても俺達を越して2位になる。」

これは下位にチャンスを与えた救済ルールではない、競泳部と生徒会をぶつけるための挑発ルールだ！！」

「そんな挑発に乗ることないですよ。一銭の得にもなりませんし6位のハチマキを取っても生徒会からは逃げられるんでしょ？」

「ああそうだな

そうしておくか。

それで俺達は3倍だ」

競泳部が話しているとめだかが挑発した

「なんだ貴様達？ここに及んで逃げるつもりか？

そう言わずにかかってくるがよい！

さすれば私が金より大切なものがあることを教えてやるぞ！！」

「！！」

「（うわ、やめてくれや、

「金より大切なものがある」は喜界島には禁句だよ若き生徒会長さん）」

種子島がそう思っていると喜界島が今の感情を表すようにふるふる震えていた

「ごめんなさい2人共さっきの発言は取り消します。
ムカついた！」

だからあの女を売り飛ばそう！」

喜界島が凄い形相で言う。心なしか競泳部の2人も怯えている

「それではラストバトル！位置についてよーい……………どんっ
！！」

始まりと同時に競泳部と生徒会がぶつかりあった

そのころ剣道部は

「…………あからさまにひどくね」

「…………確かに」

競泳部と生徒会以外に囲まれていた

『13対1・・・か』

「「「「「剣道部覚悟――――っ！！」」」」」

そう言うと部活突っ込んできた。それを恭闇は

『邪魔』

水中で足を振るった。ただそれだけで津波が起こって他の部を飲み込んでいった

「おーこれはなんだ！！いきなり起こった津波で剣道部と競泳部と生徒会以外の部活が消えてしまった――っ！！」

「あひゃひゃひゃひゃっ！！さっすが」

ちよーどそのころあっちの戦いも終わったようだ

最終的には生徒会は競泳部のハチマキを取り2位になった

こうして第1回水中運動会は剣道部の優勝で幕を閉じた。後日から剣道部に謎の美少年が居るとして女子が剣道場に来まることになる

後日

「そんなわけで先日のイベントは成功に終わった。
しかし私が学校行事において私財を投じたことについて批判が多か
ったのも事実である」

『さすがに先生から叱られたしな』

普通に話してるけどまたしても捕まってぐるぐる巻きだ

「その通りだ。確かに公私混合はよくない！

よって今後そんなことのないよう生徒会にお金の専門家を雇い入れ
ることにした

紹介しよう」

そう言うと言って来たのは

「これから会計職を任せる喜界島同級生だ！

競泳部からのレンタルなので大切に扱うように」

「荒稼ぎに来ました。無駄遣いしたら売り飛ばしますからそのつも
りで！」

これには善吉や阿久根もビックリだ

「ちなみにレンタル料は1日320円だ！」

『「「驚きのお値段っ！」「」』

7話 我慢強くても我慢しきれない時もある（前書き）

なぜか書けない、ああ神よ私に降りまたえ

まあ今のは馬鹿な発言はスルーしてください

今回は最後あたりにあの人を出してみた

7話 我慢強くても我慢しきれない時もある

あらずじ

目安箱に投稿されていた案件により水中運動会を開催した生徒会にだったが、競泳部のトビウオ三人衆と剣道部に大苦戦。最後は競泳部を打ち破り2位になった。え、2位？ ああ、1位はぶっちぎりで剣道部だったよ。まあそれについては剣道部には恭賀がいたのでしかたないと俺は思います。

あれ？ 作文！！

『おいおいなに言ってるんだ善吉？とうとうボケたか』

「ボケたかって、前回は知らない人がいたら駄目だろうが」

『だつたらまかせろ』

箱庭学園、そこは普通の人から異常と呼ばれる人まで通う学校だ。そこで圧倒的な支持率で生徒会長になった黒神めだ「待って、あ

らすじってどこまで遡るつもりだよ！！」読者には親切であった

「はあく、ならその親切を少しでも俺にしてくれ」

善吉に対するそんな感情は1ミクロンもないのであった

「1ミクロン！！って言うかもうあらずじ口調いいから！」

そんな会話をしながら恭闇と善吉が生徒会室に近付いていくといきなり恭闇が止まった

「どうした？」

『なんか嫌な予感がするから先に行ってくれ』

「嫌な予感つてめだかちゃんと阿久根先輩は以来でいないから誰もいねえだろ」

善吉がそんな事を言いながらドアを開けると

「・・・・・・・・」

「あ」

着替え中の喜界島めがなが居た。後の事は想像にお任せします、ただ言うことは人を殴るような鈍い音が絶えず聞こえていた

「お金っ！お金払って！」

「は？なに言ってるんだお前？」

騒動が終わるとポロポロの善吉と顔を紅くしたもがなとこれからの展開にわくわくしている恭闇がいた

「あたしのハダカ見たでしょ、だからお金払って！」

「こんだけ人をボコボコにしといて金払えってか、いい性格してんな。」

カツ！やなこった！こんなトコで鍵も掛けずに着替えてる方が悪いんだよ。

見たくもねーもん見せられて迷惑してんのはこっちだぜ・・・」

善吉はそう言いもがなの方を見るとポロポロと涙を流していたもがながいた

『今なら名誉棄損で訴えられるぜ。さあ行こうか』

「待て待て待て待て！ちょー1回待てって！」

『なら訴えられるか俺に殴られるかどちらか選べー！ーい！ー！』

「いやいやいやおかしい！何かがおかしい！」

『いいかい善吉君。君はハダカを見た責任を取らなきゃいけない、しかもあの発言。』

もうこれしか方法がないんだ』

「その心は？」

『なんか面白い展開だったから参加したくなった』

「ちきしょおおおおつ!!」

瞬間殴られた善吉は叫びながら窓から外へ消えていった

目の保養料	450円	慰謝料	300円	恭闇へ献金
?	1000円	合計	1750円	

「わーいつ！ありがと！」

「・・・・・・・・」

殴られたが結局金を取られた（何故か恭闇にも）善吉。しかしライフは0なので言葉を返す事も出来ない

ここで改めて紹介

生徒会執行部会計担当

喜界島もがな

1年11組の特待生

競泳部のエースで実は種子島よりも泳力は高いらしい

生徒会は彼女の金銭感覚を求めて競泳部の活動を優先していいといい条件でめだかからの誘いに応じた

「さっ！

じゃー仕事しよーかな。パソコンどこ？」

「そんな物体はここにはない！
はいソロバン」

「はいつ！？
ソロバン！？」

そう言つて善吉はソロバンを出した。むしろ今の時代でソロバンあるほうがスゲーよ

「めだかちゃんがいればパソコンとかいらねーのよ。あいつ暗算で関数計算とか出来るし」

「インテル入ってる！？」

『そして俺は暗算で「言うな恐ろしい！」』

恭間めだかより異常なのでこれ以上は言わせないと善吉が遮った。
ちなみに何故か善吉は無傷で居る。不思議だ

「・・・まあいいか。ないものを買うのは勿体ないしこれはこれで便利だしね」

そう言つと仕事を始めたもがな。それを尻目に向かえで漫画を読み始める善吉、生徒会室は静かになり心なしか変な緊張感が出てきた

『（なにこれこの緊張感。何で俺がこんな緊張しなきゃいけないんだ）』

恭闇がそう思っているといきなり善吉が立ち上がり生徒会室から出て行こうとしたのを掴まれ阻止された

『（待てや、どこに行くつもりだよ）』

「（いやいやこれ以上ここに居るのは無理だつて。脱出させてくれ）」

『（ふざけんな！この空気の中で俺を残して出ていこうとすんな。頼む3000円あげるから！）』

「（誰が3000円で動くかよ！つーかお前俺の財布から10000円取ったよな）」

『「分かった分かった、10000円あげるからここは任せた」』

「（10000円あげるからつてそれでプライゼロだろうが！！）」

「人吉！」

恭闇と善吉がそんな不毛な争いをしているといきなりもがなが善吉の名を呼びながら立ち上がった

「きょーは！いーてんき！だね！」

「・・・雨降ってるぜ」

善吉の鋭いツツコミに生徒会室は再び静かになった。そこで恭闇は善吉にボディーパーを喰らわした

「ぐほっ！？」

「何しやがる！！」

『（馬鹿かお前は！

向こうが話し掛けてきたのに一言でバツサリいきやがって！
雨の日も良いよな位言えねーのか）』

「（そんな達者なら恭闇が話せばいいだろ！！）」

『（・・・）』

「（無理なんじゃねーかよ！！）」

こうして不毛な争いは続く

『（だいたい生徒会ではお前が先輩だからお前から歩みよれよ）』

「（仕方ねえか、

ま、テキトーに持ち上げとくかな）なあ喜界島。
お前、いい体してるよな」

善吉が顎に手を当ててセクハラ発言してもがなにソロバンを投げられ顔面に直撃した。これにより生徒会室の空気がさらに悪くなった

『（善吉、お前もう女子と会話しない方がいいと思うぞ）』

「（分かってる、分かってるからそんな冷めた目で見ないでくれ！
！誰かこの空気を変えてくれー！！）」

ガラ

「人吉くゝん なーんか呼ばれた気がしたんだけどおいしいものでも食べさせてくれるの？」

『「」（誰よりも空気を読めない奴が来ちゃった！！）」』

「ん？おや？おやおや？

これはこれは喜界島選手じゃありませんか！そーいや生徒会入ったんだっけ？

あたし不知火よろしくねー」

いきなり入ってきた不知火はもがなに挨拶している。一方もがなは何故不知火ここにいるのか疑問そうな顔をしている

「そーそー！喜界島選手に会ったら渡そうと思ってたものがあつたんだー！」

すると明らかに隠しきれない自分ほどの大きさのパネルを出した。それにはもがなとめだかがキスしてるところが写っていた

「あなたとお嬢様との記念写真！
よく撮れてるでしょ？」

「……………」

それを見たもがなは声にならない叫びをあげた。なぜか眼鏡が割れたように見えた。

そしてパネルを取ろうと手を伸ばすが不知火はそれを器用に避けていく

「あ やっぱ欲しい？学校新聞用にとった写真なんだけど、あひゃ

欲しいんだったらあげるよー

色んな角度から300枚くらい撮ってあるんだけど、どれが欲しい……………」

「……………」

そう言うとき不知火は自分の制服を捲りまたしても隠しきれない程の写真が現れた。これにはもがながさらに声にならない叫びをあげた

ぽんっ

『あんまり苛めんなよ。うまいもんは今度腹一杯食わせてやるから』

これに見かねた恭闇が助け船を出した

「はあーいごつめんなさーい
じゃまた明日ねー恭闇、人吉。ばいばーい」

嵐のように現れて嵐のように去っていった不知火。ある意味めだかより自由気ままなのかもしれない

『なんか悪いな。ツレが迷惑掛けた』

「うつうつんっ

助かったよ」

「でもよかったのか、不知火に腹一杯食わせてやるって約束して？
あいつのブラックホール知らねえ訳じゃねえだろ？」

『お前と一緒に食うから大丈夫だ』

「ふざけんな！道連れにしようたってそうはいかねえぞ！」

『なに言ってるんだお前と俺は一心同体だろ。俺が心臓でお前がジャ
ージだ』

「お前それ一生完成しねーよー！」

「……ねえ、ところであなたは？」

恭闇が善吉を道連れに、いやむしろ善吉に払わせようと話している
ともがなが恭闇について聞いてきた

『？

あゝ、そいえば自己紹介してなかったですね。始めまして双神恭闇です。ちなみに1組です」

「今さら猫かぶたって無理だろつぐふほっ!!」

『猫かぶりじゃなくて礼儀だ』

善吉の失礼な物言いにまたボディーブローを食らわした恭闇

「あ、あたしは、喜界島も、もがな。よ、よろしく」

『いやそんな緊張しなくても』

なぜか緊張しているもがなはどもりながら自己紹介する

「でもどっかで見たことあるような」

『いや気のせいだろ「前の水中運動会で会っただろ」善吉死ぬか』

「もしかしてあの時の」

隠そうとした恭闇だったが善吉がまさかのカミングアウト。恭闇は本気で殺意を覚えた

「でも1組って、あれであり得ないでしょ」

『ああ、俺はあまり表だって自分の異常を出したくないですから。だから秘密にしてくれませんか喜界島さん』

「う、うん」

いいよ。

あの、できれば敬語なしでな、名前で呼んでほしいな」

もがなが敬語なしで名前で呼んで欲しいと恥ずかしいそうに顔を紅くしていった

『いいのか？』

じゃ、改めてよろしくな
もがな』

「／／／／／／」

恭闇が改めてもがなの名前を呼ぶと顔を紅くしてうつむいた。そして落ち着いたのか疑問を聞いてきた

「でも何でここにいるの？剣道部なんじゃ？」

「いやこいつ生徒会だぜ」

『は？俺も初耳だ』

「前にめだかちゃんが先生に届け出を出してたぜ」

『あのヤロー何してんだー！！』

生徒会室に恭闇の叫びが響いた。丁度その頃どこかで1人の異常者がクシャミした

「あの、いちおう聞いたときだったんだけど、会長って誰とでもキスするの？」

「あー、誰でもって訳じゃねーよ。昔は結構激しかったけどな」

善吉は昔を思いだしながら言う。隣で恭闇もうんうんと頷いている

「ぶつちやけ俺らの同期の初キッスは大体めだかちゃんだし、たださすがに見境なしってのは小学校に入る時に俺が止めさせたんだ」

「えっ!？」

「じゃあ恭闇も」

『んにゃ、俺の初キッスは守っている』

恭闇がそう答えるともがなは何処かホッとしたように息を吐いた

「……ねえ、どうして会長はそこまで人間が好きなの？」

他人のために生まれてきたとかあたしには全然わかんないよ。

あたしのことなんか好きになってくれてもなんにもお返しできないもん」

話を聞くと善吉は息をフウと吐いて語りだした

「お前さあ、屋久島先輩や種子島先輩にも同じこと言えんのか？」

お返し出来ねーだのなんだのそんなセコいこと考えてあの人達と付き合ってたのか？」

「屋久島さんと種子島さんは違うよ。あの2人は家族みたいなもんだもん。好きで当たり前だもん」

「だろ？」

だったらめだかちゃんと同じじゃねーか。

めだかちゃんは全人類を自分の家族だと思ってんだ。お前のこと好きでしょーがなくて当たり前なんだよ」

「!」

善吉が言うつとビックリしたような顔になった。そしてなにかを考えるような顔になった

『あ、また嫌な予感がしてきた。後任せるわ』

「いや任せるってどこに行くつもりだよ」

『昼寝の時間だ』

「今放課後だから!」

『本人が昼だと思ってれば昼になる』

そう言うつと恭闇は意味不明な言い訳をして生徒会室を出ていた。後ろからは暴れるような物音と善吉の助けを求める声が聞こえたが、あえて無視して屋上に向かった

『お、ガムだ』

生徒会室から出た恭闇はポケットに入っていたガムを頬張りながら屋上を目指していた

『やっぱ昼寝っていったら屋上だよなー、うん。
あゝ、でももし屋上使えなかったらどうしょ。
まあ、そうなったらあらゆる障害を排除するか』

恭闇が物騒な事をいいながら廊下を歩いていると曲がり角から1人の生徒が出てきてぶつかりそうになった

『おっと、すいません』

恭闇は一言謝りまた歩き出すと頭に物凄い衝撃が走って思わず歩みを止めた

「ケケケ！、テメーなにカム食いながら歩いてやがるんだ。校則違反だろ」

恭闇が振り替えるとそこにはまだ小学生くらいの身長で銀色の髪に腕に風紀という腕章を付けた者がいた。その名は風紀委員長、2年13組所属 雲仙冥利

『すいません、ちゃんと捨てますから』

「今さらなに言ってやがるんだ。テメーはルールを破った、ならそれ相応の罰を受けなきゃならねえだろーが！」

そう喋り手を振ると今度は何かがアゴにあたり恭闇の顔が上がった

『・・・・』

「ケケケ！こりゃあ頑丈なヤツだおもしれえな。これ耐えたらベダ褒めしてやんよ！！」

心底愉快そうに笑うと次は顔、右腕、胸、腹、に衝撃が走った。だがしかし恭闇はうつ向いたまま黙っていた

「・・・・・テメーなに者だ？これを耐えるヤツはノーマルどころかスペシャルにもいやしねえ。かと言って13組でもテメーを見たことねえ。もういつペン聞いてやるよ、テメーなに者だ？」

『・・・・』

ここまでできておかしい事に気付いたのか雲仙が聞いてくるがこれにも恭闇はうつ向い黙ったままだ

「ケツ！！答える気無しかよ。まあテメーが誰だろうが関係ねえ、ルールを破ったテメーには罰を与える、そんだけだ！」

雲仙は両手を振るとさつきとは比べ物にならない数の何かが壁にぶつかり恭闇に迫ってくるが当たる瞬間にはそれらが全て恭闇の手の中に収まっていた。それはスーパーボールだった

「っ！！なんだテメー、なにしやがった！！」

これはあり得なかった。何十個のスーパーボールを体の各箇所へ当

たる時間もずらして投げたのを避けたり防御ではなく全て掴み取ったのだ。雲仙にとって入学して1年、さまざま異常者と戦ったがこんな防がれ方をしたのは初めてだ。

そして顔に当たったときにずれた包帯の隙間から見えた目と目があった瞬間無意識の内に雲仙は後ろに跳び引いた

「（な！？なんだ今は！？別に睨まれた訳でも凄まれた訳でもねえ、ただ目があっただけで本能的に跳び引いただ！？）」

「……俺は普通に過ごすために力を隠していた、だから大抵の事は我慢できるし耐えられる……、だがこっだけやられたら我慢とか言えるほど出来た人間でもねえんだよ！！」

そう言いスーパーボールを持っていた手を振ると雲仙の体の一点に衝撃が走り後ろに飛ばされた

「（バカな！！俺は1年以上このネタでやってきたんだぜ、それをすぐに真似てなおかつオレより正確で速く当たる衝撃も上だと！！）」

「

そうだ恭闇が投げたスーパーボールは回りの壁の別々のところに当たったが最終的には雲仙の腹一点に全てが当たったのだ。

しかし雲仙の着ている制服は「白虎」と言ってダンプにはねられてもへっちゃらだと言う潜水艦とかで使われている素材でできているのでダメージはほとんどない

「（ケツ！！これを着てなかったら終わりだったな。っ！？」

どこにいきやがった！）」

雲仙が衝撃で一瞬目をつぶり開けたら恭闇はどこにいなかった。しかし居場所はすぐに分かった

『その制服は何か特殊な素材で頑丈なようだな。ならある程度は力を入れて大丈夫だよな!』

一瞬で雲仙の後ろに回った恭闇が雲仙を殴ると壁を突き破り飛んで行った。恭闇をそれを見ると急いでその場を離れた

一方雲仙は

「ケケケ、こちららゴムの固まりと変わらねえ衝撃吸収素材着てんのに何メートル吹っ飛ばしてんだアイツ」

吹っ飛ばされた雲仙は地面をバウンドしながら何十メートルと飛ばされてやっと止まったところだ

「それに「白虎」がまさか一撃でおちやかになつてらあ、たくアイツのパンチはキャノン砲でもかよ」

そう言いケータイを取り出しどこかに電話をしだした

「（しっかし、黒神みたいな化物だけじゃなくあんな化物もいたとはな、だが顔は覚えた。このままじゃ終わらねえぜ、ケケケ）」

いつのまにか対戦フラグを立てた恭闇だった

7話 我慢強くても我慢しきれない時もある（後書き）

ちよつとだけにするつもりがやりすぎた感がある

8話 しかたない自業自得だよ（前書き）

言い訳しかありませんがとりあえずすいませんでした

新しい生活に慣れるので精一杯でした

少し設定いじりました

8話　しかたない自業自得だよ

箱庭学園風紀委員会

学園治安の維持を至上目的とする遊撃部隊。

理事会・職員室を始めとするあらゆる権力から解放された独立特務機関である。人呼んで

学園警察！！

そしてここにも風紀委員として活動する生徒がいた

「校——則！

違反です！！」

学園の前では風紀委員が検問をはり取り締まっていた

「あなたがたの外装には正しい部分がひとつもありません！
服装の乱れは心の乱れ！

よってあなたがたの心は乱れきっております！！
風紀委員会所属のこの鬼瀬針音の目が黒いうちは！

あなたがたのような風体の生徒は一步たりとも校門を通らせませんよ!！」

鬼瀬の言葉に止められてる生徒からは

「だって・・・」や「んなこと言われても・・・」や「あれだしな・・・」と言った言葉が聞こえてくるだけだった

「なんですかその態度は!」口答えは許しませんよ!！」

「いや風紀委員さんそりゃあんたの言う通りかもしんねーけどよ、だったらあいつらはどうなるんだ?」

「あいつらあ?」

そう言い鬼瀬は指摘された方を見ると校則違反上等の服装で歩いている生徒会一行がいた。これには口から魂が出るほど驚いたのか停止してしまった

「どうする?」

「行っちゃまっていーんじゃね?」

「だな」

そう言うのと停止している鬼瀬を無視してゾロゾロと学園に歩みだした。

(鬼瀬は一時間くらいで再起動したようだ)

「一体！何を考えているのですか生徒会は！！」

それから再起動した鬼瀬はすぐに生徒会室に怒鳴りこみに来ていた
「生徒の範たるべき生徒会役員が一体どんな魂胆があつて率先して
風紀を乱しやがるのです！？」

鬼瀬の怒鳴りに善吉と阿久根はやべーという感じで、めだかはどこ
吹く風でもがなは我関せず、恭闇はうるせーこいつみたいな感じだ
ある

「人吉善吉くん！どうして制服の下にジャージを着ているのですか
！まさかオシヤレのつもりじゃないですよね！？」

善吉は目を泳がせて

「いや・・・、そろそろ時代が俺に追いついてきたかと・・・」
と言っている

『いや時代うんぬんより、お前のセンス時代から外れてるから』

「うるせー、黙つてろ」

恭闇の言葉に善吉が怒鳴ると恭闇が『んだとコラ！』と言い善吉を
ボコボコにしだした。この間も善吉は「ごめんなさいごめんなさい

「ごめんなさい」と必死に謝っていた

「阿久根高貴さん！たとえあなたがエルヴィス・プレスリーの熱烈なファンだったとしてもその大胆さはありえません！！」

簡単に言つと胸元を露出させている服装

これにはさすがに返す言葉のない阿久根

「そしてそのソロバン弾いてる人！もとい喜界島もがなさん！あなたは何を「あたしには関係ない」みたいに構えてやがるのですか！？」

「だってあたしには関係ないもん。制服改造なんてしてないしスカートだってフツートの長さだよ？」

もがなの言う通り見た目は何にも問題ないのだが

「は！あ~~~~~ん？そんなこと言っても私の目は誤魔化されませんよ！」

そう言いながら両手に持った手錠を胸の前ではぶつけると光が発生し次にはもがなの制服がはだけて着ていた水着が見えた

「ほおーら！あなたが中に水着を着込んでいることくらい私の風紀眼にはお見通しなんです！！」

（（何でわかるの！？）

風紀眼？そしてなんで着てるの！？）（

このやり取りで阿久根と善吉がこのような疑問を思ったのは仕方ない（てか善吉いつ復活したの）

『風紀眼！！まさかあの伝説の！！』

（（そしてなんで知ってるの！？））

そしてしばらくたつと善吉は普通の生徒会の服装に戻り、もがなは水着を脱いだ。しかし力が出ないらしくぶるぶる震えている

「すみません鬼瀬さん、水着だけになるといのはダメですか？」

「ダメに決まってるでしょう！？」

「肅清は終わったか？」

こんな事をやってると見計らったようにめだかが話し掛けてきた

「まあその辺で許してやってくれ鬼瀬同級生、皆決して悪気があったわけではないのだ」

「あ、いえ、生徒会長！」

こちらこそ職務中にお邪魔いたしました！
それではこれで失礼させていただきます！」

「うむ！委員長によろしくな！」

そう言うのと鬼瀬はすたすたと歩いて行ったがすぐに戻ってきた

「ってそんなわけないでしょーっ！」

そっついめだかの机を殴り粉碎させた

「一番問題なのはあなたです生徒会長！その恥ずかしい制服以上の悪気がこの世のどこにありますか！」

「恥ずかしい？」

ふむ、また随分と的外れなことを言われてしまったものだ」

そう言い飲んでいた紅茶を置いた

「この黒神めだか。

己が肉体に恥じる箇所などひとつもない」

((((.....面白いくらい会話が噛み合わない))))

めがかがいつものように凜と言うが全然話がかみ合ってなかった

「肉体は恥じなくとも服装は恥じてください！

そんな胸元を露出させてはしたない！」

「これは胸元を露出しておるのではない胸元以外を隠しているのだ」

「基本全裸なんですか！？はあはあ、もう」

『まあまあ落ち着いて下さいよ。アメでも食べますか？』

「あ、いいんですか？でわお言葉に甘えて・・・ってなんでアメなんてあるんですか！？」

恭闇がどこからか出したアメを受け取った鬼瀬だったがよくよく考えとおかしいことにツツコミを入れ恭闇のほうを見ると腕一杯にお菓子や菓子パンを持っていた

「双神恭闇くん！どうしてお菓子やら菓子パンやらを食べてるんですか！校則違反ですよ！？」

「いや小腹が空いたものでつい」

「つい・・・じゃありませんよ！」

『ちよつと考えてくださいよ。確かに学校でお菓子や菓子パンを昼以外食べていたらそれは校則違反になるかもしれない。』

だか！、俺が腹が減ったから物を食べるのを誰か止めていいんですか？

いや、いいわけがない！

なんぴとたりとも俺の食事の邪魔をさせない！！邪魔するヤツはすべて排除する！！』

そう豪語する恭闇にはこころなしか覇気がみなぎっていた

「なんかカツコいい事言ってるけどただのワガママだからな」

「それは言わない方がいいんじゃないか人吉くん」

恭闇の言葉に善吉がボソツとツツコむが阿久根が止めた

「うむ、風紀員の前ではそこまで言うとは流石は恭闇だ。まあ、今回はこの言葉にめんじて帰ってくれ」

（（こっちもこっちでなんかおかしい！？））

「うつ・・・今回はこれで帰ります・・・、とはなりませんよ！！」

だいたい一番の問題はあなたです！！その服装を真似する生徒が現れたらどうするんですか！？」

「真似？させればよいではないか。むしろ私は任期中には女子の制服をこれで統一しようと考えておるぞ」

「とんでもねえこと企んでやがります！？」

「うーん、さすがのめだかちゃんもちよっと押されてますね」

「フツ、虫だな人吉くん」

これはいつものパターンじゃないか。ここからめだかさんの名ゼリフが出てくるんだって！鬼瀬さんはもとより俺達でさえ唸らされてしまう名言がな」

『（これはダメなパターンだと俺は思うがな）』

「とにかく着替えてください黒神さん！それとも着替えたくない合

理的な理由でもあるんですか!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

とにかく嫌だ!」

このキツパリ言っただけの言葉に鬼瀬は絶句、後ろの3人は壁に手をつけていた。(恭闇は爆笑)

それから破壊音が響いた

しばらくして鬼瀬が「委員長に報告しますからね」と言っただけで帰っていった後、ぼろぼろになった部屋を片付けていた

「めだかさん、さすがに不味いんじゃないですか？」

風紀委員会と対立してもいいことなんてありませんよ。中でもあの鬼瀬さんはヤバイと言いますから」

『ヤバイ? ああ確かにちゃんとメリケンっていう道具があるのに何でわざわざ手錠をメリケン代わりに使ってるの? 頭がヤバイからとか考えたけど』

「いや確かにそうだけでも失礼すぎるから! それにヤバイじゃないから!」

手錠メリケンの鬼瀬！

委員長自らスカウトしたという本年度風紀委員会の肝入りですよ。風紀のためには暴力も辞さない強引なスタイルで彼女が取り締まりを行うようになって以来校則違反者は激減したと言いますからね」

「……暴力というのは感心しないが彼女の意見はまあ正論だ。反論する気にならんよ」

めだかが話始めると皆自然とめだかの方を見た

「ただし私は自分が間違っているとも思わない。人がルールを守るべきなのではない、ルールが人を守るべきなのだ」

『良いこと言ってると思うが俺の背中から降りてから話せ』

しばらくして片付けが終わると善吉は鬼瀬を追っていった。恭闇はめだかにくっつかれていた（なぜかもがなから殺気を感じた）が鬼瀬から呼び出しがあり旧プールに向かった

「例の屋内プールが完成して以来こちらの古いプールは放置状態だったがゆえにすっかり雨水がたまってしまっておるな。

しかしさっきの今で私をこんなところに呼び出したのはどういうつもりだ鬼瀬同級生？」

『そしてお前は俺を縄でぐるぐる巻きにして連れてきたのはどういうわけだ？』

「言っておくがこの制服を正す気はまったくないぞ」

「え・・・あ、うん」

『無視か、まさかの』

めだかが先に釘をさすと鬼瀬はドキツとしていた

「えー実はですね、目安箱の投書が《何かの手違い》で《ついさっき》風紀委員会に届きましてそれを《うっかり》読んでしまったところ

《匿名希望》の方が《とても大切なもの》を《何故か》このプールに落としてしまったそうで《それ》を探してほしいらしいです。

《できる限り早く》見つけないと《水に解けちゃったり》するかもしれないので《学園を愛する仲間》として！この《一刻を争う状態》を何を置いても黒神さんにお伝えしなければと《義侠心》にかられたのです！！」

『（明らかにおかしいだろ情報がアイマイで細部がテキトーだし）』

恭闇の予想通りこれは鬼瀬が仕掛けた事だったのだ。まず偽りの投書でめだかを旧プールに呼び出して作業させるために水着に着替えさせてその間に鬼瀬が通常デザインの制服と取り替えるという作戦だ

「さあ！私にできることはここまでです！どうなさいますか黒神さん！」

「ふむ、よくわからんが

まあ、よく分かった」

そう言い扇子を閉じ鬼瀬の思惑どうり着替えに

「それでは早速目安箱への投書に基づき生徒会を執行する」

行かなく制服のまま汚れた水の張ったプールに飛び込んだ……
……恭闇を掴んで

これには鬼瀬はビックリし口が全開まで開けられ、恭闇は『なんで
！！』みたいな顔を浮かべながら着水した

「な……何をやってるんですか黒神さん！」

『ふごー！がほ！ちよっ！
がほ！』

「？、勿論探し物だが」

めだかに対して必死になって言う鬼瀬だっためだかは不思議そうに
鬼瀬を見た。そして恭闇は縄でぐるぐる巻きなのでもがいている

「じゃなくて服！

そんな汚い水に浸かったら服がダメになっちゃうじゃないですか」

「それがどうした？この一刻を争う状況で訳のわからん事を言うで
ない。

乱れようが汚れようが
たかが服だろ」

さも当然と言うめだかに鬼瀬は思わず呆然としてしまった

「おっとそう言えば落とし物が何なのか聞いてなかったな。鬼瀬同
級生、大切なものとは何なのだ？」

そう聞かれ、ハツとなった鬼瀬は下を向き歯をくいしばるとプールに飛び込んだ

「…………私の良心。

おかげさまでもう見つかりました」

「…………そうか。

水に溶ける前に見つかってよかったな」

こうして今回の騒動は終結した。ちなみに恭闇は自力で脱出した

『死ぬわーっ！?』

「えええええっ!? 黒神さん、スピアの制服
7着も持つてるんですかあ!？」

「なんだ貴様はスピアを持っておらんかったのか?
では明日からどうするつもりだったのだ」

『そしてテメーも俺のこの有り様をどうするつもりなんだ』

「なんだ恭闇、まさかこのプールの中を私1人で探させるつもりだ

つたのか」

『ならせめて縄とけや！

たく、包帯もドロドロだしよ』

そう言い目の包帯を取ると何故か鬼瀬が紅くなった

『ん？どうしたんですか』

「な、なんでもありませんよ／＼／＼／＼／＼（なんで包帯取っただけでこんなに変わるんですか！！）」

「さすがは恭闇だ。ドロドロになっても色っぽいぞ」

『お互い汚れてんだからくつつくな』

めだかは制服のスペアを7着も持つてると言う驚愕の事実が判明したが鬼瀬はスペアを1着も持っていないのだ

「まあ安心しろ鬼瀬同級生

私は困っている者を決して見捨てたりしないぞ。

それに恭闇の事もすでにてを打っておる」

『「……………はい？」』

「ねえ、人間どんな罰を受ければああなるの？」

『ん~~~~、とりあえず1週間抱き着くなと言えばああなる』

「あひゃひゃひゃふゃ

それは厳しいね」

そんな訳で今日も始まる

「うわあ~~~~ん!!」

恭~~~~闇~~~~!!

ゆ~~~~る~~~~し~~~~て~~~~!!」

「やっぱり不愉快!

黒神めだかは私が潰します!!」

9話 嵐の前 「相容れねえ」

「きよっやー ひつとよしー」

帰り何食べてく？あたし的にはお好み焼きがナイス」

『善吉のおごりなら』

「おごらねえよ。それより前から不思議だったんだけどよ、お前の胃袋にはブラックホールでも装備されてるのか？」

「あひゃひゃ やだナー」

いくらあたしが腹黒いならってさすがにブラックホールは食えないよ」

食べれるか聞いてねえよ。でも不知火なら実は食えるかも

「あ、でもあたし恭闇なら食べれるかもよ」

こわっ！？いきなり鳥肌が立ってきたわ。しかも笑ってるけど目が補食者なんだけど

「買い食いはもとより・・・、校内におけるみだりは飲食も校則違反です！」

「あっ！」

「お、お前はっ・・・」

『まさか』

『「露出委員会の」』

「風紀委員会の鬼瀬です

！！」

露出委員会について知りたかったら前の話を見てね

「不知火半袖さん！あなたの噂は聞いてますよ！

ついに現場を押さえましたよ！

ちよつと一緒にきてもらいましょ……」

善吉はふと不知火を見ると袋に入っていたパンを上にはけると一瞬ですべて腹の中に収まった。そして何事もなかったように

「え？なんですか？

やめてくださいよ。何か証拠でもあるんですか？」

「証拠はあなたの顔面です！！」

と言った

『不知火に食べカスがついてるぞ』

「サンキュー恭賀」

俺は汚れた不知火の顔を拭いた。だって汚れたまんまだとだめだろ。いおよう女の子だし

「その反抗的な態度（双神くんに世話をかける）！肅清に値します

！そんなに空腹ならば精々齒を食いしばるがよいでしょう！！」

『ちよつ、待つてく…………』

にやりん

「サンキュー恭闇！」

『悪いな善吉！』

「うづつ！！」

危なっ！！不知火が鬼瀬の方に押してきたので思わず善吉を先に前に飛ばしてしまつたぜ

「あひやひやひや残念

まあ学園警察だか手錠メリケンだか知らないけどあんまトンだりハネたりしないほーがオススメだよ。

無茶な取り締まりやつてるアンタ狙つてる奴もいっぱいいるんだから。

恭闇、こんど一緒に食べようね〜〜〜」

なんか意味ありげな事言つて去つていったぞ

「くつ、待ちなさいっ！」

「やめとけよ鬼瀬。あいつは適当にメシ食わしときゃ無害な奴なんだから。

ある意味めだかちゃん以上にアンタツチャブルだぜ。あと恭闇は許さねえ」

『無意識なんだ。うん、仕方ない』

「お前はやる前から悪いなって言っただだろーが！」

ちっ！善吉の癖にわかってやがる

「だからと言ってほとくのは風紀委員の名がすたりま・・・」

ピンッ

「あ？」

何やってんだコイツら、

手錠なんかして

「うつわー完全にハマっちまってる、まさか不知火もここまで企んではなかっただろうけど・・・」『でもなかなかスゲーな。ビクともしてねーぞ』

「本物の軍隊でも使用している特注の手錠です。その辺のオモチャと一緒にしない方がよいですよ？」

「なぜ自慢げ」

『軍隊で使ってる手錠を持っているなんてスゴいですね』

「そ、そんなことないですよ／＼。普通ですよ／＼」

「（普通で軍隊で使ってる手錠は手に入らないと思うがな）」

「そ、それより、敬語はやめませか？同じ年ですし」

『え、いいの？いやーやつぱり敬語は窮屈で助かったわ』

「（敬語直すのはやつ！！）まあいいや、俺は何も悪いこととしてねーんだし

鍵！

早くこれ外してくれよ」

善吉盾によかったわ。何もしてないのに手錠するなんてゴメンだな・
・、ん

なんか鬼瀬止まってねえか

「・・・・・・・・」

「ほれどうした？
鍵！」

「私は風紀委員会に属する者として常に不退転の誓いを立てており
つまるところそれは自らの退路を断ち背水の陣をしくことにより言
うなればあらかじめブレーキを外しておくことで・・・・」お前
の主義とか聞いてねえよ、

鍵！「・・・・・・・・」

「そもそも鍵とは何かという話をしましょう。はたして私達が鍵だと
信じて疑わない物体のうち何割くらいまでな鍵なのでしょうか？」

「てめえさては鍵持ってねえな？」

これはこれはおもしろい展開になってきたな

「恭闇もおもしろい展開になってきたなみたいに思っ
てんじゃねーよ」

こいつなんで！？

まさか異常を超えてエスパーか！？

「全部顔に出てんだよ！

それより鍵だ鍵！」

「ぐつ！ええそうですよ、そんなかつたるいもの持ち歩
きませんよそれが何か！？

全くこの程度の窮地でオタオタと情けない！

生徒会執行部の器が知れるというものですね！」

「いやお前が大丈夫なら俺は別にいいんだけどさ、
これから先の俺とお前に風呂も一緒、寝るのも一緒のわく
わく動物ランドが待ち構えているのかと思ってよ」

『いやそれセクハラだから善吉くん。
それにほら』

「女子を泣かせてしまった！！」

鬼瀬の方を見ると大泣きしていた。そりゃ泣くだろ
うな、あんまりだあああって叫んでるし（双神くんならよかつた
のにと叫んでい

ます)

『ほらあんま泣くなって』

そう言いつつ撫でると抱きついてきた。胸が湿ってきてるよ

「うう・・・ぐす・・・ぐすん・・・、
グフフフ」

「おいなんか聞こえたぞ！この状況を利用して笑ってるヤツの笑い
声が聞こえたぞー！」

ん、善吉がなんかわめているが聞こえねえな

「・・・仕方ありません。こうなったら人吉くん恭闇くん、風紀委員
会室まで同行してください」

まあ暇だしいいか

「はあ？だから俺は何も悪いことしてねーって・・・」

『バカか？ならどうやって外すきだよ』

「そうですよ。この手錠は風紀委員会の備品です。
ならば本部のどこかに鍵はあるでしょうし、なくてもきつと委員長
がなんとかしてくれるでしょう」

風紀委員室か。ん？そいえば前に会ったあのガキも風紀委員だった
っけ？

ああ、一気に行く気なくなつたな

『俺帰るわ・・・・・・・・』

ガシッ

『・・・・なんで掴んでんだ善吉』

言葉どつり善吉が俺の腕を掴んでいた。それはもう二度と離すかつ
！！と言わんばかりにガツシリと

「俺を置いていかないでくれ！！俺は・・・・俺は周りに知ってるヤ
ツがないと寂しくて死んじゃうんだ」

『てめーはウサギか！！』

善吉が離さねえから結局俺も行く事になったが周りの視線はどうに
かなんねーのか？やっぱ帰るか・・・・、いや帰らないからそんな
目で見んな善吉

「なあ鬼瀬、さっき不知火が言つてたけどお前誰かに狙われてるの
？」

「ええまあ、逆恨みされやすい立場ですからね。

そもそも私は本日その不届き者達の取締まりに向かうところだったので人吉くん、木金コンビって知ってます?」

「モツキン? かばちゃワインのコワイ先生か?」

「それはテツキン!」

『善吉……』

「いや自分でも分かってるからそんな目で見るな!」

なら最初から言うなよ

「木金コンビと言うのは木製バットと金属バットを得物に使う2人組の有名な不良なんですけど……、

一度取締まりましたがどうも懲りてないようで、さらには私を逆恨みする有様です」

そいつはひどいな。でも両方金属バット使った方がよくないか。キヤラ作りも大変だな

「安心してください。恭闇くんをそこまでつき合わすつもりはありませんから。あと人吉くんも」

「俺が被害者なんだからまずは最初に俺の名前を言えよ!!
まあ確かにこんなみつともない姿人にさらしたくねえし……」

おお、善吉がそこまで言うともまるで狙ったかのようにめだかが現れたぞ。でもなんか様子が変だな？

うおー！？俺を見たらなんかオーラが！？負のオーラが！？

「た、確かに私も生徒会と風紀委員会の・・・伝統的な不仲について憂いて・・・おった」

めだかがぶつぶつ言ってるが発している負のオーラで全然耳に入ってこねえ

「（ちよつと人吉くん、あれって本当に生徒会長なんですか）」

「（信じられないだろうがその通りだ）」

信じられなくて当然だろういつも凜としているめだかがゲッソリして髪もいつものツヤがなく周りに負のオーラを撒き散らしているんだから

「この私を・・・出し抜くとは・・・大した・・・奴ら・・・だ」

どうやらめだかが言い終わったようでバタリと倒れた。流石にこれは駆け寄ったがぶつぶつなんか言っている。口に耳を近付けると

「き、恭闇分が・・・」と言っている。怖っ！？

「（ちよつ、これどういう事ですか）」

「（前のお前の露出委員会の際に恭闇が触れるの禁止にしたんだよ。それでみるみる内にめだかちゃんがこんな感じに）」

「（な、なるほど。後次露出委員会って言ったら殴りますからね）」

こっちとしてはちょっとした罰のつもりで言ったのに

「（なあ恭闇そろそろ罰を解除してくれ。実際このオーラが気にな
って仕事に集中できないんだよ）」

まあいいか

『よし！めだかも反省したようだし、罰をかいじ・・・ぶはっ！？』

こゝこいつ

解除言う前に抱きついてきやがった。しかもそのせいで10メート
ルくらい飛んだし。しかも飼い主を見つけた犬みたいに顔をペロペ
ロ舐めてきやがるし、

とりあえず頭撫でておくか

10分くらいしてようやく解放された（解放といってもまだ抱きつ
いたまま）。めだかも前の姿に戻った、いや何故か前より髪や肌の
ハリが良くなってるんだけど。なんかそれ見て鬼瀬が「私も舐めよ
うか、いやいや私は風紀委員だ」て葛藤してるし

「あ、そうだからかちゃんピッキングできたよな」

「
」

「あの、めだかちゃん？」

「
」

「聞こうか！？とりあえず1回話聞こうか！？」

「む、なんだ善吉。

今恭闇分を補充しているのだぞ、邪魔するならば貴様だろうが神だろうが許さんぞ」

「ええっ！？そこまで」

まあめだかなら神もいろんな意味で倒しそうだ

『とりあえず話くらいは聞こうな』

「それより補充が大事なのだな。ピッキングなら出来なくはないな」

「やっぱり！

だったらこれ外してくれよ！！」

「ふむ、よからう。

どれ鬼瀬同級生

もう1本の手錠を貸すがよい」

ん、なんか今嫌な予感がしたな。ニュータ。プばりに感じたな

「よいか？まずこんな具合に手錠がかかっておるだろう？」

ガチャガチャン

あれ？なんで俺に掛けた

「であるからしてこのように……このように……」

あれ？なんでこんな必死

「このように……このように……このようにとてもよい手錠を
使っておるな！」

「（事態が際限なく悪化していく……）」「」

『てか俺に手錠やる必要なくねえか……！』

「そうですよ！私はこんな相手なのに……！」

「いやこんな相手って……」

「うむ、確かに。なら」

ガチャン

あれ？なんか俺のもう片方の手にも手錠が掛かってるように見えるが

「これで問題なかつ」

『「いやむしろ問題発生したから!？」』

何故俺は両手を手錠を掛けられなきゃならないんだ

「これで鬼瀬同級生も文句はなかるう？」

「まあ妥当なところですね」

妥当ってなんだ!!むしろ俺の文句が増えたわ

まあいくら文句を言っても解決しないので風紀委員会室に向かって
います

「待て、あそこで人が困っているようだ」

全然進みません

俺の両手に手錠が掛かってから1時間くらいがたつが一向に前に進まねえ。行くところ行くところまるで配置されてるかのようにつける人がいて助けているからな。もしこれが達磨（神）の仕業ならしく

「確かに連れていっちゃマズいですけどそれは到着しなくてもいいってことじゃありませーんっ！..」

とうとう針音がキレた。

まあ分からなくてもないがな

ん、何か前の曲がり角から木製バットがチラチラ見えてんだけど、後ろは金属バットだ。あゝ例の木金コンビだっけ。3人は話中だし片付けるか、うさはらしに

コッ！コッ！

バッキイイン！！

説明しよう。

恭闇が靴の先端と踵でチョコツと石を蹴るとそれがはみ出ていた前の木製バットと金属バットに当たり粉々になった音だ。その動作が速すぎてほぼ同時に碎けた音だったが。もちろん木金コンビには速すぎて何がなんだかわからない

「.....」

ピューーーーーー

あ、木製と金属が逃げやがった。せつかく出てきたのに台詞がないとは可哀想に木金コンビ

「木金コ・・・ンビ？」

まあ何もしないでいきなり逃げたらこうなるわな

「なんなんでしょうか？」

「さあな、俺はそれよりバットが砕けてるのが気になるが」

「うむ、私も砕く位はできるが私ではないな」

「まあ位置的に考えて私達は無理ですね・・・、今砕けるって言いましたか？」

「言ったな」

「なら手錠のわっかも壊せませんか？」

「ん？なんだ、壊してもよかったのか？」

そのときの俺達の落ち込みようはハンパなかった

「・・・以上が鬼瀬委員からの報告です。まあ2回連続の失態ということで彼女には謹慎を言いつけようと考えておりますが」

「いーよ別にキンシンとか鬼瀬ちゃんがかワイソーじゃん。それより黒神めだかのコトもつと聞きてーな。

呼子！テメーは黒神のコトどう思うのよか？」

「・・・あえて言わせていただくならばさながら聖者のごとしですね。例の目安箱のことにしてもそうですし常識外れに高い支持率も頷けるというものです」

「ケケケ！まーそんなトコだろ。でもな呼子。オレ達風紀委員会からしてみりゃーその聖者つてのが一番やっかいなんだ

正義と聖者は

相容れねえ」

学園に嵐が吹き荒れようとしていた

「それにあの眼帯にもな」

10話 闘いの火蓋が開かれた（前書き）

やばい更新感覚が長くなってきた。なんだか書く意欲が・・・

だが一旦書き出したものをそんなことは言ってられないな

これから頑張るまっせ

10話 闘いの火蓋が開かれた

平和だ……平和すぎる。

今日は生徒会は休み（サボリ）だしこんな日はおやすみタイムに突入【プーーーー】にかぎ【プーーーー】

うん、大丈夫。睡眠を吹奏楽のクソ共に邪魔されたと言って俺は怒らな【プーーーー!!】

『生徒会を執行する!!』

これはあくまで生徒会の仕事であって別にうるさいから殺すや邪魔するから殺すなどの私情は入ってないからね。なーに少し暴れるが頭に衝撃を与えて記憶は残さん

『おつと言いついてる間に音楽室に着いたか。』

さあ楽器の音を悲鳴と絶望の音にかえてやる（思いつきり悪役）『

「（ギャーーーーっ!!）」

「（いやーーーーっ!!）」

「（助けてーーーーっ!!）」
……………

『もっかわつとる!?!』

いやいや俺まだ何もしてないよ!?

それに激しく嫌な予感しかしねえ、この中に入ると取り返しがつかないほどめんどくさい事になるのが99%だ

だから俺は・・・

『誰かが注意してくれただろ。』

よし、静かになったし今日はもう帰ろ「ケケケ!誰か居んのかよ」
『う』

『「・・・・・・・・・・」』

最悪のタイミングで最悪の奴が出てきたっ!!

「ケケケ!テメーか恭闇。今日は最高の日だな、風紀員会を執行したしテメーにも会えたんだからな」

『俺は会いたくなかったがな。そんじゃサイナラ・・・・・・・・』

「まあ待てよ、せっかく会えたんだ。少しばかり話といこーぜ。まあ中は少しばかり散らかってるがな」

こうして俺は音楽室に引きずられていった

音楽室の中に入ったが・・・うん、あきらかに散らかってるってるってレベルじゃないね。そこら辺に死体（いや生きてるから）が散らばってるし楽器やらテーブルやらが穴が開いてボロボロだし

「ケケケ！まあ座れよ」

『お前が袖の中に隠してるスーパーボールを投げない保証があるならな』

「ケケケ！やっぱりお見通しかよ。上手く隠したと思ったんだかな」

大抵の奴は騙せるだろうが俺から見たらバレバレだ

「この前は痛かったぜ。まさか俺の特服が一発でおちやかになるとはな。テメーはサイボーグか何かかよ」

『生憎だがただの普通の一般人だ』

「ケツ！ただの普通の一般人がオレの特服を一発でおちやかにできるかよ！」

ちっ！やっぱり面倒事になっちまったな。何であの時耐えなかった俺！

「しっかし何でテメーみてーなバケモンが普通になろうとしてんのか意味不明だぜ。まさか普通になろうとすれば普通になれるとでも思ってたのかよ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・思っちゃいねえよ』

「ケケケなら何でテメーは普通であろつとすんだよ。テメーを数日見てたが窮屈そうだったぜ。テメーは普通の人間を渴望してるがそいつは無理な話だ」

『それは俺が一番知ってる』

「ケツ！ならもう一度聞いてやるよ。なんでテメーは普通であろつとすんだよ」

『俺が普通でありたいと思ってるからだ。それだけじゃ理由にならないか？』

「前にテメーの目を見たときに感じたぜ。テメーの目の奥では人間に絶望してる。下手したら人間を殺し尽くしたいほどにな」

『確かに・・・な。』

だが俺は普通であろつとするよ。もしも俺の心が壊れるまでな』

ガラッ！

俺が言い終わるとまるで見計らったように扉が開いた。そこにはめだか、半袖、針金がいた

「・・・・・・・・ツ！？」「」

『話はおわりだな』

「ケケケそうだな。」

おっ！鬼瀬ちゃんタオル持ってきてくれたんだ」

「あ、は、はいっ！」

針金はあきらかにこの光景に戸惑ってるな。めだかはどちらかと言うと少し怒ってるな。半袖は……うん、普通

「……なぜ恭闇はここにいるのだ？」

その目は純粹に疑問を抱いている目だ。大抵の人はこの光景を見れば一緒に中にいた俺と雲仙を疑う筈だがめだかは俺を信じきっているから疑ってないようだ。元々やってないけど

『ああ、サボっ「サボ？」……、音楽室がうるさく周りに迷惑だろうと思って注意しに来たらもうこの有り様だった』

あつぶね、つい正直にサボってるって言うところだったわ

「で、なに黒神めだか？」

なんでデメーがここににいるわけ？」

めだかと話していると丁度返り血を拭き終わり雲仙が話掛けてきた

「どうやら互いの仕事がバッティングしてしまったようだ、貴様との初めての対話がこんな形になってしまっただけ残念だぞ雲仙2年生

この光景の事情はおおよそ察しがつくがしかしどう見てもやり過ぎだな。

ここまでする必要がどこにあった？」

めだかが鋭い目線で言うが雲仙はどこ吹く風のように全然気にしていない

「ケケケ安心しなよ、保健室にはあらかじめ連絡済みだ」

「……そういう問題ではない」

「ケケケ！オレの方もテメーのそのふざけた格好見りゃー察しがつくぜえ？

どーせ平和的解決を目論んでたんだろ？話せばわかるとか事情があるとかそんなトコだろ？」

そこまで話すといきなり声を粗げだした

「甘えんだよ！！

話してわかるか！

事情なんか知るか！！

ルールを破った奴が罰を受けるのは当たり前だろーが！それをなあにボ力しちまったら事情さえあれば許してもらえつつっておんなじことを繰り返すに決まってるだろーがよ！！

やり過ぎなけりゃ正義じゃねえ！

それが俺のポリシーだ！」

確かに雲仙が言ってることは一理ある。一理だが

「不正を正すことがオレ達の唯一の目的だ。暴力も武装もただの手段に過ぎねえ勿論黒神！テメーと敵対するつもりもテメー率いる生徒会執行部と敵対するつもりも……あるっ
っ」

雲仙が最後に楽しそうに話すと何かを飛ばしめだかの左額辺りに当たった。もうすでに赤くなってるあたりかなりの威力でぶつけられたんだろう。しかし雲仙は少しおかしいといった顔だ

「……？おかしいな今はアイサツ代わりだぜ？見えねーまでも避けれるくらいの手加減はしたつもりだけど？」

「……貴様から攻撃される理由がない。ゆえに避ける理由がない」

めだかは何事もなかったかのようにケロッツとして首を鳴らしている。これを見た雲仙は面白そうにしていた

「へえ、面白いこと言うじゃん……もっぺん同じコト言えたらベタ褒めしてやんよー！」

雲仙が腕を振ると今度は下から何かが顎をかち上げたしかもさつきより全然速く勿論威力も高い。

そのセリフ俺のときも言っよな

「ケケツ」貴様から攻撃される理由がない。ゆえに避ける理由がない。言ってやったぞ、褒めるがよい」「

「（こりやすげえわありえねー。心身ともにバケモンだぜ黒神めだか！）素晴らしい」

うん全然効いてないなめだかの奴。それどころかほんとに褒めると言ってるし

「や、やめてください委員長！黒神さんの言う通りです！今生徒会と敵対する理由なんかないじゃないですか！！」

お？針金が叫んでる。てかさっきから居たのに久々に話したな。影薄いんじゃない、ガンツ！！・・・なんでもないです

「理由ならあるじゃねーか鬼瀬ちゃん。いつの時代も正義は聖者を弾圧するモンだろ？」

「ふざけないでください！これ以上の暴力行為は1人の風紀委員として見逃しません！！」

「ケケ！このオレ相手に随分と言ってくれんじゃん。好きだぜーオレ！鬼瀬ちゃんのそういうトコ！」

「（・・・今のセリフ恭闇くんに言われたいなあ）」

ん、針金がこっち向いてため息ついてるがどうかしたか

「だけどやっぱり理由はあんただよ。ここで会ったのはただの偶然だがここで会ったが100年目、正義と聖者は相容れねえどっちかが潰れるしかねーんだよ」

雲仙が楽しそうに笑いながら言うが明らかに笑いながら言うことじゃないよな

「黒神イ

テメーのスタイルって上から目線の性善説とか言われてるらしいじゃん、

だったらオレのスタイルは見下し性悪説だ！テメーが花を育てる側

ならオレは芽を摘む側なんだよ!!」

うつわーこれが正義ならオレはグレるわ

「確かに私と貴様では主義が違ふようだが、しかしそれは話し合いで解決できるレベルであろう。敵対する理由は変わらずないぞ」

「ケケケとことん上から目線だな黒神! だっけどもうそんなレベルじゃねーとオレは思うぜえ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
な

んせオレは

生徒会潰しのための刺客を3名既に放ちまってるんだからなあ!!」

『「!!」』

「テメーみたいな奴にはこういうのが1番効くんたる? オラもっぺん同じコト言ってみな。それができたら褒め殺しにしてやんよ!」

雲仙が心底愉しそうに笑った

「・・・・・・・・やれやれ愚かなことをしてくれたものだな」

「あゝ?」

雲仙が不機嫌そうに言い返す。まあ当然か愚かなと言ってきたんだからな

「不知火ここは任せたぞ」

「はい？」

「今度私が手ずから満感じ漢全席を振る舞ってやるから、頼むよ」

『俺からも頼むわ半袖』

こりゃ少しばかり気合い入れなきゃならないからな
そう言い目の包帯を外した

「相変わらずだな。こんな時でなければ真っ先に抱き着いていたものを」

『そりゃあ今度だ。
行くぞ』

そう言い駆け出したが勿論アイツが黙って行かせる訳が無かった

「あ！？どこ行こうってんだよ黒神！双神！

お仲間を助けに行こうってか！？

今からこっから間に合うワケねーだろが！ムダな悪アガキしてんじやねーよボケが！！」

そう言い雲仙が俺とめだかにスーパーボールを何個か投げてきたがこっちも邪魔されたくないんでね。全て蹴り返してやった

2：00

「確かに間に合いそうにはないが何が無駄なものか。誰かが傷つこ

うとしている、なのに駆け出さない私の方がよっぽど無駄だ!」

『間に合わねえ訳ねえだろ俺とお前がいるのになあ』

「フツ、そうだな」

「な、なんだ今の？」

髪の高い女と見たことないような男が分身しながらすげー速さで走ってたぞ」

「いやあれ生徒会長でしょう?」

「ああなんだ普通だ」

「「「普通だ」」」

「え、じゃあ男の方は？」

「・・・・・・異常だ」

「「「異常だ」」」

雲仙視点

「ちつ、相変わらずのバケモンだな」

アイツが蹴り返したスーパースポール、なんとか射ち落としたが後0・1秒遅かったら直撃してたな。
ケツ！まあさつさとアイツらを追うか

「……………」

なんだコイツは邪魔する気かよ

「何のつもりだあ？エアオツパイ」

「いつやあ~~~~」

本当はこーゆーの不本意なんだけど、でも任されて頼まれちゃったしい？」

「は？なんだそりゃ？」

デメーでオレが止められるとも思っのかよ」

「思っね思っね思っちゃっね！だあーって風紀委員長アンタ

校則違反してない生徒には手エ出さないんでしょ？」

チツ、少しは頭が回るようだなこのエアオツパイ

「鬼瀬ちゃん、コイツがこないだ言ってた不知火だろ？今日はコイ

ツ廊下でモノとか食ってなかったか？」

「……はい、食べていませんでした」

「……ハン、

だったら仕方ねーや。いいいいいよ」

食ったようだが鬼瀬ちゃんが違うって言うなら仕方ないないな。
俺も見ただけじゃねえし

「ならばこの際高みの見物って奴をさせていただこうぜ。バケモン
女とバケモン男の文字通りの悪足掻きをなあ！！！」

恭闇視点

20位走ったがやっと1人見えてきな。あれはもがなか？そして後
ろで鍵爪付けてマッシュルームのヤツが風紀委員か

『めだか任せた』『うむ』

黒神リアット

「ぐっはあああ！？」

「鍵爪とは随分渋い道具を使うようだが、しかしそれは女子に向けるには少々物騒だな。
能ある鷹なら爪を隠せ！」

そう言いめだかは風紀委員もろとも窓から飛び降りた。言っとくがここ4階！

「ひゃっあああああああああああああああつっつ
こつこつこつこつ怖えええええええええつっ！！」

「おい貴様あまりはしゃぐな落下がズレる」

「はああ！？こんなもんどこに落ちたって同っ」

ボフっ！！

『そうだぜ。それに駄キャラが無駄に文字数とるな』

めだかより先に下に回ってキャッチしたが風紀委員のヤツは完全に目エ回してるな。それに落ちてきたから騒ぎになってるし

「おいおいどうした隕石か！？」

「いや空から男が地面に落下してきてその後落下してきた女の子をキャッチしたんだ」

「なんだその現象！？そして地面！？」

「そう！ここに着地すれば貴様が駆け寄ってくれると信じていたぞ
諫早3年生！さあ私にスパイクを貸してくれ、久々に本気で走った
ら靴が壊れてしまったのだ！」

「は、はぁ・・・」

めだかが半ば強奪？でスパイクを仮に手に風紀委員が使っていた鍵
爪を着けた

「うむ、助かった」

『悪いな、今度なんか奢るわ』

そう言い俺らは駆け出した

「2階・・・いや3階までは行きたいな。それで20秒は巻けるで
あろう」『めだか鍵爪外せ。俺が蹴り飛ばす』

「しかし私はスパイクだぞ。だから鍵爪をしたんだ」

『俺が蹴り飛ばす方が早い早くしろ』

「うむ、本来は恭闇を傷つけるような事はしたくないのだが、仕方
ないか」

そう言い俺が蹴る様に足を上げようとするとめだかがその足に乗り
蹴る勢いでめだかが3階に飛んで行った

1:10

『ビンゴー!』

その後俺は普通に3階に跳んでいった

「・・・今スパイク履いた女子がグラウンド側の窓から飛び込んでこなかったか？」

「うん・・・多分生徒会長だったと思うんだけど」

「そつかじゃあいつも通りの普通じゃん」

「「「普通普通」「「「シュッ

『さてめだかを追うか』

「「「「・・・」「「「「

「「「「異常異常」「「「「

お、2人目が見えてきたなあれは阿久根か？

そして後ろにいる自転車2台持つてるのが風紀委員か。めだかじゃ間に合わないか、仕方ねえ先行くか

「（くらえ！俺様のダブル自転車殺法！）」

ガシ

『テメーら風紀委員会は物の正しい使い方をしらねーようだな。それに自転車を武器に使いたいならこれくれえやれや』

そっつい自転車縦に潰した

「（こっ、怖えええええっつっ！！）」

『めだかもう1つの自転車使え』

「うむ」

「今スパイクの女子がママチャリで80?ノh出してたぞ!!あり
やきつと生徒会長だ!」

「なっにいゝゝ!?!?
生徒会長だつてええ!?!」

なら普通だね。一瞬生徒会長じゃないのかと思って驚いちゃった!」

「え、でも今同じくらいの早さで男子が走って行ったよ」

「・・・・・・異常だ」

0:50

『意外と順調だな』

「ふむ、このペースなら意外と何とか・・・・!!」

めだかと前を見ると階段に武装した風紀委員42人が通行止めをし

ていた

「悪いがここは通行止めだぜバケモン女さん、副委員長呼子先輩からのお達しだ。あきらめる理由ができてよかっただろ？」

生徒会室に帰って紅茶でも飲むんだな」

「ふん、気遣い痛み入るがしかしそれは聞けんよ。

無駄な悪足掻きは終わらないし無駄な私も始まらない。私は生まれてこのかたあきらめたことがない。

無理であろうと不可能であろうと私はがんばると決めた。だからがんばる！！」

さすがだなめだが、そんなテメーだから俺はテメーに付きあってたんだ

『めだか行け！』

俺はめだかが乗る自転車を階段の上まで投げた。風紀委員のヤツらはバカ面して眺めてるがそうしていいのかな？

次には42人いた風紀委員が全員宙を舞った

さて、めだかはもう終わってるだろ

「ああ？任務失敗？
どいつがよ？全員！？」

「はい、申し開きのしようありません。吉野ヶ里、国東とも連絡を取り合いましたが……援軍を含め風紀委員前線部隊44人、黒神めだかと双神恭闇にはばまれました」

「……ケケケ！スゲーなオイ。本当に間に合ったのかあのバケモン女とバケモン男、どんだけバケモンなら気が済むんだよ。」

「いや深追いすんな呼子。黒神めだかが殴られたらちゃんと殴り返すやられっぱかしの無抵抗主義者じゃねーってわかったただけで収穫だよ」

「「いえ委員長、確かに彼女は無抵抗主義ではないようですが……、黒神本当はスパイクを返し恭闇とイチャイチャするとかですぐどこかへ行ってしまったのですが、後に残った人吉善吉庶務が少々気になることを言っております……」」

「呼子先輩」

カン違いしないでくださいよ。めだかが助けたのは俺達なんかじゃない、むしろ助けられたのはアンタ達の方なんだからな」

!?

「ど、どういふ事なんです」

「そのまんまの意味ですよ」

喜界島自身はただの大人しめの女子ですけどもバックにはあいつを
実の娘のように愛でているヤベエ２人組がいますね、今まで喜界
島に手エ出して無事に済んだ奴はいないそうです。

阿久根先輩は阿久根先輩でマジでヤベエ。どーもどーやら鍋島先輩の指導を受けてだいぶ丸くなっちまったみたいですけど中学時代のあの人は人間壊しを趣味のとんでもねー悪党だったんですから。

そしてあいづらほどじゃなくてもこの俺だって相当ヤベエ

俺はめだかちゃんの敵ならば先輩だろうが先生だろうが容赦できない番犬だ。そのふざけた鎖が俺の制服にかすりでもしてたらアンタ今頃自分の足で立ってないですよ。

助けられたのは誰か、

守られたのは誰か、

よく考えてみることでですね。

ああ、後双神には絶対手を出さない方がいいですよ。手を出さないめだかが怒り狂うし、あいつ自体とんでもないヤツですから。ぶっちゃけめだかちゃん以上に強くぶち切れればあんたら風紀委員会、

学校ごと消えてたかもしれませんよ」

「……勿論彼の言ったことの大半はハツタリでしょう、私達も連中にただ負けていたとは思いません。しかし無傷では済まなかったであろうこともまた事実！

実際黒神は風紀委員の人間を誰１人として傷付けてはいません。結論として！
黒神めだかの行動原理は殴られたから殴り返したとかいうものでは全くなく！

生徒会と風紀委員会
双方どちらからも犠牲者が出ないよう争いを事前に止めたかっただけとしか………」

グシャッ

「！？」

（雲仙委員会？）「

「あーあ大っ好きな 아이폰がぶっ壊れちゃったぜ。新型に機種変したばっかなのによぉー誰がどえ責任とってくれんだよなアコレ！」

仲間を助けたかったんじゃないやなくて敵味方ともに守りたかった？

何それ？

どういう意味だよその聖者っぷり！

神様にでもなっ たつもりか？

ただの偽善者ならテキトーにいじめた後取り込んでやるつもりだったんだけど

そこまでイカレたホンモンの聖者だってんならゲーム感覚で殺戮してやんよ！」

ドゴンッ！！

「ケケケなるほど確かに防音設備に問題があったようだな。こんなプリティなお子様が軽くケットバシタだけで大穴が開いちまうなんていかにも脆すぎるぜ
なあ鬼瀬ちゃん？」

「は、はい・・・」

（信じられない・・・。）

老朽化してるとは言えドアよりも大きく壁をぶち破るなんて私でも無理ですよ）」

「よーエアオツパイ、オレこっちから出て行くつもりだけど、それも止めてみる？」

「・・・いやあ

あたしが頼まれたのはここであって、そこは管轄外かな？」

「あつそ

お役所仕事ゴクローさん

ああそうだ鬼瀬ちゃん、
ひとつ伝言頼まれて」

「え？」

「風紀委員会総員に通達・・・全員速やかに帰宅せよ。
明日誰かに聞かれても自分は無関係だってアリバイ作つとけ！

ここからは男1匹雲仙冥利の個人的な戦争だ
ケケケ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1994p/>

普通を求めた最強異常者

2011年8月15日18時44分発行